日田文化

67

２０２５．３

日田市教育委員会

日田文化

六十七号

序　文

日田市は、北部九州のほぼ中心に位置し、大分県の西端にあります。

本市は、緑豊かな美しい山々とこれらの山々から流れる川が合流する盆地で形成されており、そこで生活を営む私たちは、山々からもたらされる水資源の恩恵を日々受け続けています。

古くから先人たちは、この恵まれた水と自然から、様々な文化を、この日田の地に築き上げてきました。このような土地で生まれ、育まれた文化や歴史を広めることを目的として、『日田文化』は発行されています。

また、中に収録されている年次報告は文化財保護の取組を広く発信することを目的とし、日田市の文化財保護部局が前年度に実施した事業の概要等を掲載しています。

さて、本書には年次報告のほか、二本の原稿を掲載しております。大神 信證氏には、日田市の小中学校教諭で郷土史の研究等に尽力された故 野田 髙巳氏の追悼文をご寄稿いただきました。そして、綿貫 俊一氏には、天瀬町五馬市にある旧石器時代の遺跡調査の報告を記していただきました。

本書が、本市の歴史文化の解明に資するとともに、文化財保護の取組への理解や、その普及の一助となれば幸いです。

最後になりますが、今回執筆していただいたお二方はもちろん、日頃より本市の歴史文化の継承・発展にご尽力をいただいております方々に対し、心から感謝申し上げます。

令和七年三月

日田市教育委員会 教育長　江嶋　久典

例言

一　本書は、日田の原始時代から近現代に亘る歴史や文化について、調査・研究した成果を周知することを目的に、機関誌として昭和三一年（一九五六年）に創刊された『日田文化』の第六十七号である。

二　本書には、論考・論文等のほか、年次報告（年報）という形で、日田市教育庁文化財保護課が令和五年度に実施した事業の概要等を収録した。

三　本書は第六十七号からデジタルによる発行となり、日田市公式ホームページ上に掲載する。

四　本書掲載の論考・論文等は内容により、縦書き原稿、横書き原稿が混在するため、掲載順は縦書き原稿、横書き原稿、年報とし、縦書き原稿の頁数は漢数字、横書き原稿の頁数はアラビア数字を記載している。

五　「年報」部分について、三船が作成した。

六　本書の編集は、三船が行った。

目次

元文化財調査員野田髙巳先生を偲んで　大神　信證　1

日田市天瀬町五馬台地の旧石器時代遺跡
―大坪遺跡と宇土遺跡の旧石器時代資料―　綿貫　俊一　3

［日田市教育庁文化財保護課年報］　72

Ⅰ．令和５年度組織体制　74

Ⅱ．文化財の指定　76

Ⅲ．普及・啓発　84

Ⅳ．資料収集・保存　89

Ⅴ．その他　89

Ⅵ．文化財保護課事業の概要　91

元文化財調査委員野田髙巳先生を偲んで

生年　昭和二年八月生
没年　令和五年七月三一日　九五歳

功績内容

氏は昭和二三年に大分師範学校本科を卒業の後、本市小学校教諭として赴任、以来、四〇年間小、中学校教員として学校教育に尽力し、昭和五三年に退職される。

その間、音楽活動の啓蒙、振興を図るべく、昭和四八年には日田市民合唱団を、昭和五一年には、小、中学校を中心とした日田少年少女合唱団の結成に参画、更には、音楽教育活動のみならず、社会人音楽活動団体との連携、相互研鑽を目的に、全市的な音楽活動の振興を図るべく日田市合唱協議会の結成に尽力し、今日の音楽活動振興、活性化の礎を築く活動を長年勤められました。

又、昭和六二年、文教施策として芸術文化全般に亘る活動の振興、活性化を目指し設立された日田市民文化振興基金事業に参画され、募金形成に係る募金委員として活動され、又基金事業実行委員会委員長とし活躍されました。

履歴（略歴）は以下のとおりです

履歴

昭和二三年三月　大分師範学校本科卒業。以来、日田市立光岡小学校、西部中学校、三隈中学校等、音楽、社会科担当教諭として赴任。
昭和三四年九月　日本大学通信教育部文学部史学科専攻終了。
昭和四八年三月　日田市民合唱団を結成。団長、指導者として活動。
昭和五〇年四月　日田市合唱協議会を結成。会長に就任。
昭和五一年四月　日田市少年少女合唱団が結成され指導者に委嘱される。
昭和五四年　日田市教育委員会学校教育課長を歴任し、昭和五三年三月、咸宜小学校長を最後に退職。
昭和六二年四月　日田市民文化振興基金実行委員会委員長に就任。
平成元年四月　日田市文化財調査委員会委員（郷土史部門）に就任。
平成七年一一月　日田市政功労者表彰（教育文化の振興）
平成二三年　大分県知事表彰
平成二四年　秋叙勲　瑞宝双光章

活動の歩み

野田髙巳先生は大分師範学校を卒業の後、小中学校教諭としてお勤めになり、他に音楽、特に合唱の指導に当たっておられました。各学校や団体のコーラスの指導をされ多くの市民がお世話になりました。日田市功労者、県知事表彰さらに叙勲はこれらの功績であったと存じます。

さらに今回、当市発行の「日田文化」に先生の功績の一端を振り返り記録をいたしますのは、長年の文化財調査委員会でのご活躍です。現在は日田市の条例改正によりこの組織はなくなりましたが、日田市の郷土史に造形の深

い先生方が年に数度は会合を持ちそれぞれの研究課題や日田の歴史の現状などの意見を交換し合う場となりました。これらの先生方が「日田文化」執筆にも関わってきました。

野田先生は昭和三四年に日本大学史学科の通信課程を修了され、歴史に対する思いが強くおありになったことが窺い知られます。先生の誕生以来変わらずお過ごしになった日田市小野地区の歴史について愛着と深い興味があったことが、その活動の中からうかがえます。

昭和六三年一月一日創刊の『へくそかずら』は小野地区の文芸、歴史などを地元の人々が投稿して出版した文芸書です。

その中で、先生は小野地域の歴史で「寒水合戦」「平城岳合戦」「英彦山塵古集」「岳滅鬼婆のこと」「佐藤氏のこと」「小野篁伝説」「戸山の延命院他山中修験坊のこと」「英彦山大行事社」「小野地域の金山のこと」「小野地域の地名」「小野地域寺史社史」等の地域に根ざした様々ら郷土史を取り上げ紹介されています。後進の学徒の指針になることと思います。

さらに小生に託された宿題として旧小野村役場の資料が廃棄されかかったのを先生は止められ、資料は現在公民館に保管してあります。県内にも現在は数件しか保存がない行政文書と伝えられています。解読などの作業は今後行われることになりますが早く保管の作業が必要です。先生の遺言です。

文責　元文化財調査委員会副委員長　大神信證

日田市天瀬町五馬台地の旧石器時代遺跡

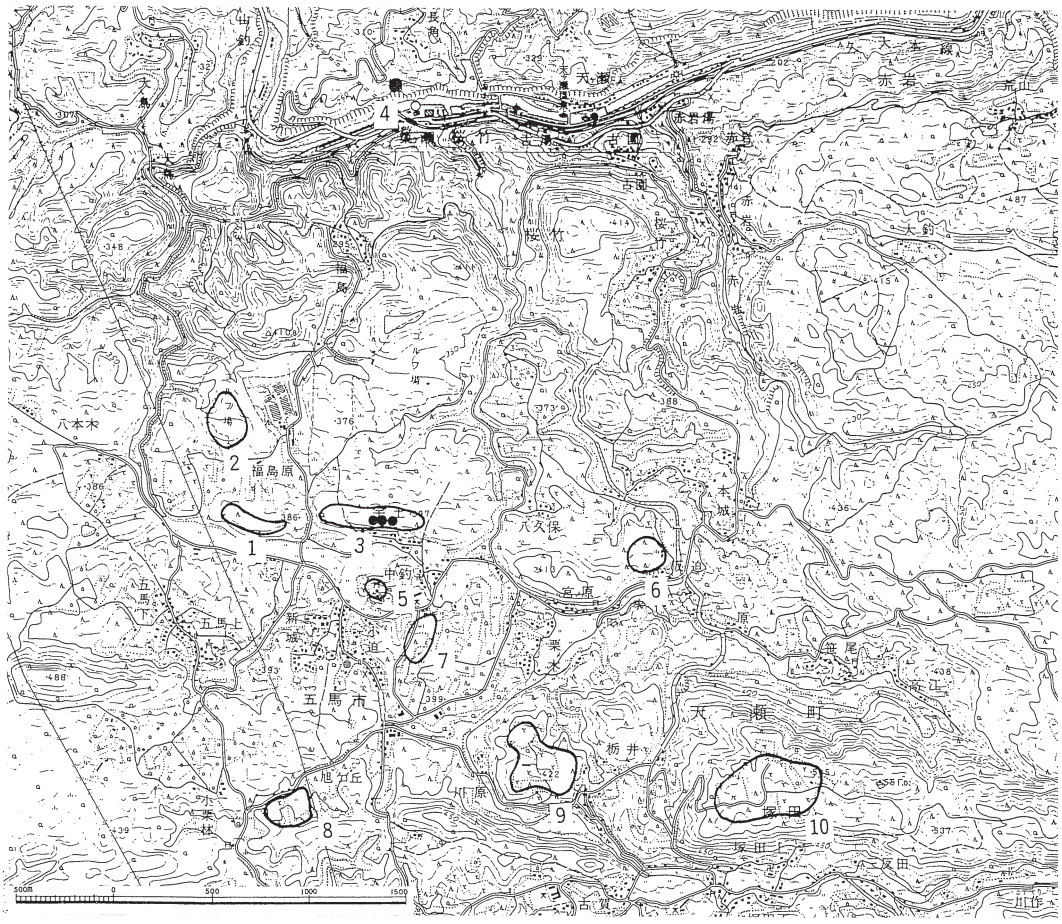
－五馬大坪遺跡と宇土遺跡の旧石器時代資料－

綿貫俊一（大分県立埋蔵文化財センター）

序

昭和 55 年頃（1980 年前後）、大分県農政部は県営日田地区広域営農団地農業整備事業として日田郡天瀬町 (現在の日田市天瀬町) の宇土地区、福島原地区を東西に横断する農道を計画した。県農政部からの実施協議を受け、大分県教育委員会文化課では昭和 60 年 (1985) に宇土地区､昭和 61 年 (1986) の 1 月から 3 月にかけ福島原地区の試掘調査を実施し、両地区から遺構や遺物が出土した。そのため県文化課では、当時の天瀬町教育委員会と協議し、昭和 60 年 (1985) に宇土地区の宇土遺跡、同 61 年 (1986) に福島原地区の五馬大坪遺跡として本調査を行った。

当時、天瀬町教委には文化財担当者が不在であり、同教委の依頼により県教委文化課では、宇土遺跡の調査に高橋信武・綿貫俊一、五馬大坪遺跡の調査に坂本嘉弘・綿貫俊一を派遣し、本調査の実務を実施した。その後、出土遺物の整理は県文化課資料室で調査担当者が行い、昭和 61 年 (1986)3 月 31 日に宇土遺跡、平成元年 (1989)3 月 31 日に五馬大坪遺跡の報告書を天瀬町教育委員会から刊行した。当時の県教委文化課資料室では、今日と異なって遺物の水洗はパートの作業員が行い、遺物実測・トレースは調査担当者が本務の合間をぬって行うなどの状況であった。とりわけ実測の難易度の高い石器類は時間がかかり、多くを掲載できなかった。そうして刊行したのが前記の報告書であった。



第 1 図　五馬大坪遺跡・宇土遺跡と周辺の遺跡

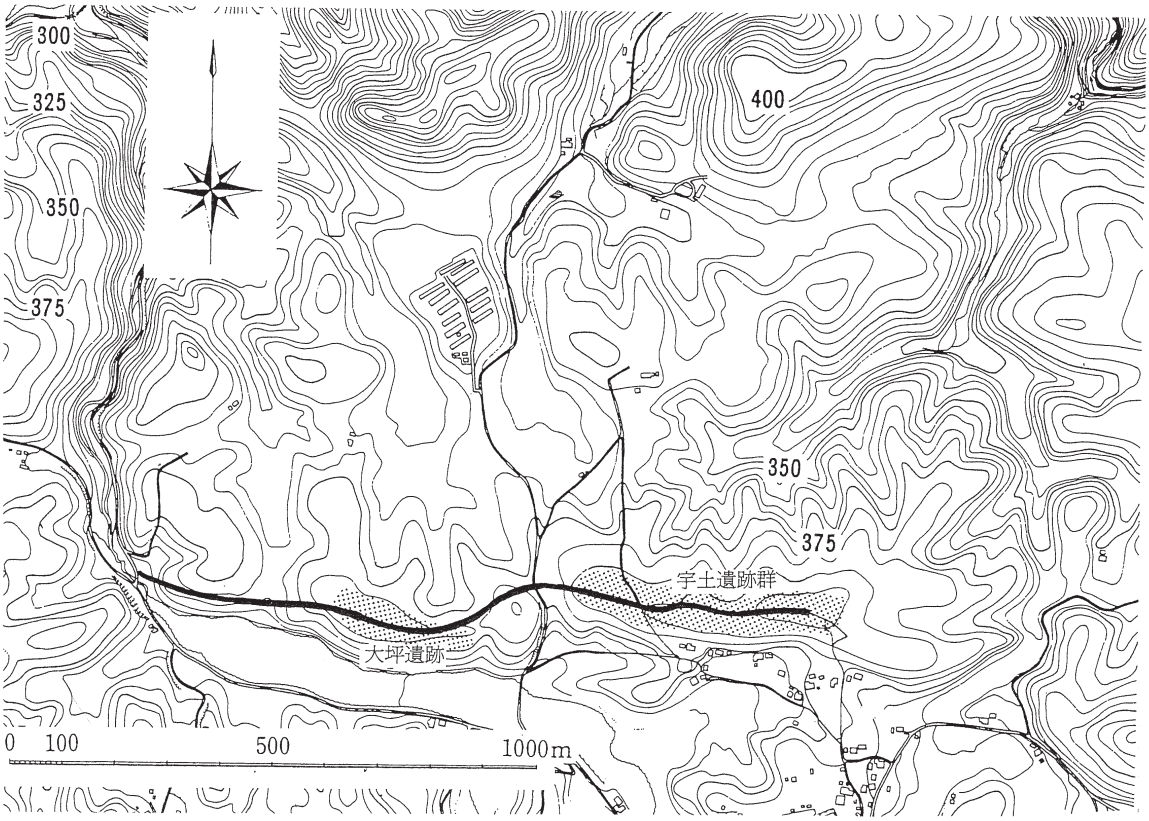
宇土遺跡と五馬大坪遺跡の調査実務と遺物整理を大分県教委で行った経緯から、しばらく出土遺物は県教委文化課の資料室で保管されていた。調査担当者の一人だった筆者は、報告書発行後も20年近く何らかの形で補足的な報告を行うべく両遺跡出土の石器類を実測していたものを今回、本稿を論文として掲載するものである。

なお、筆者が宇土遺跡と五馬大坪遺跡の報告で石器類を担当していたこともあり、本稿では両遺跡から出土した旧石器時代遺物を報告・論究する。

1　五馬大坪遺跡・宇土遺跡の立地景観

日田市の東部、天瀬町は筑後川の中流である玖珠川が町を南北に二分するように西流する高原地帯である。町を南北に分ける玖珠川沿いの地峡部は標高が200 m前後で、天ヶ瀬温泉などの観光宿泊施設などが立ち並ぶ。その南北の高原地帯は標高約300 mから550 m前後の起伏のある地形で、畑地、水田、里山が展開していく地形である。

五馬大坪遺跡・宇土遺跡の両遺跡は、南側の高原にあたる五馬台地上に位置する。ここは行政的には福島、宇土にあたり、遺跡のある場所は中釣集落と小さな小川が西流する谷を南に見おろす一続きの尾根状丘陵に立地し(第1図・第2図)、丘陵の東から西へ宇土遺跡・五馬大坪遺跡と連続する。五馬大坪遺跡の東半部は、調査に従事していただいた作業員によれば、かつて”雨乞い”をした場所であるという証言が調査時の記憶として残っている。周辺には、福島原遺跡、西遺跡などの旧石器時代遺跡、ひざま塚古墳、元宮古墳、旭が丘遺跡（埴輪出土地）などの古墳時代遺跡が分布している（第1図)。また、西遺跡の南には高瀬Ⅲ遺跡・平草遺跡・亀石山遺跡などの旧石器・縄文時代遺跡が分布している。



第2図　五馬大坪遺跡・宇土遺跡と周辺の地形図

2　五馬大坪遺跡・宇土遺跡の基本層序

基本層序の表記については、五馬大坪遺跡をアラビア数字、宇土遺跡をローマ数字で示している。まず最も堆積層が厚く丁寧な観察を行った五馬大坪遺跡の試掘調査トレンチであるT10区西壁面の層序を説明し（第６図）、宇土遺跡の層序との対応関係を説明する(第３図)。

１層：明褐色で層厚5㎝。草木の根がみられる部分。

２層：暗黒色で層厚12㎝。軟質の有機質土。

３層：淡黄色で層厚２㎝。降下パミスとみられる細かい火山ガラスからなる。土壌化が進み、限られた分布。

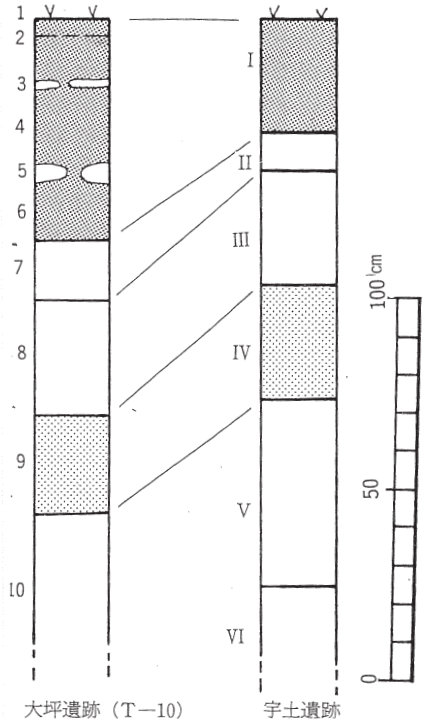
４層：暗黒色の有機質土で、層厚19㎝。軟質。

５層：淡黄色で層厚６㎝。アカホヤ降下パミスとみられる層で、ブロック状に堆積する。

６層：暗黒色の有機質土で、層厚14㎝。やや粘性を有する。縄文時代早期に形成された層である。

７層：暗褐色の粘質土で、乾くと白い。層厚16㎝。６層と８層の漸移層である。

８層：黄褐色の粘質土で、層厚30㎝。ソフト・ローム(SL)、ハード・ローム(HL)に相当。



第３図　五馬大坪遺跡・宇土遺跡の層位関係柱状図

９層：暗褐色の硬質土で、層厚25㎝。黒味が薄いが、黒色帯(BB)に該当する。本層の最上部域から、８層の最下部域にATの降下層準が予測される。

10層：黄褐色の粘質ローム層で、下位になるほど自然礫が目立つ。

宇土遺跡は五馬大坪遺跡とほぼ同様であるが、五馬大坪遺跡の１層～６層に宇土遺跡のⅠ層、五馬大坪の７・８・９層に宇土のⅡ・Ⅲ・Ⅳ層、大坪の10層に、宇土のⅤ層が対応する。

3　五馬大坪遺跡・宇土遺跡の石器石材

五馬大坪遺跡・宇土遺跡に共通する石器石材も多いため、ここで解説する。両遺跡の中には九州地域の石材産地のものに酷似した石材を用いているが、これに関しては肉眼観察による推定であり、将来的には蛍光X線分析による同定が必要である。本論の末に掲載した一覧表は実測図に対応しているが、石材の項目で石材を１から11に分類したアラビア数字を記入している。この数字に連動するのが以下の解説である。

石材１　大分県・宮崎県の県境の本谷山付近を１次産地とする流紋岩・ホルンフェルスである。新鮮な割れ面は青黒く硬い石で､風化すると暗灰色をしている。しばしば奥岳川･大野川本流の河床で見かけるが、遺跡でも角の取れた原石に近い石核をみかけるので、大野川水系の川原や段丘礫層から採取したことが推測される。

石材２　熊本県阿蘇郡小国町の西小国産と推定される黒曜岩である。発泡時の気泡が多く、細かいピッチのリングが多く観察されるのが特徴である。

石材３　熊本県阿蘇市の象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩と推定される石材である。割ると鈍く光沢のある黒い割れ面で、通常は風化して焦げ茶色となり、ザラザラとした質感である。五馬大坪遺跡の既報告段階では、阿蘇市の象ヶ鼻の産地が発見されておらず、産地不明の黒曜岩としていた岩石である。

石材４　色は濃い灰色を基調とした風化で、色の黒い脈状の縞状線が入ることが特徴の安山岩である。『大分県史先史篇』によると大分県日田市大山町の松原ダムが渇水期時に現れる貫見地区の丘陵が原産地とする石材に相当すると既報告段階で記載していた石材である。しかし貫見の丘陵を原産地とする石材の実態が不明で、その検証は必要なものの明確ではない。近年、大分県玖珠郡玖珠町に所在する四日市遺跡で出土した旧石器類にも酷似しており、その石器類の石材は同遺跡の北西 2.7 ｋｍ離れた牧ノ平山で原石を発見している。五馬大坪遺跡・宇土遺跡の石器石材としては、当面松原ダムと牧ノ平山産である可能性を考えておきたい。

石材５　佐賀県伊万里市の腰岳や長崎県松浦市牟田で産出する黒曜岩と推定する漆黒色をした良質の黒曜岩である。しかし石材５とした宇土遺跡の細石刃石器群の例には、石材 11 に含めたローム中に自然介在する色の薄い良質な黒曜岩を含むかもしれない。

石材６　長崎県佐世保市周辺で産出する黒曜岩と推定する青鼠色をした良質の黒曜岩である。表皮は虫喰いのような窪みや､爪形の窪みが観察される。長石や雲母粒が介在する。

石材７　割ると黒灰色・黒色をした安山岩で、佐賀県多久市や小城市周辺で産出するサヌカイトと推定している。

石材８　角閃石安山岩で、大分県姫島村で産出する岩石と推定するが、すべてはそうでないかもしれない。暗灰色･白灰色の色調で､中に微小な鉱物を含み､石材としてはもろい。

石材９　原石産地不明の黒曜岩で、半透明の部分に黒い霧がかかったような特徴である。薄い剥片にみられるが、あるいは石材５(腰岳・牟田)系統の良質な部分の可能性もある。

石材 10　石材４と異なり、軟質で風化が著しい安山岩で、劣化している。色は灰色である。大きな剥片や石核に用いるので、比較的に原石産地に近いと推定する。

石材 11　その他の石材で、数は多くない。個別に名称を示しているが、珪化木、玄武岩、サヌカイト系、ローム層中に自然貫入していたと思われる黒曜岩、珪質岩などがある。

４　五馬大坪遺跡の石器類について －ナイフ形石器段階－

(１)　石器類と遺構の分布

五馬大坪遺跡は、馬の背のような尾根状地形の頂部に沿って計画された道路であったため、長さ(東西)280 ｍ、幅 10 ～ 18 ｍの細長い調査区となった。この間に２ｍ×２ｍの試掘グリッドを 13 個所 (TG1 ～ TG13: 第４図) 設定したところ、遺物の出土をみた。本調査区は南北を北から B･C･D 列、東西を西から１～ 28 列とし、一辺が 10 ｍの方形区画を設定して調査を実施した。

調査を進めると、南北の５列付近から 15 列までの間で石器類が多く出土したが、明瞭な石器ブロックは見られなかった。この間に、後に報告する今峠型ナイフ形石器、ナイフ形石器、角錐状石器、台形様石器、細石刃・細石刃核、削器などが剥片チップ類とともに

渾然一体なって出土した(第6図)。細石刃、細石刃核だけでみれば近い距離にまとまる。数量的には、今峠型ナイフ形石器が圧倒的に多く、大部分がそれに帰属する石器群と考えられた。更に、こうした石器類の分布とオーバーラップするように、礫群が14か所で出土した(第5図)。この礫群については、ここでは詳述しないが、既報告を参照していただきたい。

一方、23区から28区の間(東地区)は、弥生時代の標石遺構がある墓地遺構が出土した。この墓地遺構の調査の際、墓と墓の間での検出作業中、2層・3層中から細石刃・細石刃核を主体とする石器類が出土し、最終的には一つの石器ブロックを形成していた。

以上、簡単に石器類の分布を述べたが、後述するように調査区の西半、とりわけB•C列の5区～13区付近は細石刃石器群が集中・散在する部分があり、ナイフ形石器や角錐状石器など特徴的な石器以外は明確な帰属時期ははっきりしない。また掲載石器以外の全体的な石材構成、出土位置、出土層位などは既報告の一覧表を参照していただきたい。

（2）石材1を利用した石器類

石材1は、既に記載したように大野川流域方面に分布する流紋岩を石材としている。石器類の種類としては、角錐状石器、削器、掻器、加工がある剥片、使用痕がある剥片である。角錐状石器は破損しているが、横断面が二等辺三角形を呈する例である(第7図1)。底面をみると未加工のポジ面が残り、幅広の素材剥片を用いていることがわかる。残存部から小型例と推定できる。このほか幅広剥片を用いた削器(第7図2)、縦方向剥離の残る素材を用いた削器がある(第7図3)。後者は、左側縁側が、大きく素材を成形した加工面で、先端に近い斜行する部分には細かい剥離による縁潰しの加工痕が残る。掻器は、縦長の素材を用い、ポジ面側の縁部にU字形に剥離加工痕が残る(第7図4)。こうした掻器にみられる表裏入れ替え、場所をずらしての加工は、他の石材にもみられる。

石材1を用いた、不定形な加工痕のある剥片(RF)や(第8図9)、微小剥離痕のある剥片(UF)があり、広範囲に礫面を背面側に持つ斜行剥片の縁部に微小剥離痕を有する剥片である(第8図12)。

そのほか、石材1にはチップに分類した削器などの刃部作出の整形剥片もあるが(第8図5)、他は幅広の剥片を含めた様々な剥片である(第8図6～8、10、11、13、14)。

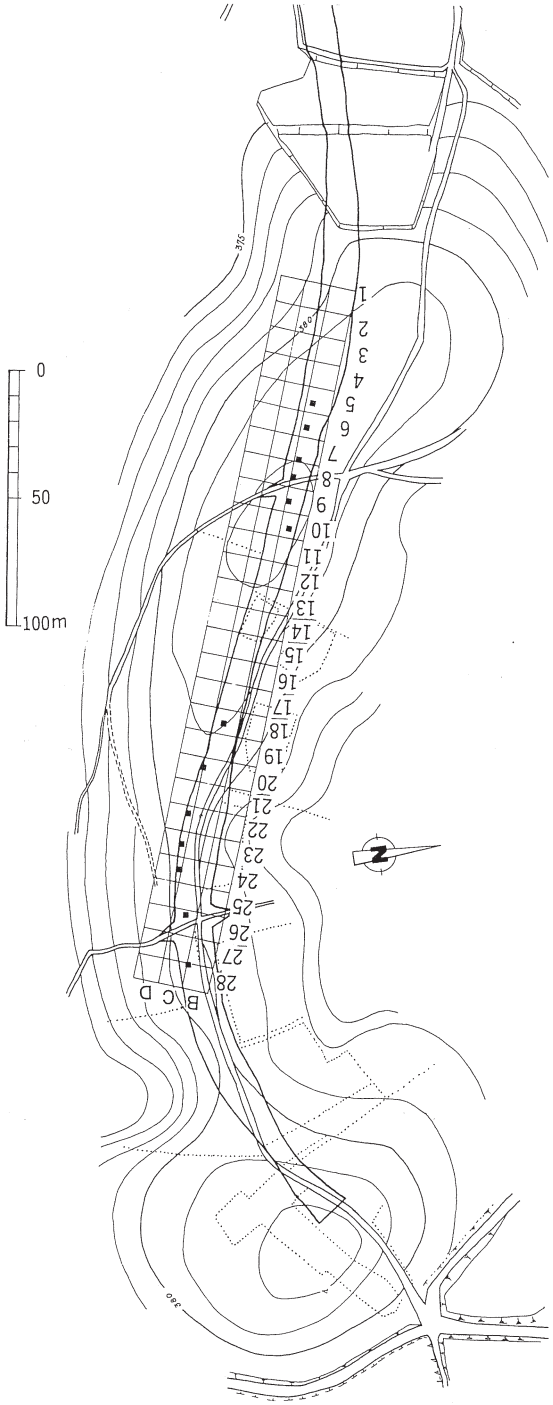
石材1に属する石器類を紹介したが、上記した初期剥片が1例あるものの、細かいチップ(整形剥片)、石核、残核など、剥片剥離作業を行ったような石器類は確認できず、多くが成品・剥片として持ち込まれたと推定する。

このほか後で詳述するが、B7区の8層から石材1を用いた船野型細石刃核が出土している。これまでに述べた石材1の石器類のうち角錐状石器を除く幾つかは、船野型細石刃核に伴う可能性はある。

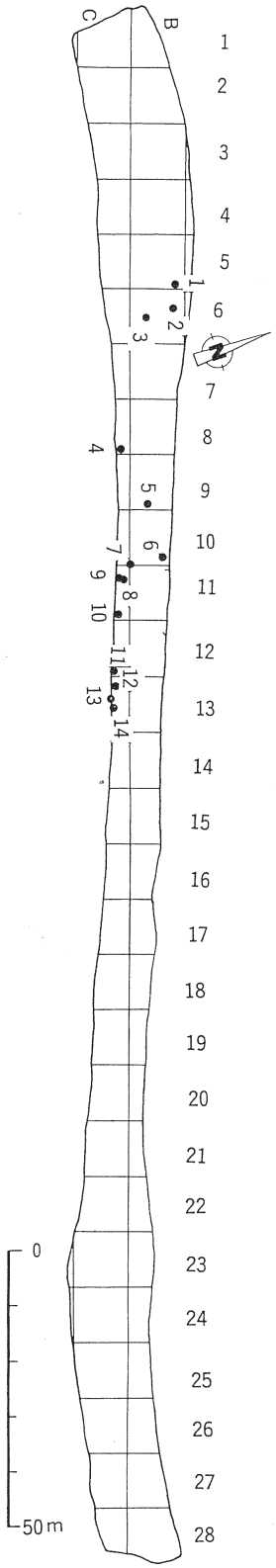
（3）石材2を利用した石器類

石材2は、既報告では推定「大山川産黒曜石」としていたものであるが、その大山川の河床に存在する黒曜岩自体の一次産地の多くが、質感から小国産黒曜岩と推定される。

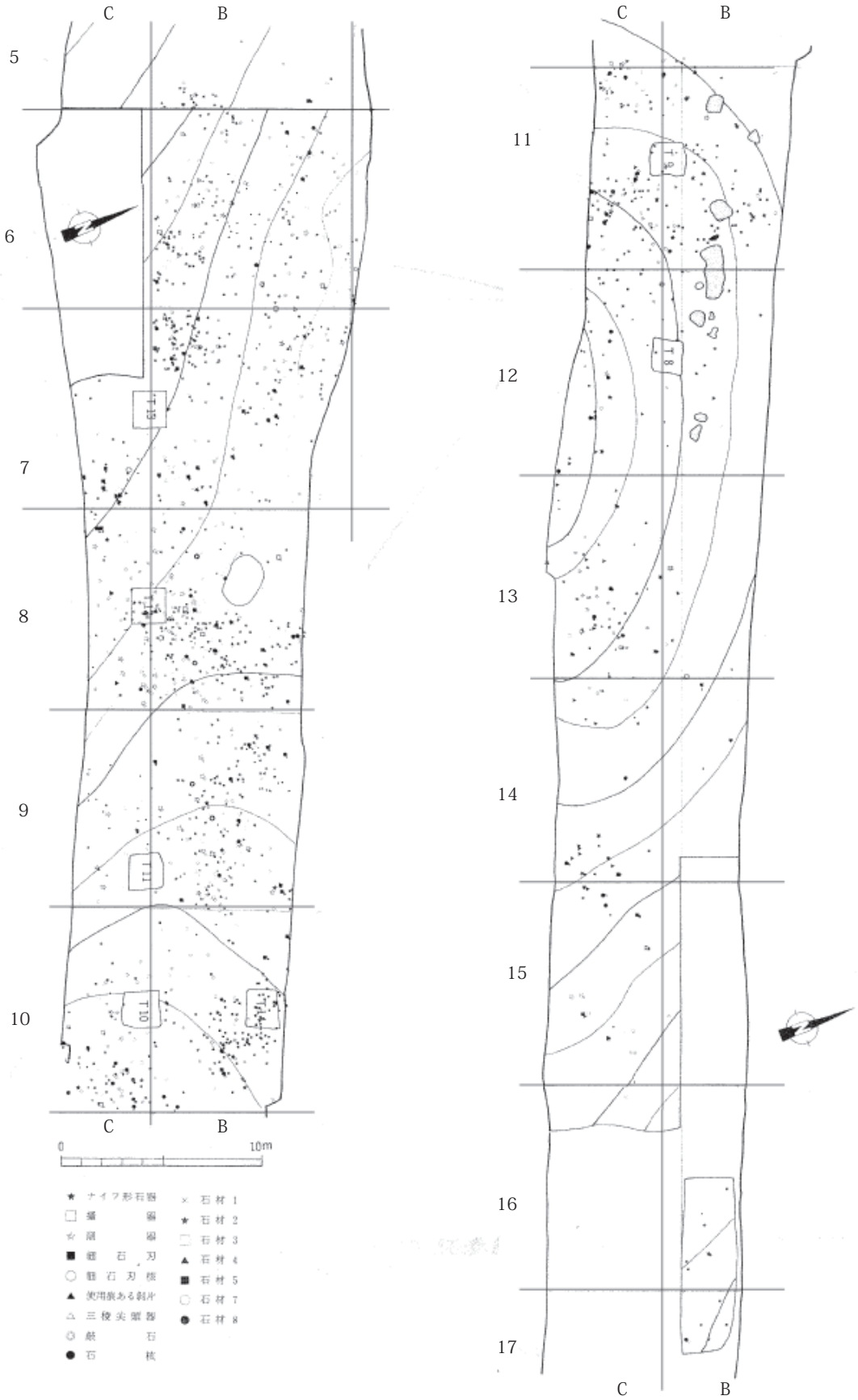
石材2の石器類の種類としては、ナイフ形石器、角錐状石器、削器、掻器、使用痕のある剥片、石核、剥片、チップなどからなる。石材利用からすると、石材2が最も多いといえる。これは石材産地が比較的に近いことが理由になる。



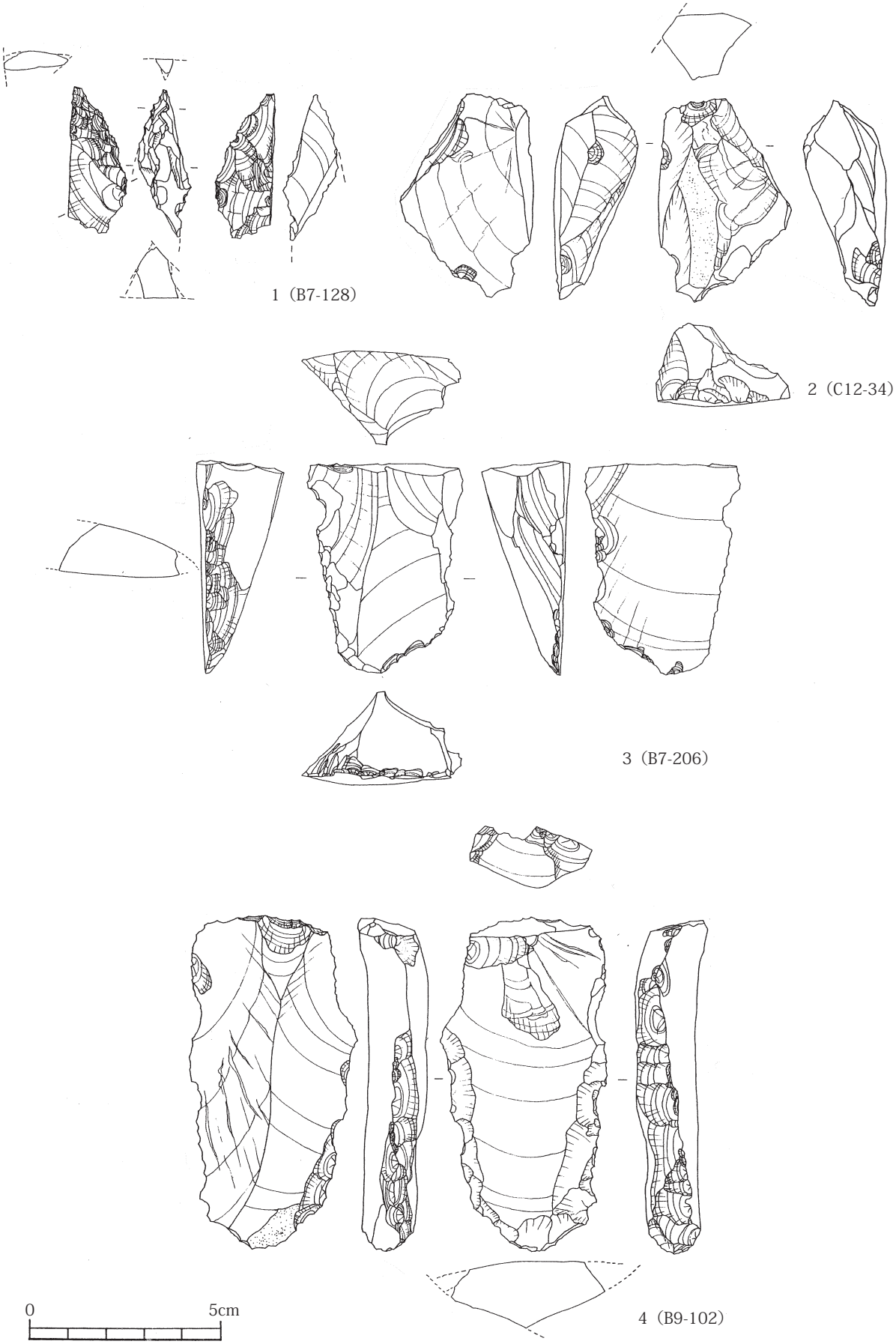
第４図　五馬大坪遺跡調査区位置図
黒塗潰し方形は試掘地点で、東端の
TG1 から西端の TG13



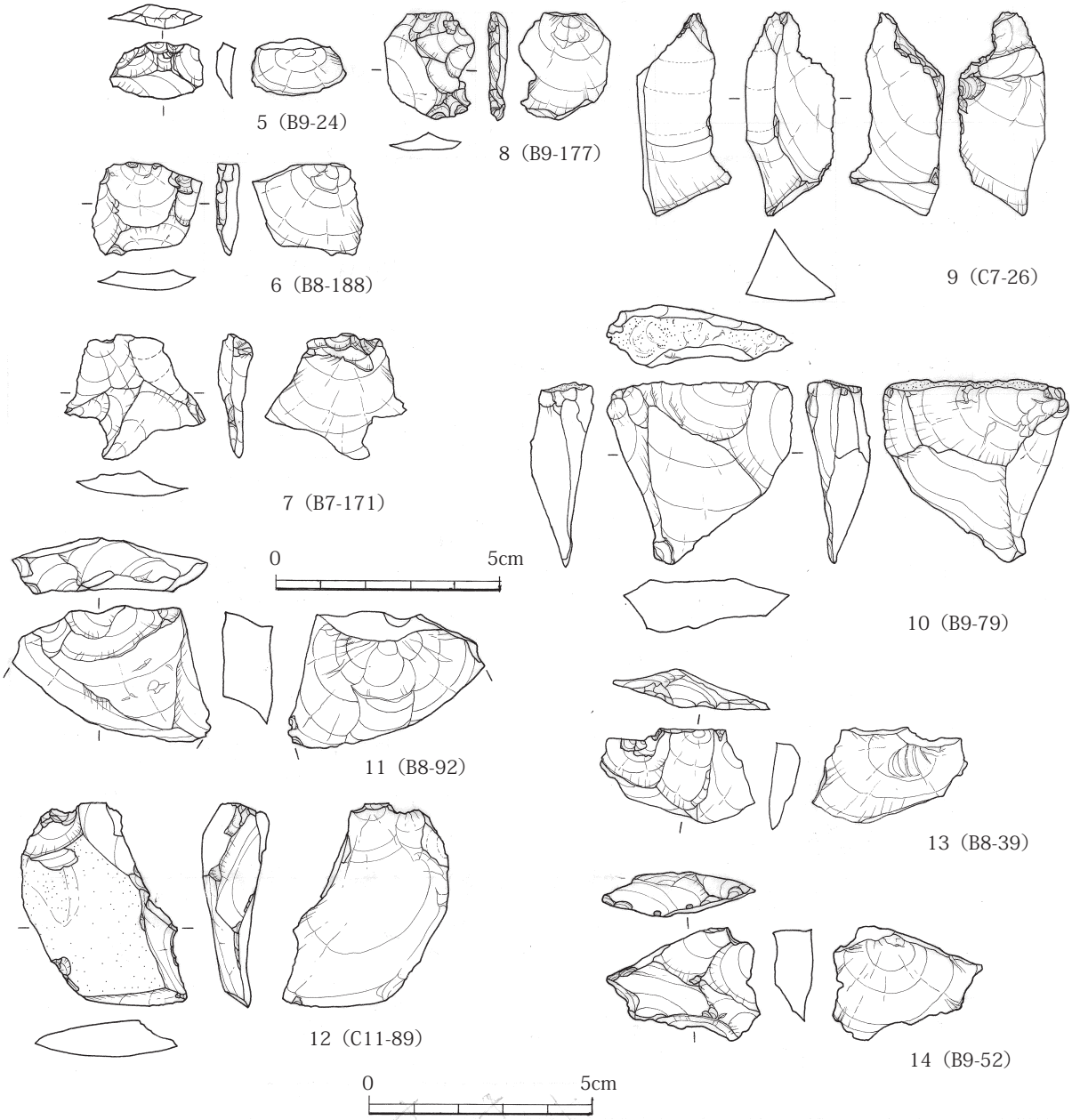
第５図　五馬大坪遺跡出土の礫群位置図



第６図　五馬大坪遺跡の西半部における旧石器時代遺物の分布図



第７図　五馬大坪遺跡出土石器 石材１（流紋岩）利用の石器実測図（１）



第８図　五馬大坪遺跡出土石器 石材１（流紋岩）利用の石器実測図（２）

石材２で製作されたナイフ形石器には少量ながら今峠型ナイフ形石器大坪類型に含まれる事例がある(第９図 15)。角錐状石器は、二等辺三角形の断面をし、左側面側は礫面である(第９図 16)。これは、幅広剥片を用い、右側面側だけを整形し、破損後は折れ面を切るように細かい加工が入る。更に、大野川流域の駒方池迫遺跡と同様、角錐状石器の腹面が未加工であることと、小型であることから新段階の角錐状石器であると推定する。

石材２の削器、掻器は、様々な形の素材を臨機に用いている。背面に礫面を残した扇形の初期剥片は、ポジ面側の両縁部に角度がない平坦な加工により刃部を作り出している(第９図 17)。また、縦長剥片の両側縁に急角度の整形加工を施した例(第９図 20)、三角形の剥片を用い片側側縁に加工した例(第 12 図 41)、楕円形近い形の削器がある(第９図 18)。この他、削器が破損し、刃部だけとなった例もある(第 11 図 33)。特に目立つのは、小型の先刃掻器(第 11 図 36)、拇指状掻器(第 11 図 34･35･37)などの小型例の存在である。他に削器としての使用後、石核として転用されている(第 11 図 38)。

石材２の石核は、そのほとんどを図化し掲載している(第10図22～32、第11図38)。原石産地における原石の大きさと形もあるのか、サイコロ形、角柱形など、高さ・奥行き・幅などが5cm以下の例である。おそらく原礫をそのまま、もしくは分割して剥離作業をおこなったとみられる。後者には、分割によるポジ面･ネガ面のみられる例がある(第10図22･23･25･26･28)。剥離作業は、打面転移を行う例(第10図23･24･25･27･28･29)、主要な剥離が対向する求心的な例(第10図30～32)、打面を固定して行う例(第10図26)、また底面を残す例などがある(第11図38)。そのほとんどは割りやすい部分を割る臨機な剥片剥離を行っており、残核形態は様々である。後者の底面を残す例は、瀬戸内系の石核にも共通する。

石材２の資料を見た中で、剥片剥離技術に関することを付記しておきたい。削器・掻器の素材の多くに見られるように、臨機的な剥離による不定形な剥片の多いことが特徴である。また、今峠型ナイフ形石器大坪類型の存在からは、ノの字状剥片の剥離技術が存在したことが窺える。この技術に由来する石核としては、表裏で斜行する剥離痕のある例が相当する(第10図30)。石材２の石核の大きさから必然的に長さが規制されたのか、小石刃の剥離技術の存在が想定できる(第9図20)。また石材２が遺跡に近い熊本県小国地域であることもあるのか、数量が多く、盛んな剥片剥離が窺える。

（４）石材３を利用した石器類

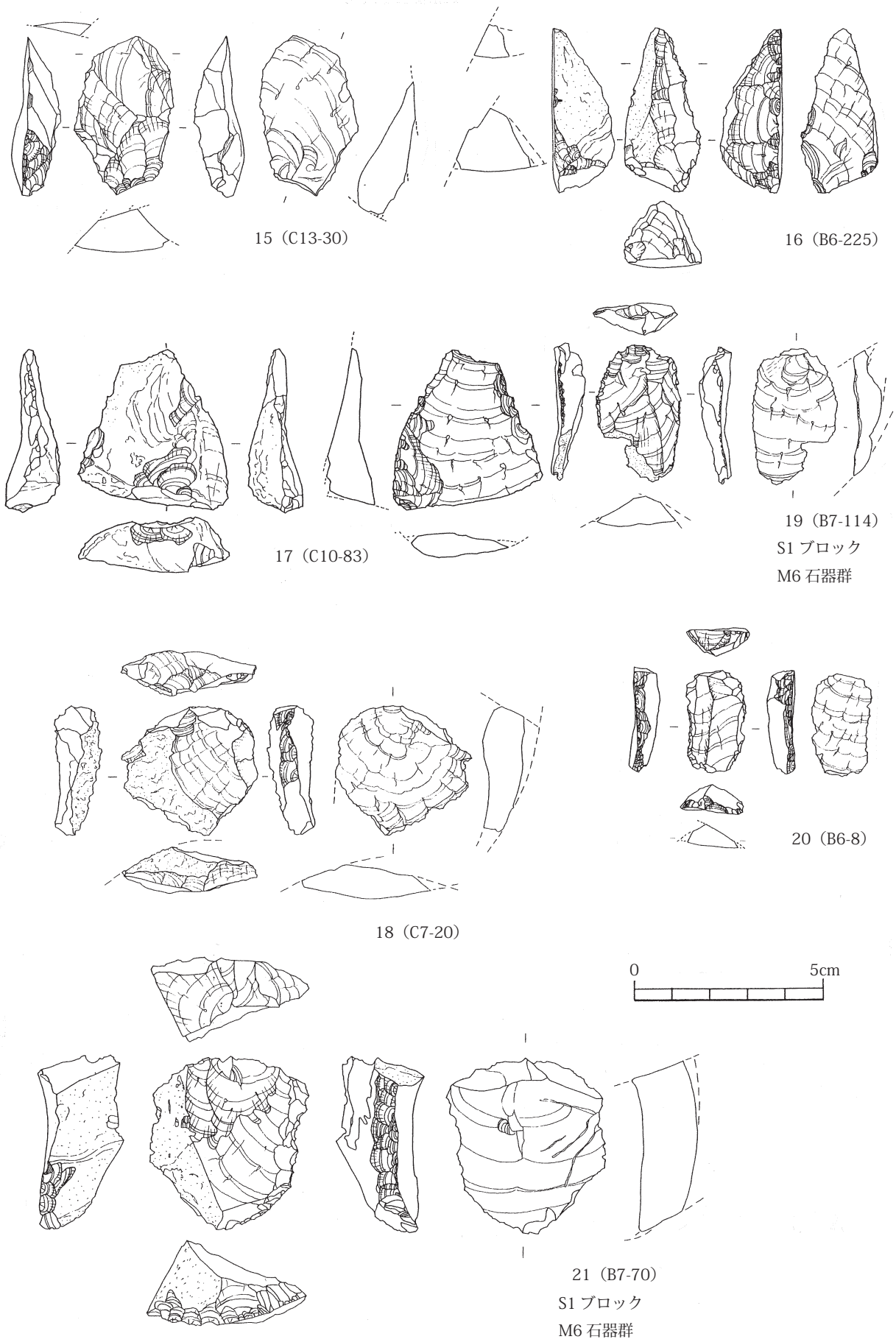
石材３は、既に述べたように五馬大坪遺跡から約30㎞の距離をもつ阿蘇市北側外輪山の象ヶ鼻直下で産出するガラス質溶結凝灰岩である。また象ヶ鼻方向からの小河川が日田市天瀬町の五馬の近くを流れていることで、流通経路としては簡易なことだったのか、搬入された石材３は多い。今回、提示した石材３の資料は、五馬大坪遺跡で出土した例の大半である。石材３の石器類には、石錐２点(第13図42･43)、削器７点(第13図44･47～第14図52、第25図109)、掻器３点(第13図45･46･第15図55)、石核７点(第14図53～第15図59)がある。

石材３の削器は、縦長剥片の片側のネガ面側に刃部加工の例がある(49)。また左右に加工のある例は、ネガ面側とポジ面側に加工がある(50)。縦長の器体の片側縁に加工があるもののうち、二つの例はポジ面側に加工がある(51･52)。また削器の中には、この遺跡の削器の特徴である先端の交差する部分を境に加工をネガ面とポジ面側とに分ける例(47･109)と、ポジ面側だけに平坦で微細な剥離痕を加えた例がある(48)。掻器のうち二例は拇指状掻器(46･55)である。

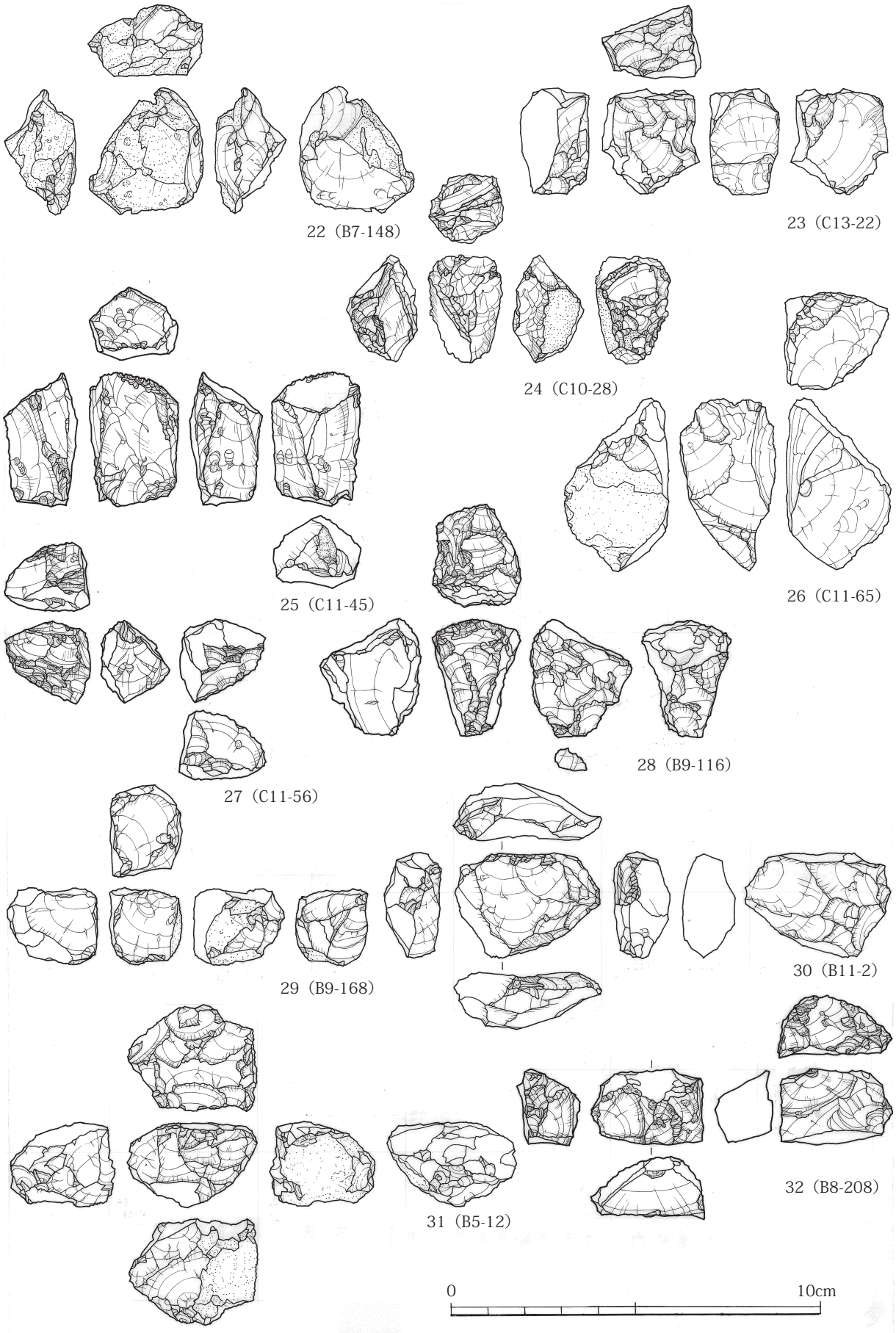
石材３の石核は剥片素材であるが、円盤状の形態で、求心的に剥離作業をおこなったもの(54)、剥片素材で多方向に打面を転移した例(56･58)、角礫状の例(57･59)である。この中には瀬戸内系に共通する石核もある（58)。また円盤形の例を除き、剥片剥離は求心的ではなく、90度の打面転移による剥片剥離の例が多い状況である。

（５）石材４を利用した石器類

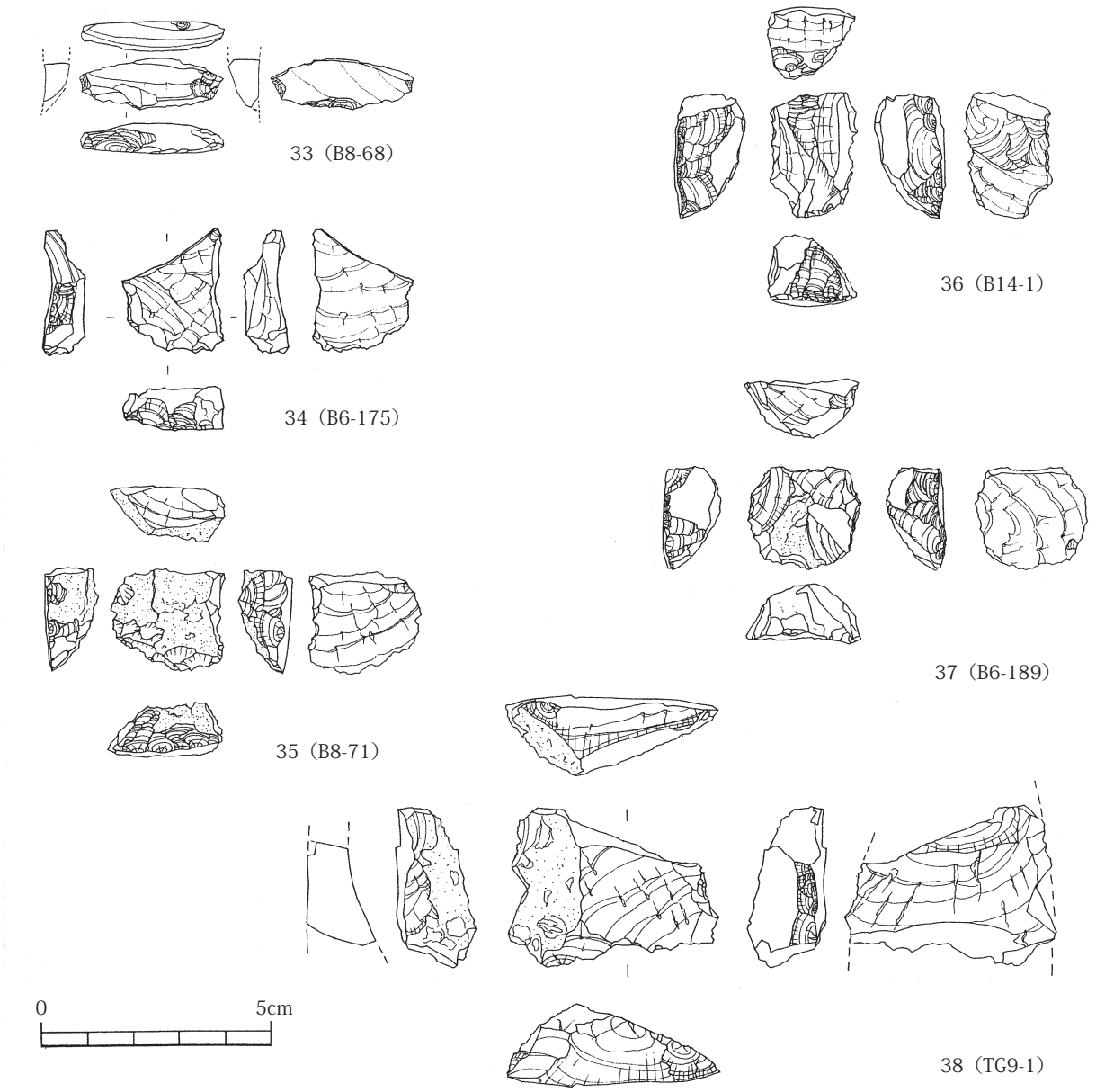
石材４は既に述べたように縞状の石理が特徴的な安山岩であり、距離的に約12㎞と近い玖珠郡玖珠町の牧ノ平付近で産出する安山岩系の岩石である可能性が高い。おそらく距離の近い原石産地から搬入されたこともあるのか、遺跡から出土した石器類は、他の石材に比べ大きい。石材４を用いた資料には、掻器１点(第16図60)、削器２点(第16図



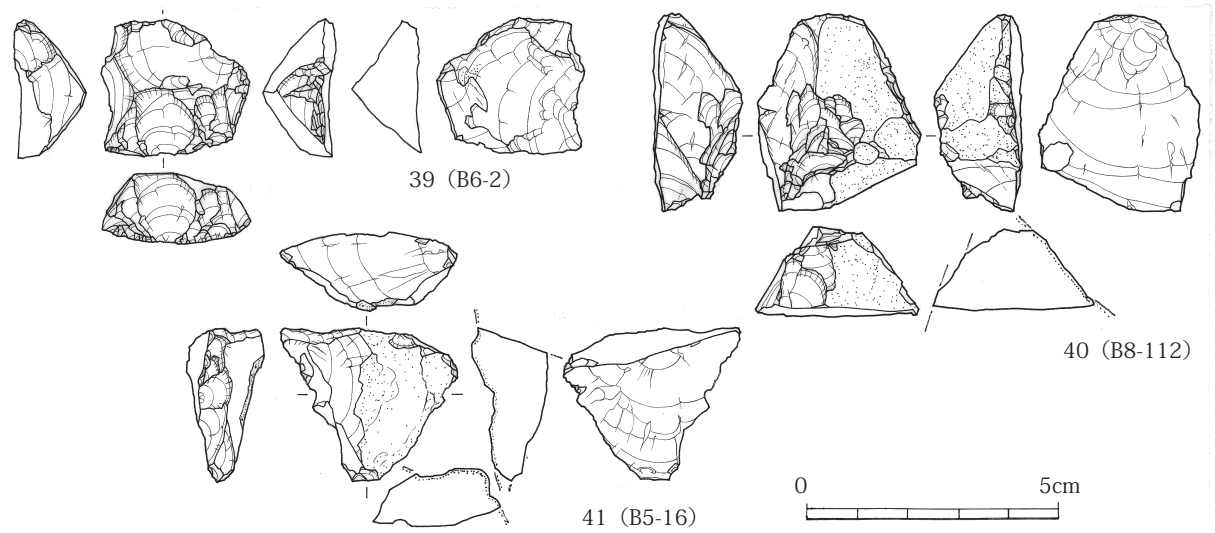
第９図　五馬大坪遺跡出土石器 石材２（推定小国産黒曜岩）利用の石器実測図（１）



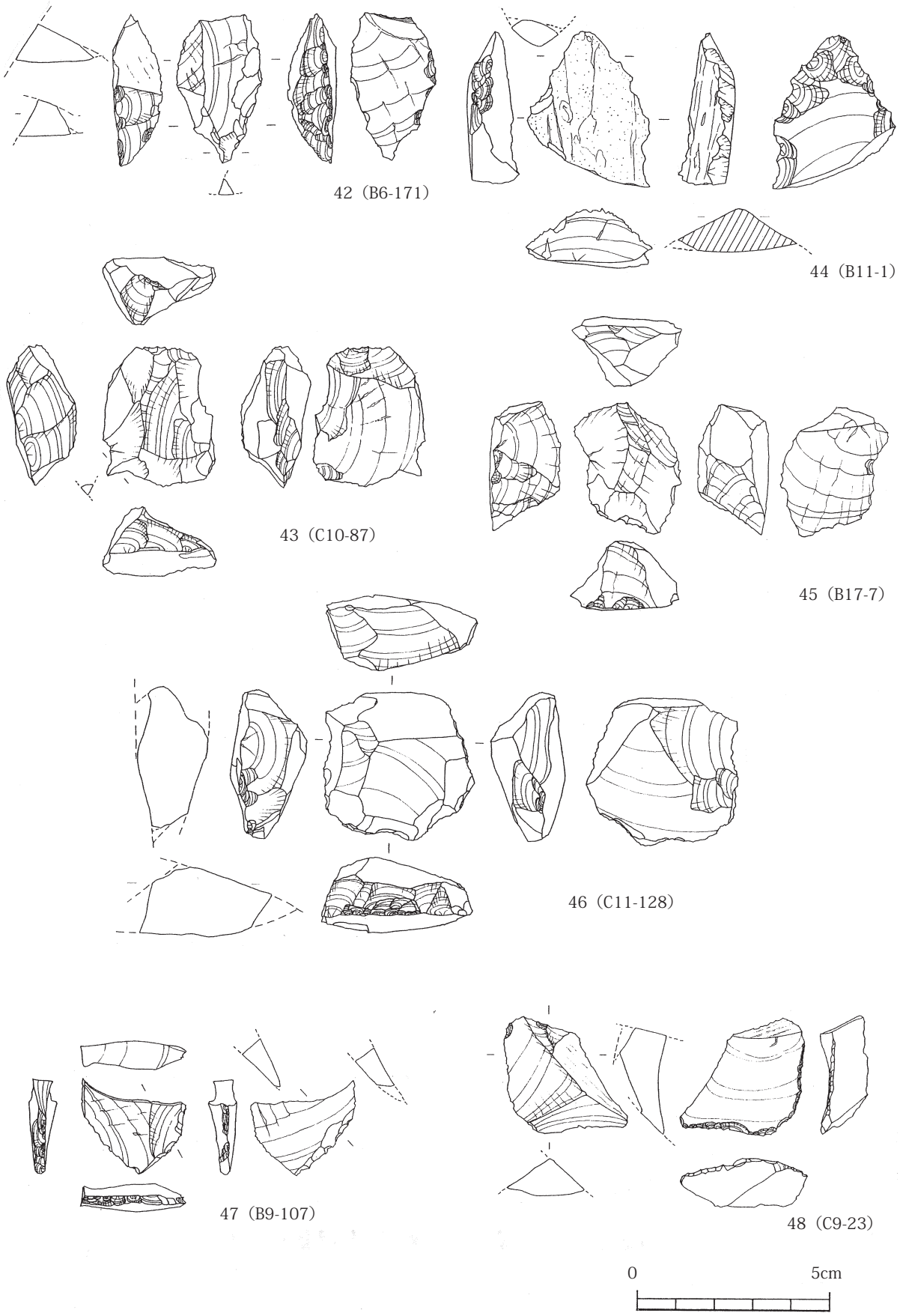
第 10 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材２（推定小国産黒曜岩）利用の石器実測図（２）



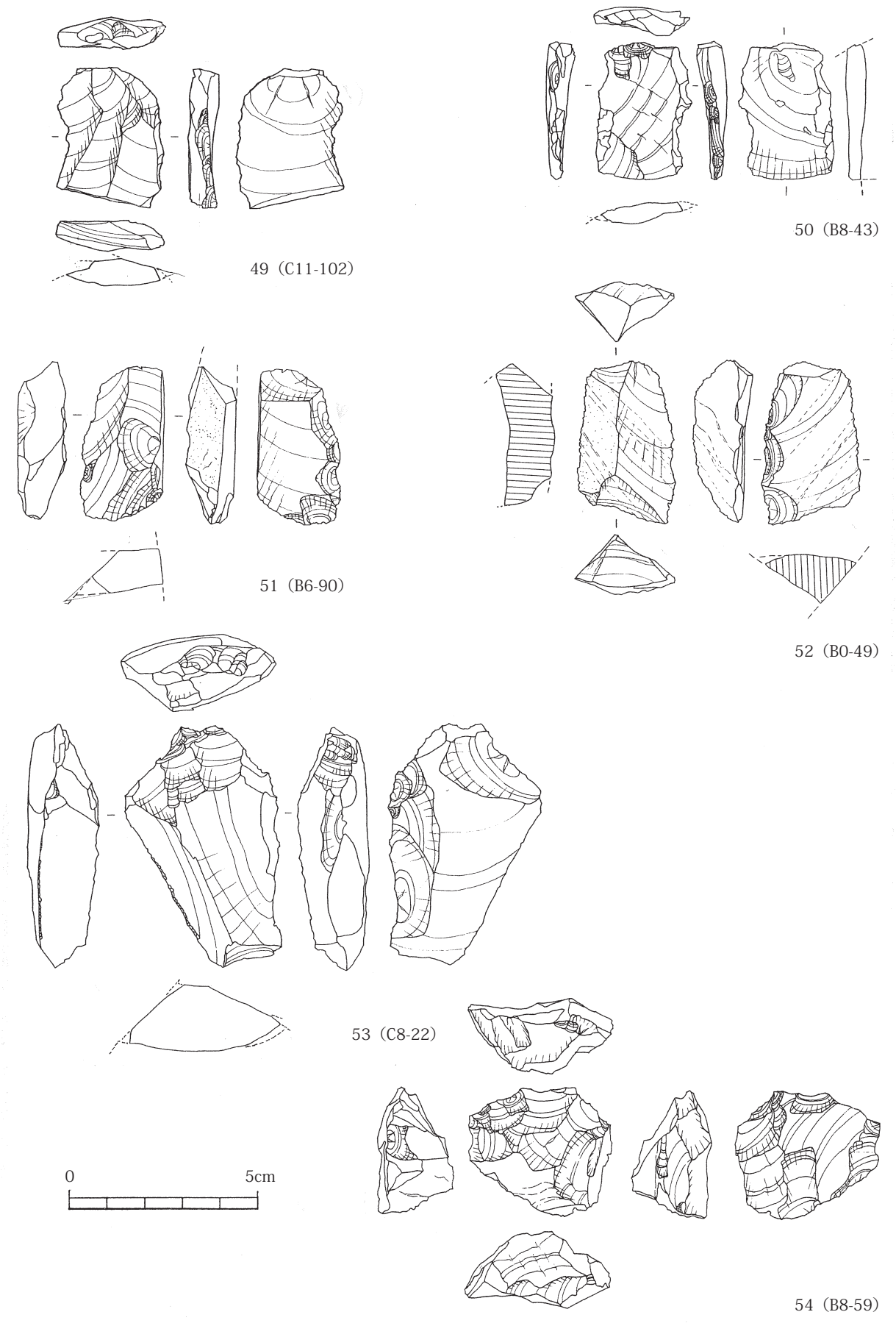
第 11 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材２（推定小国産黒曜岩）利用の石器実測図（３）



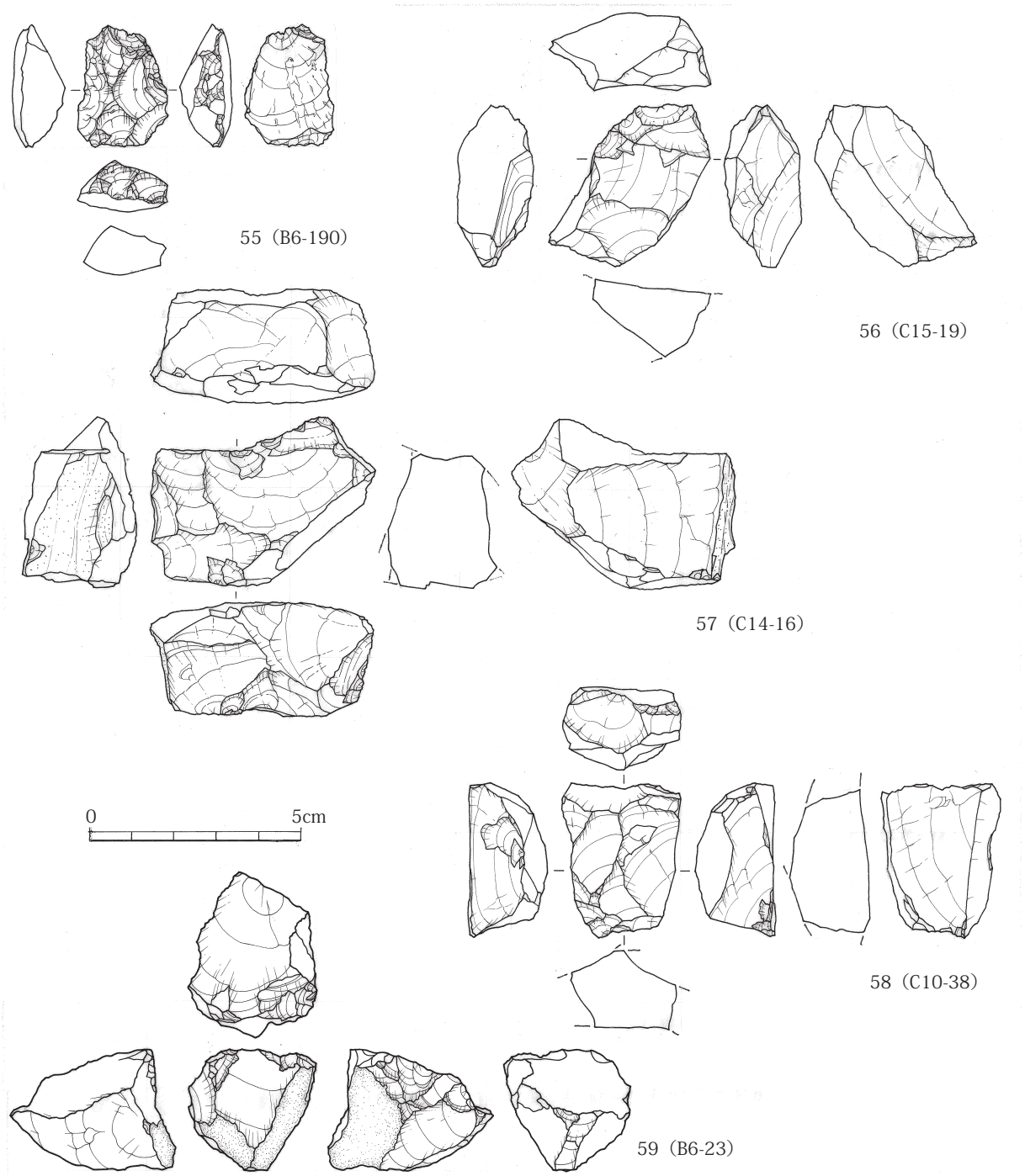
第 12 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材２（推定小国産黒曜岩）利用の石器実測図（４）



第 13 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 3 (推定象ケ鼻産ガラス質溶結凝灰岩) 利用の石器実測図（1）

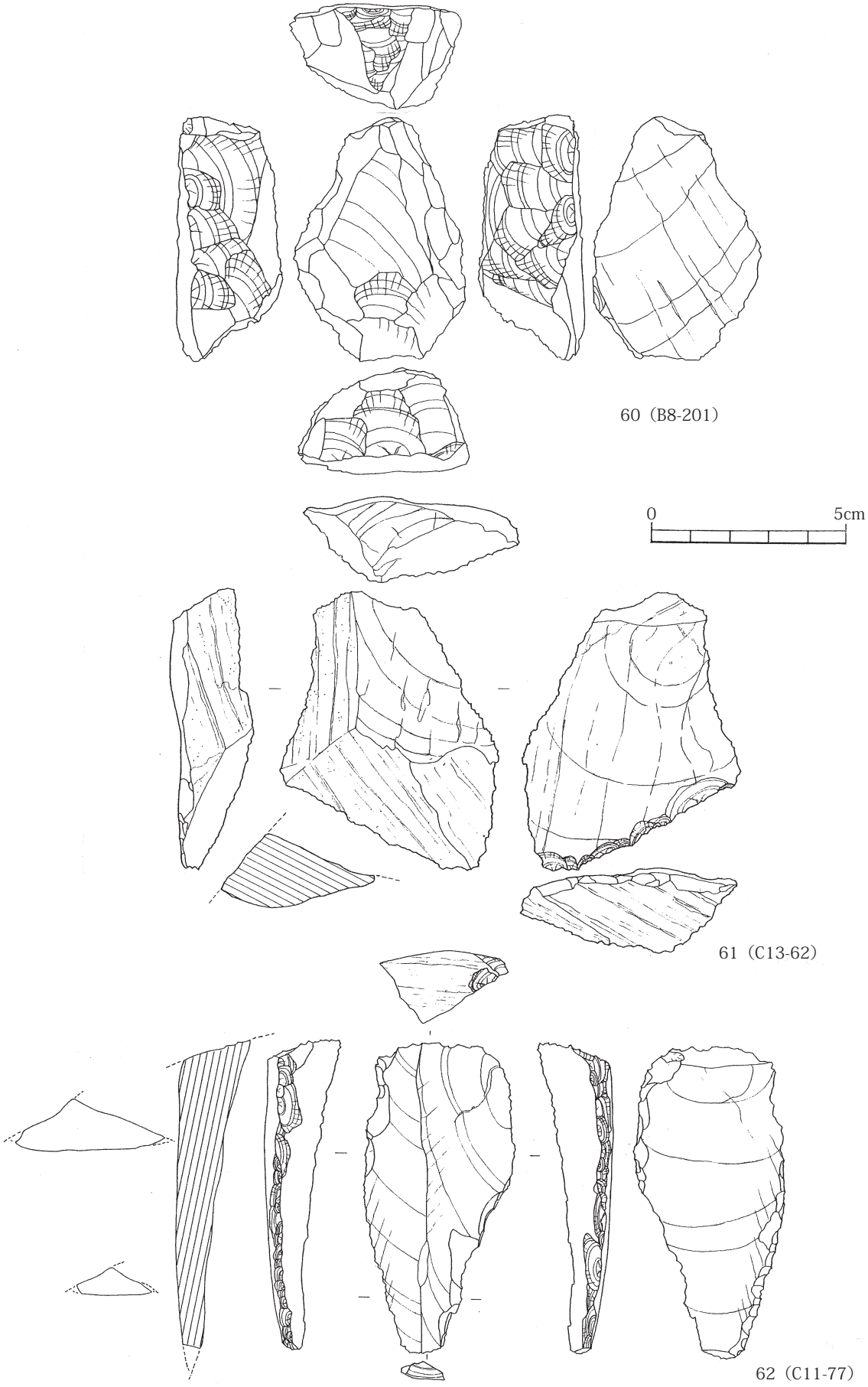


第 14 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 3 (推定象ケ鼻産ガラス質溶結凝灰岩) 利用の石器実測図（2）



第 15 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 3 (推定象ケ鼻産ガラス質溶結凝灰岩) 利用の石器実測図（3）

61･62)、石核 3 点 (第 17 図 63 ～ 65) がある。掻器は甲高で、平面形は洋梨形である。本例は一つ一つの剥離が大きいことに特徴がある (60)。しかし掻器として、その刃部の角度をみたときにどのように用いるのか、理解に苦しむ石器である。石核としても、剥離された剥片からどのような加工を加え製作したのか、成品がなく明らかでない。むしろこの石器の平面形が整った西洋梨系であり、掻器としての用途であったと推測したい。削器の一例は、遠位端から斜行する縁がポジ面側の左側縁に至る間に小さい剥離を加え刃部としている (61)。このように斜行突出部分への加工は本遺跡の削器にみられる特徴である。もう一例は先細りの縦長剥片を用い、器体の上部 3 分の 1 の境界部分を境に両側縁の加工がネガ面側とポジ面側で逆に行っている (62)。こうした加工技術は上述したなかにもあり、本遺跡の特徴である。石核については板状の石核素材を用い、短軸の両方向両面から幅広剥



第 16 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 4 (安山岩系岩石) 利用の石器実測図（1）

片を剥離した石核である (63)。この石核は途中から横断するように折れているが、折れの前は幅広で平坦な剥離が行われた両面調整尖頭器のような見かけだったと思われる。この石核に関連すると思われるのが次の平面が半月形の石核である (64)。これは、半円部分が打点を入れ替え表裏両面に剥離痕を残している。直線的な部分は折断面であり、上記石核への初期状況と推測する。円盤形の石核は、剥片を用いて表裏で求心的な剥片剥離を行った例である (65)。

（６）石材５を利用した石器類

石材５は、肉眼的に推定牟田・腰岳産の黒曜岩である。石材５を石材とする石器類には、

今峠型ナイフ形石器大坪類型５点 (第 18 図 66 ～ 70)、ナイフ形石器１点 (第 18 図 72)、台形様石器１点 (第 18 図 71)、微細な剥離痕のある剥片４点 (UF：第 19 図 73 ～ 76)、石核１点 (第 19 図 77) がある。

今峠型ナイフ形石器大坪類型は、左側縁下半の基部加工の他、すべて右下に斜行する調整打面 (66･67･68･69)、もしくは調整打面状の二次加工がある (70)。左下方向へ斜行する例はない。なお裏面の右側縁部には、平坦で細かい剥離痕がみられる (68)。

台形様石器は、裏面のポジ面、表面のネガ面が直行する位置関係にあり、不定形な剥片が素材に用いられる。その際、剥片の左側縁を刃部になるようにしている。

微細な剥離痕のある剥片は、不定形の小剥片が用いられる。一例は抉りのような部分もあり、加工痕のある剥片とするべきかもしれない (76)。また別の一例は、ノの字状剥片を用い、素材剥離前に打面調整が行われているので、今峠型ナイフ形石器大坪類型の素材であったのかもしれない (74)。

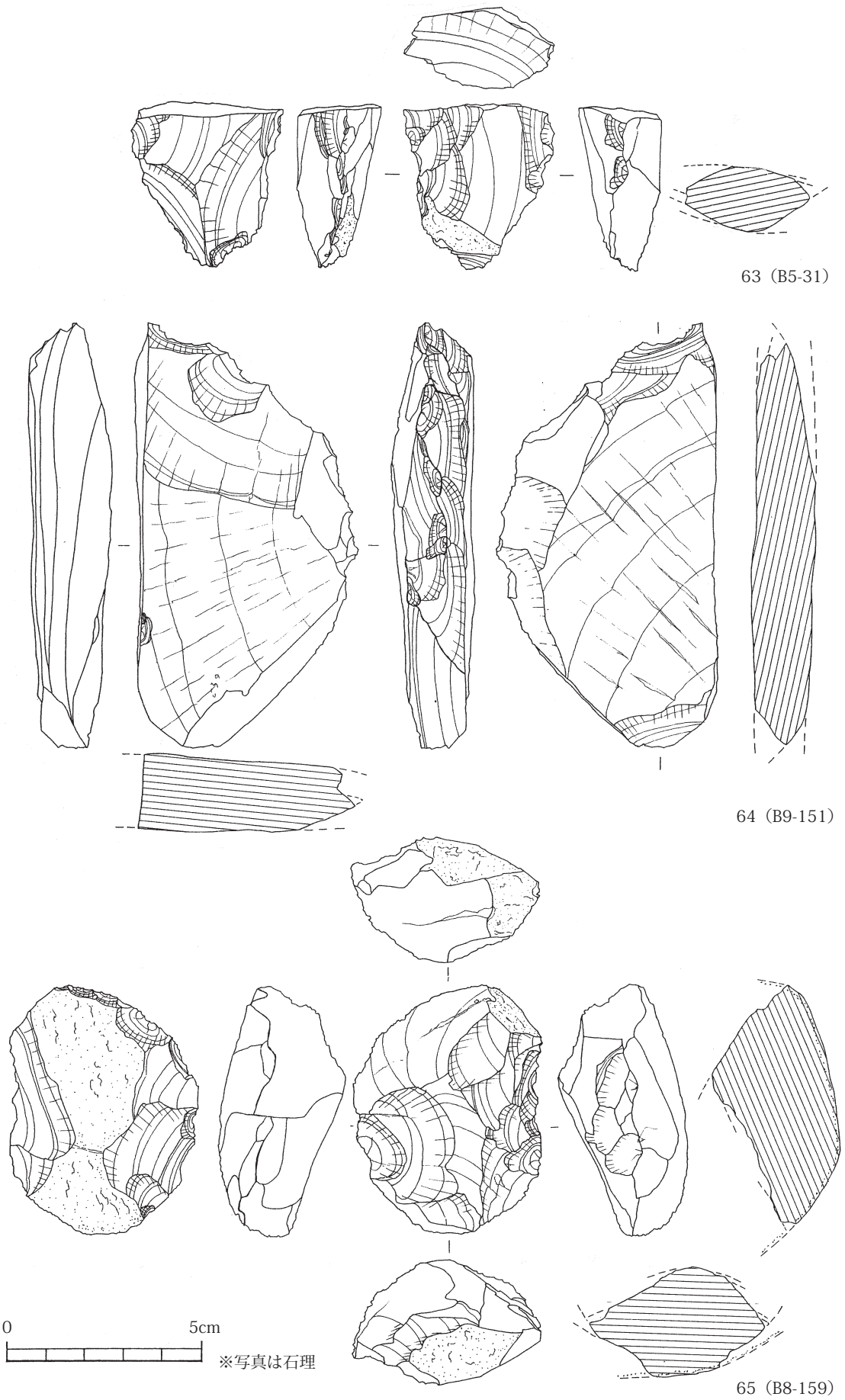
石核は上面に打面を作り出しているが、表面側を中心に求心的に小さな剥片を剥離しているが、石器の素材となるような剥片はとれていないようである (77)。

（７）石材６を利用した石器類

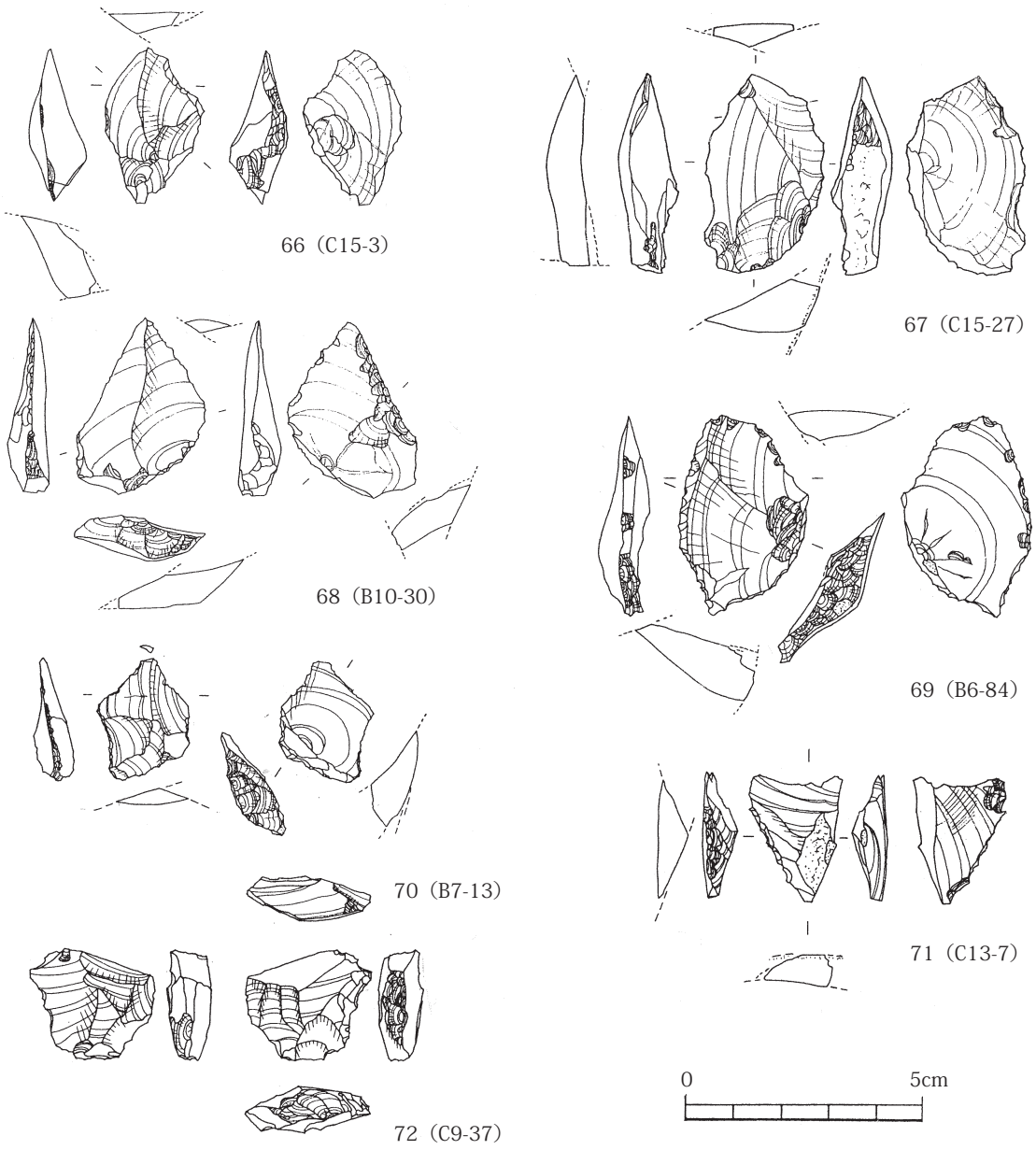
石材６は、灰黒色をした質のよい黒曜岩で、おそらく長崎県佐世保市周辺の西北九州地域で産出するものと推定している。この石材を用いた石器類には、今峠型ナイフ形石器大坪類型 11 点 (第 20 図 78 ～ 84､第 21 図 87 ～ 90)､二側縁加工のナイフ形石器 A 類１点 (第 20 図 85)､二側縁加工のナイフ形石器 B 類１点 (第 20 図 86)､剥片１点 (第 21 図 91) がある。

今峠型ナイフ形石器大坪類型は、石材５の場合と同様、左側縁下半の基部加工の他、すべて右側縁下半に斜行する調整打面、もしくは調整打面状の加工がある。また先端部が折れている例が６点 (82 ～ 84・87・89・90)、裏面右側縁に細かく平坦な剥離痕のある例が１点 (79) ある。また先端部が湾曲する尖らない例もある (第 21 図 88)。この他今峠型ナイフ形石器大坪類型は、素材剥離前の打面調整を行うことに特徴があるが、剥離後にも打面調整状の二次加工を加えた例もある (78・87・88)。

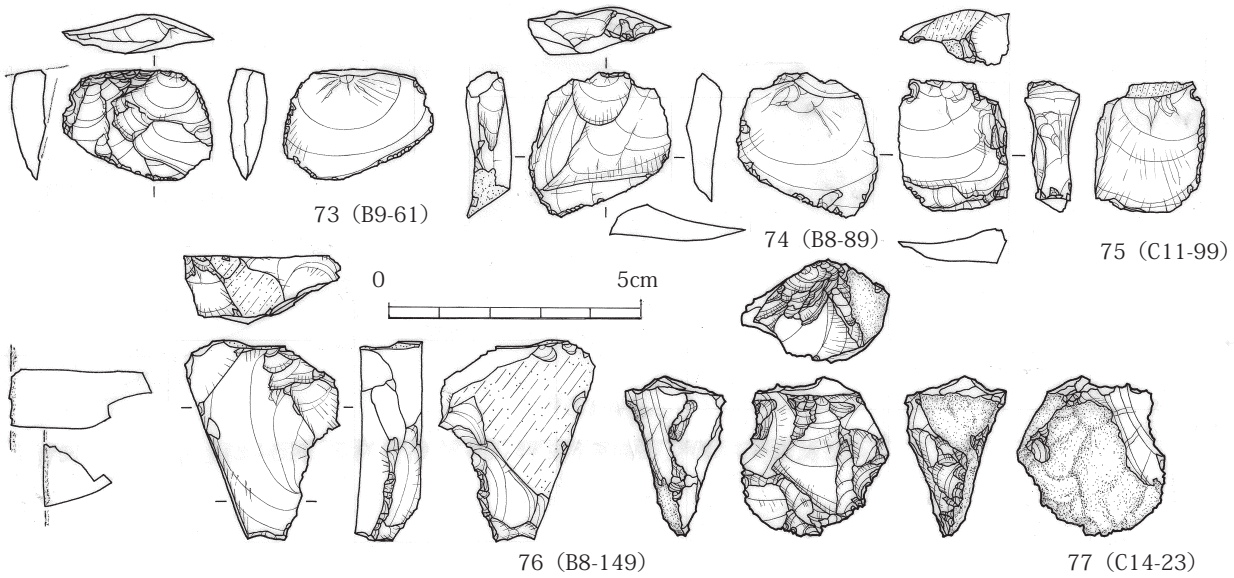
二側縁加工のナイフ形石器 A は、石刃素材で、裏面基部よりに裏面調整があるほか、なかほど付近で折れている (85)。二側縁加工のナイフ形石器 B は、厚い幅広剥片素材で、加工により横断面が三角形や台形である (86)。その加工は、稜上と下面方向の上下からの剥離整形、裏面に並行するように稜上から水平方向へ剥離を加えるなど、角錐状石器と同じ製作技術である。そのためにそれは既報告で角錐状石器とし、天地逆に配置した理由である。なお衝撃の為か先端が折れている。



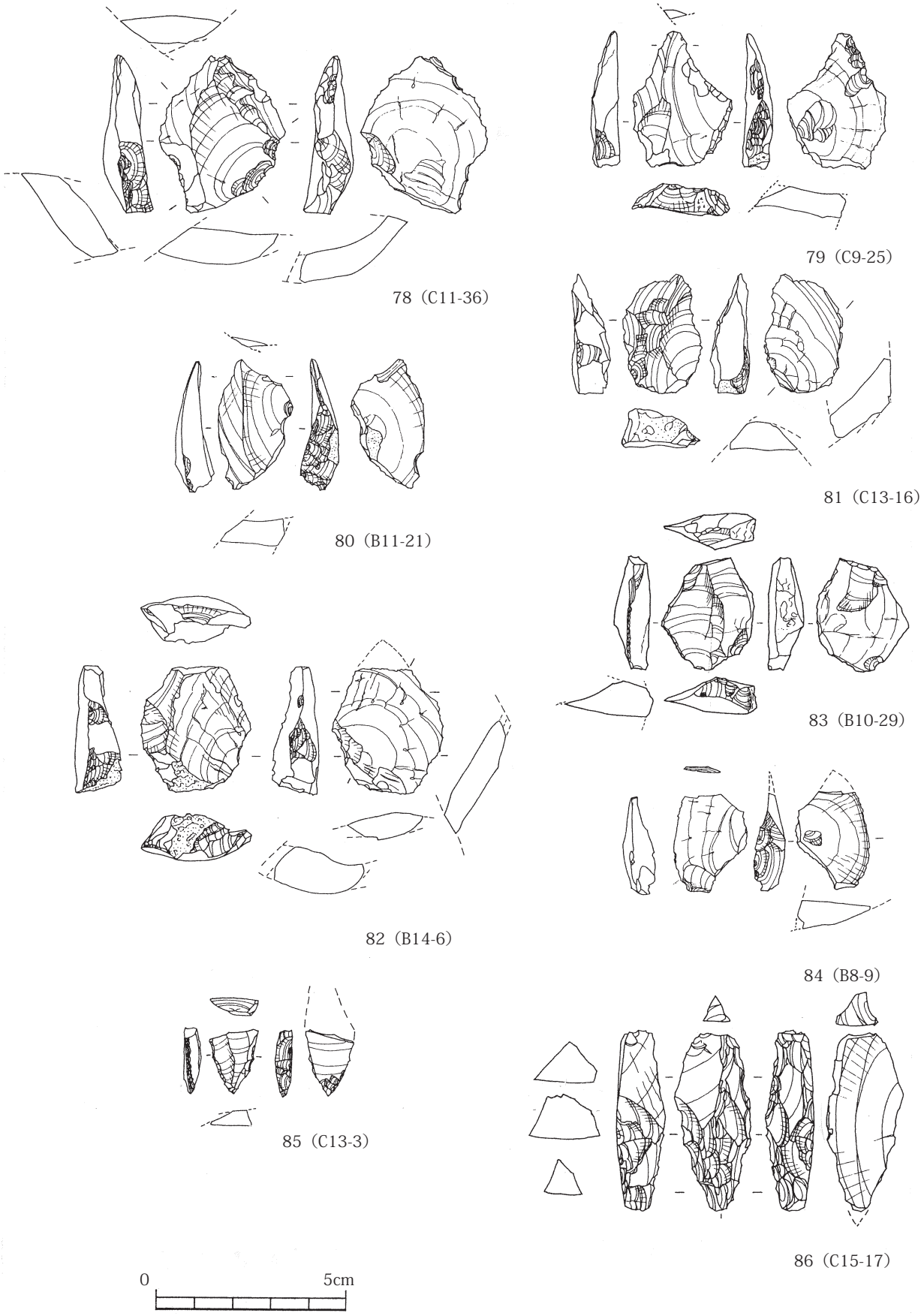
第 17 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材４(安山岩系岩石) 利用の石器実測図（２）



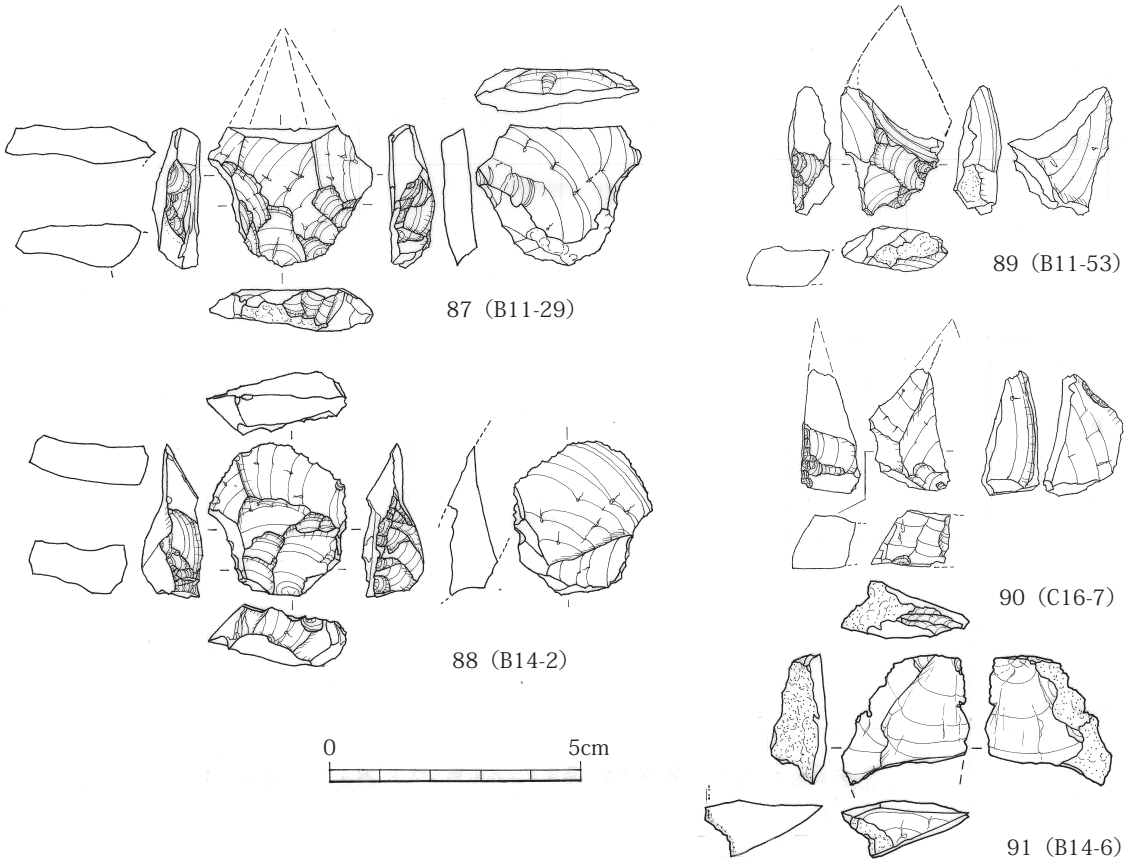
第 18 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 5 (推定牟田・腰岳産黒曜岩) 利用の石器実測図（1）



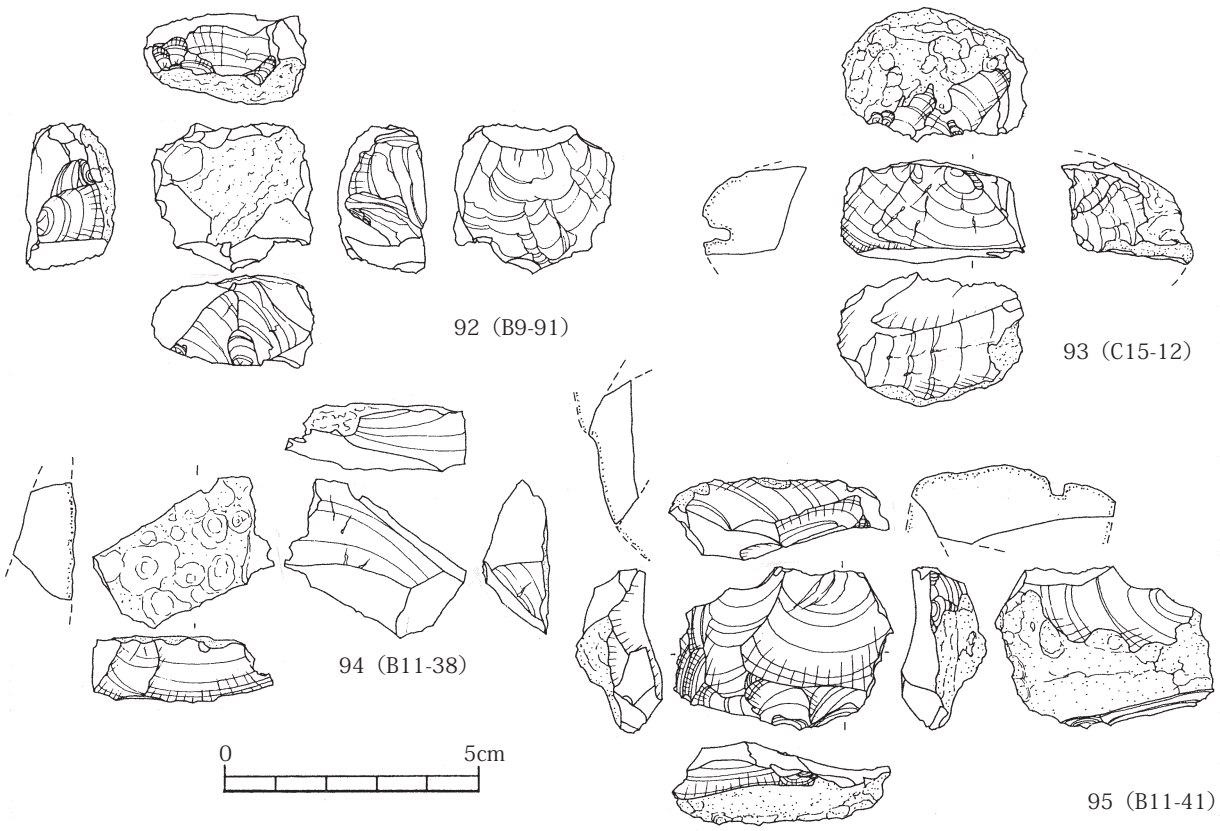
第 19 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 5 (推定牟田・腰岳産黒曜岩) 利用の石器実測図（2）



第 20 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 6 (推定西北九州産灰黒色黒曜岩) 利用の石器実測図（1）



第 21 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材６（推定西北九州産灰黒色黒曜岩）利用の石器実測図（２）



第 22 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材６（推定西北九州産灰黒色黒曜岩）利用の石器実測図（３）

（８）石材７を利用した石器類

石材７は、佐賀県の多久市・小城市周辺のサヌカイトなどの安山岩系の石材であるが、風化すると灰色、割ると黒色を呈する。石器の種類は、今峠型ナイフ形石器大坪類型３点（第 23 図 96･97、第 24 図 104)、掻器１点（第 23 図 98)、削器６点（第 23 図 99 ～ 101、第 24 図 103･106･107)。石核２点（第 29 図 130･ 第 30 図 132)、剥片１点（第 28 図 126)、この他、石材７の可能性があるものの明確ではない削器が１点ある（第 24 図 105)。

石材７の削器は、石材１から石材６までの石材の中にもみられる、本遺跡に共通する削器といってよいだろう。1：表面側の両縁部に加工を施すもので､ほぼ並行する例 (99･103)、２：両側縁に並行する加工を施すが、そのうち片側はポジ面側である例 (100)、３：片側縁の加工が途中から反対面に施す例 (101)、４：両縁が収束によって形成された先端付近の片側が表側で、もう一方の片縁の裏側に加工を施した例 (106･107) がある。なお石材７で、上記した削器の一例には切断・折断とは考えにくい幅広剥片剥離面がある (107)。

石材７の石核は、瀬戸内技法的な例である (130)。上記した剥片は、このような石核から剥離された横長剥片であろう (126)。また剥片を素材とし、礫面を打面として固定し小口から剥片生産を行った石核がある (132)。

（９）石材８を利用した石器類

石材８は角閃石安山岩で、削器６点（第 25 図 108、110 ～ 112、第 26 図 113、第 29 図 129)、石核９点（第 26 図 114･115、第 27 図 116 ～ 122) からなる。これに明確ではないが石材８と思われる石核を１点図示している (115)。

石材８を用いた削器の特徴は、不定形の六角形の素材の表裏縁部に加工を加えた例 (108)、石匙状の幅広形態で、収束する先端部周辺の表裏に加工を加えた例 (110･111)、楕円形素材の表面縁部に加工を加えた例 (112) からなる。不定形の五角形をした大型の剥片の裏面縁部に三回程度の剥離を加えた例 (129) は、加工途中の例かもしれない。

石材８（角閃石安山岩で）を用いた石核の特徴は、幅広剥片の短軸部分での片側表裏で打面を入れ替えて剥離した例 (114) である。この手の例は、反対縁方向の両面で同様な剥離を行う過程の前段階にあたるのだろう。A：楕円扁平礫は、半割礫などを用い、表裏両面で求心的剥離を行うか、その方向性の石核 (116 ～ 118)。B：半割礫・礫を用い、打面を作出か礫面を打面として剥離を行う例（第 119･120)。C：多面体状に剥離を行った例 (121･122)。

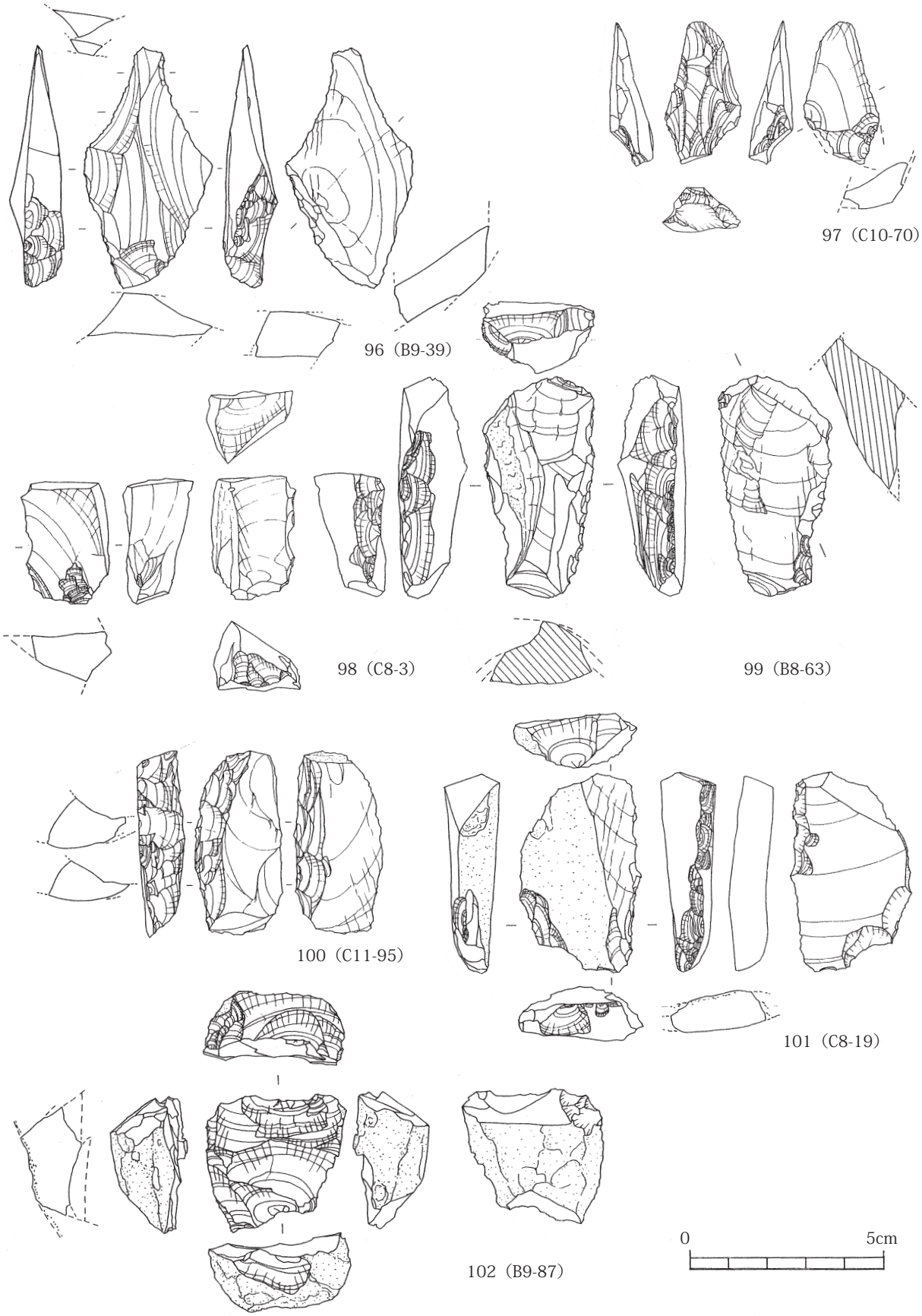
（10）石材９・石材 10 を利用した石器類

石材９･10 の例は、元々数量が僅かであり、今回提示の石器類にはないので詳述しない。

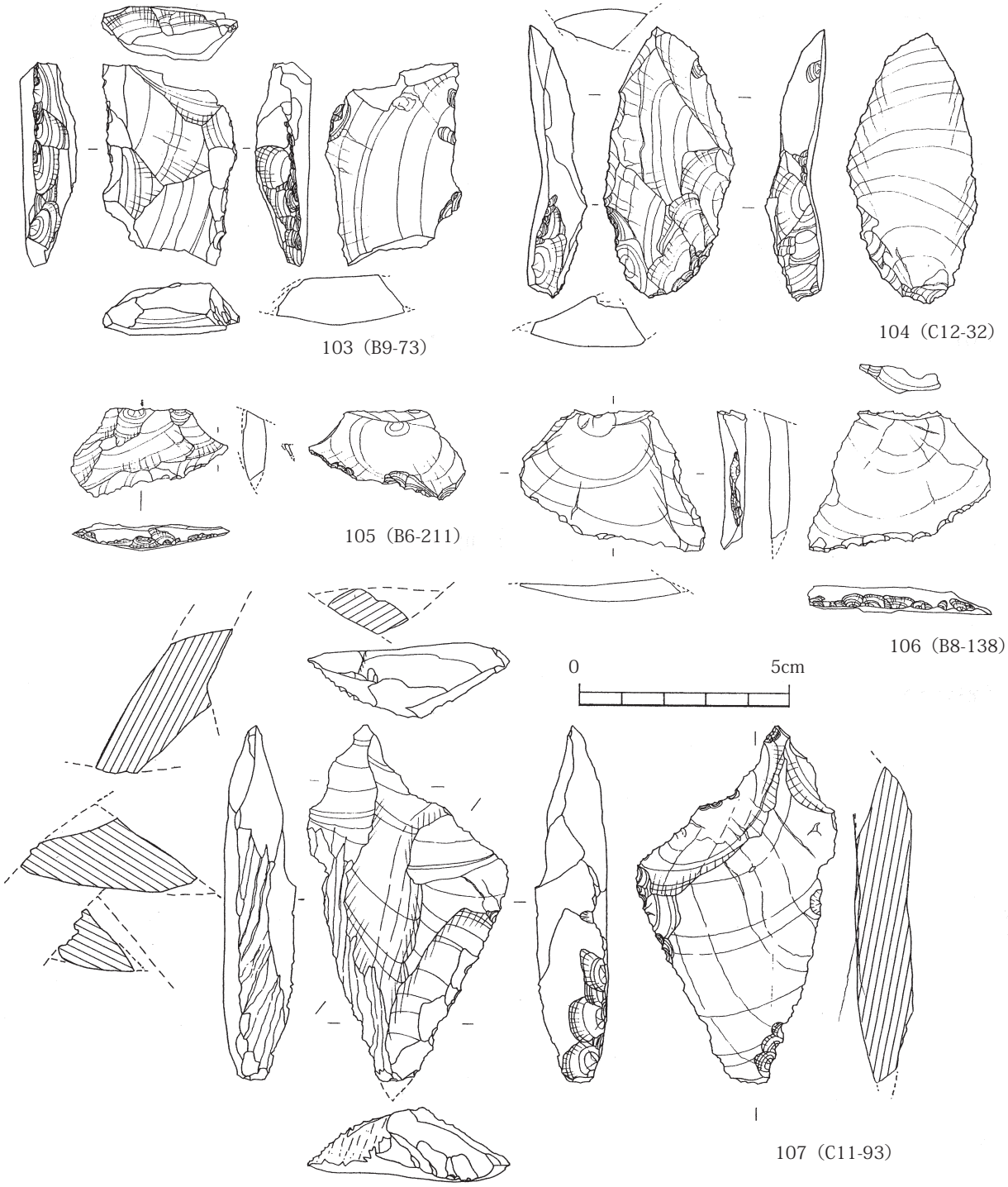
（11）石材 11（その他の石材）を利用した石器類

石材 11 は、珪化木、玄武岩、サヌカイト系、ローム層中に自然貫入していたと思われる黒曜岩、珪質岩である。また、その他の石材もある。ここでは石材の石質名をそれぞれ明示して報告する。

鉄石英に近い石質の石材を用いた二側縁加工のナイフ形石器で、素材は小型の幅広剥片を用いている（第 28 図 123)。UF としたが、あるいは今峠型ナイフ形石器に関連する事例かもしれない（第 28 図 124)。これは鉄石英を用い、剥片の裏側の左側縁に微細な剥離痕が連続する。白い玉髄を用い、斜行する縦長剥片を素材とした UF もしくは RF がある（第

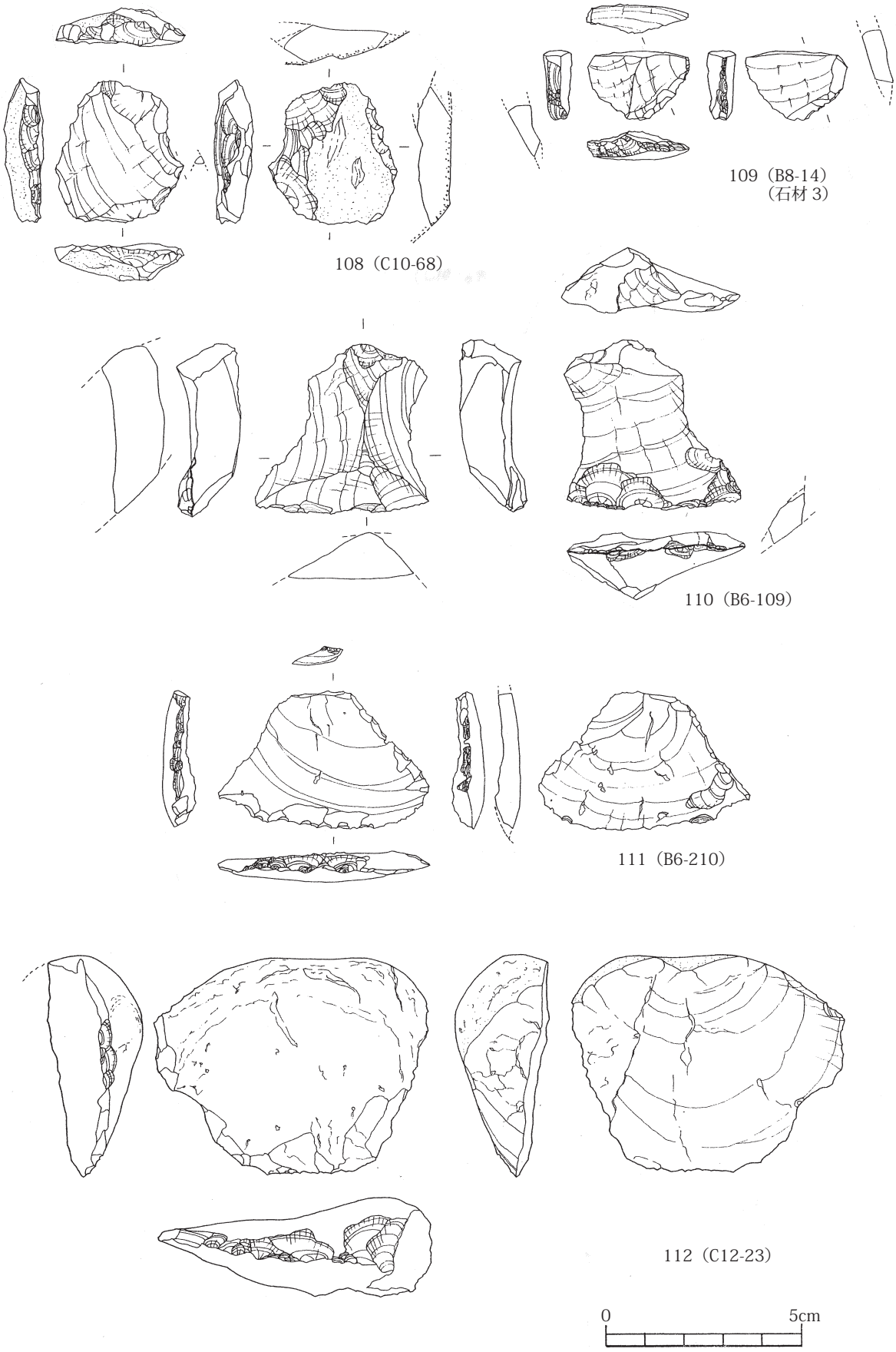


第 23 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 7（サヌカイト類似の安山岩）利用の石器実測図（1）

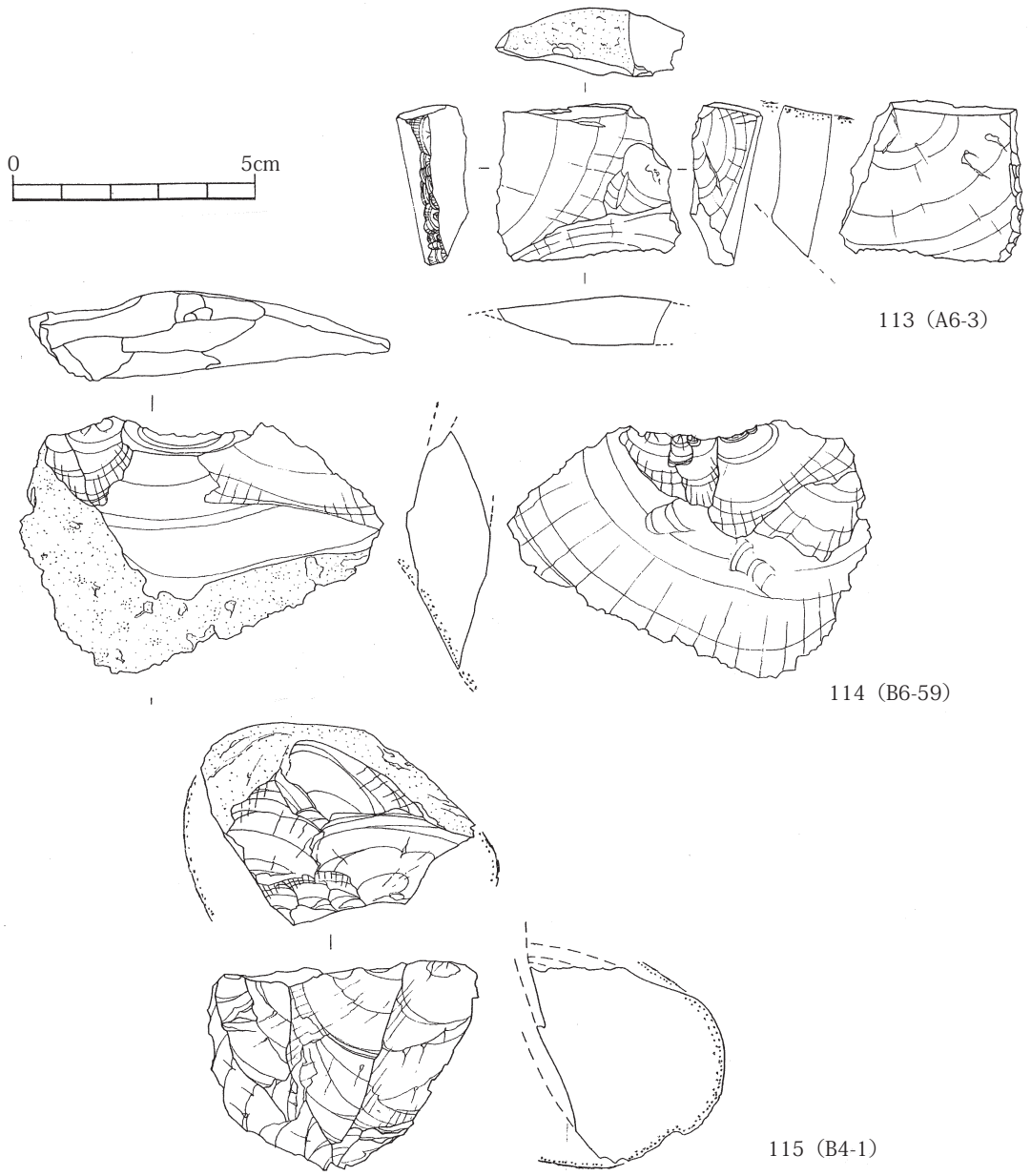


第 24 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 7（サヌカイト類似の安山岩）利用の石器実測図（2）

28 図 115)。裏面に平坦な大小 5 つの剥離痕があるが、あまりに平坦すぎて素材剥離時のポジ面との差は僅かであり、意図しない何らかの衝撃痕かもしれない。また石材名が判断つかない例がある (第 28 図 127･128)。一つは斜行する剥片を用いた削器で、この遺跡の削器に多い裏面に加工痕がある (127)。突出部を活かすようにした加工もよく似た同様な特徴である。もう一例は、白く硬い石で、石理部分で割れた剥片を素材とし、両縁は表面側と裏面側と別方向に加工を加えている。加工の角度でいえば、右側縁が 80 度から 90 度近くの急傾斜で、並行する縁部の場合は比較的に緩傾斜であり、刃部と考えられる (128)。



第 25 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 3・石材 8 利用の石器実測図（1）

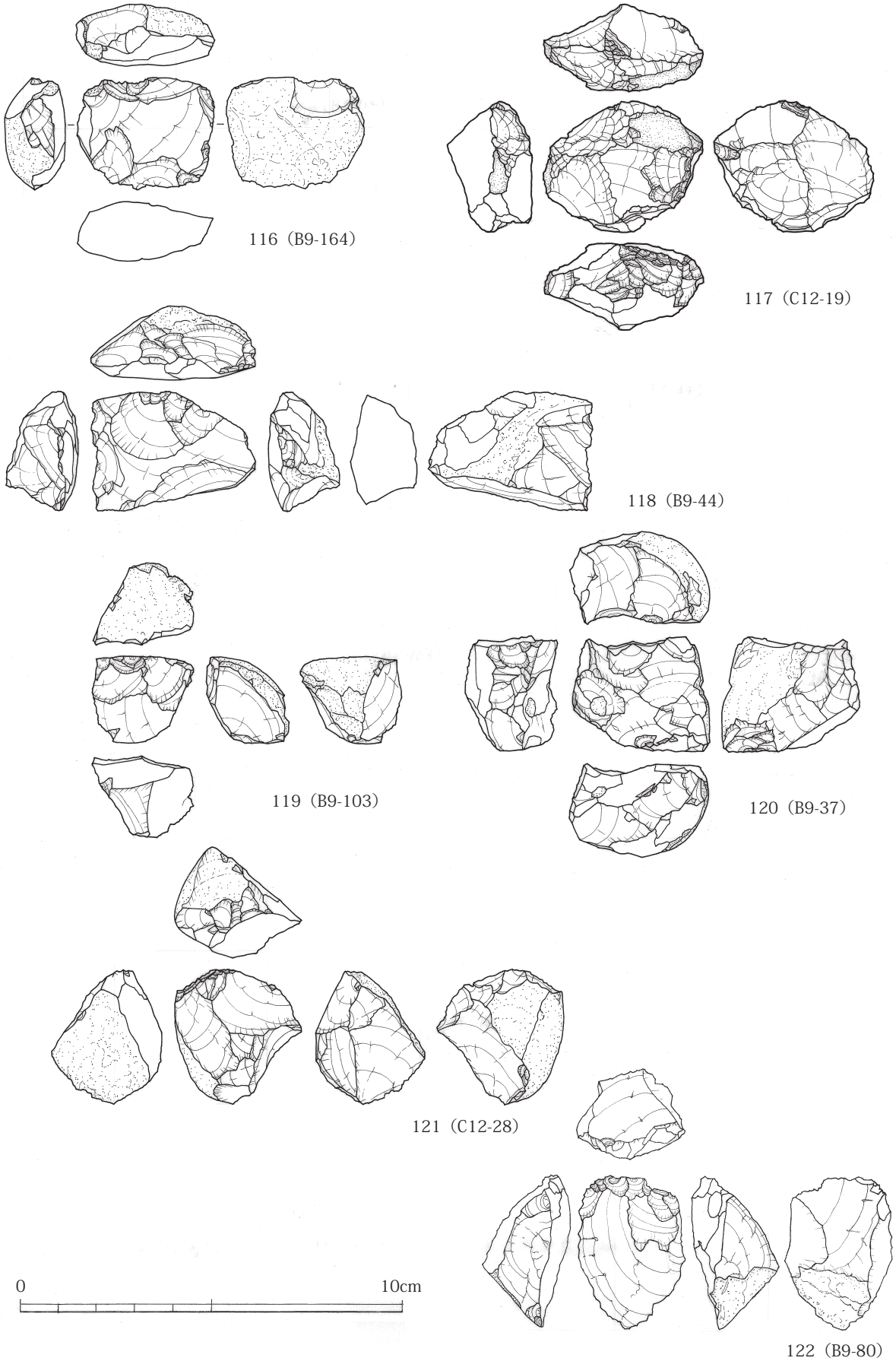


第 26 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材８（玻璃質安山岩）利用の石器実測図（２）

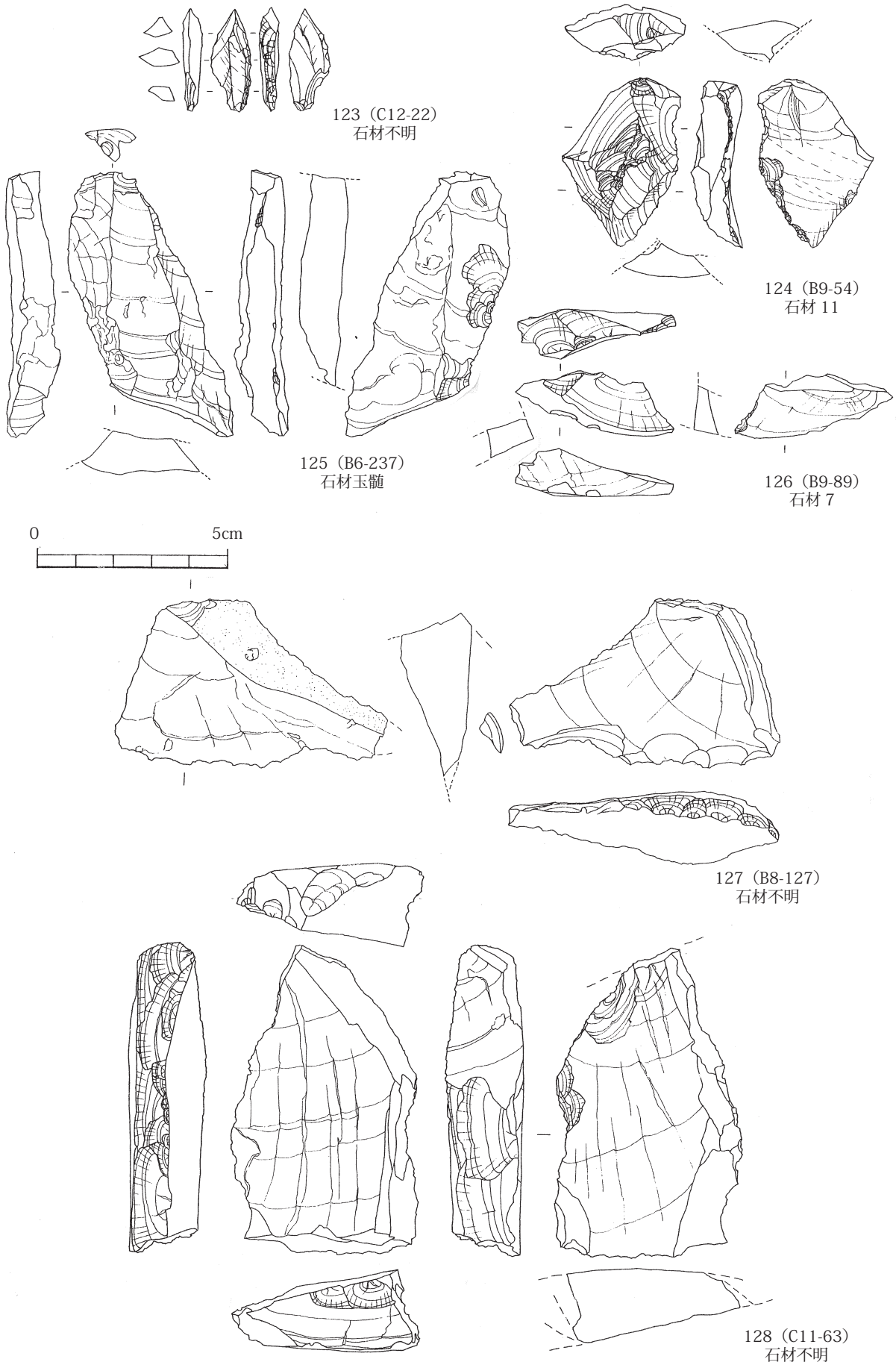
この他、石英を用いた石核がある (131)。一回の剥離で打面を作出、ここから下方向へ剥離を繰り返した例である。以上みてきた石材 11 やその他の石材を利用した石器類は、図化していない剥片・チップを含めても数量的に数は少ない。

（12）小結

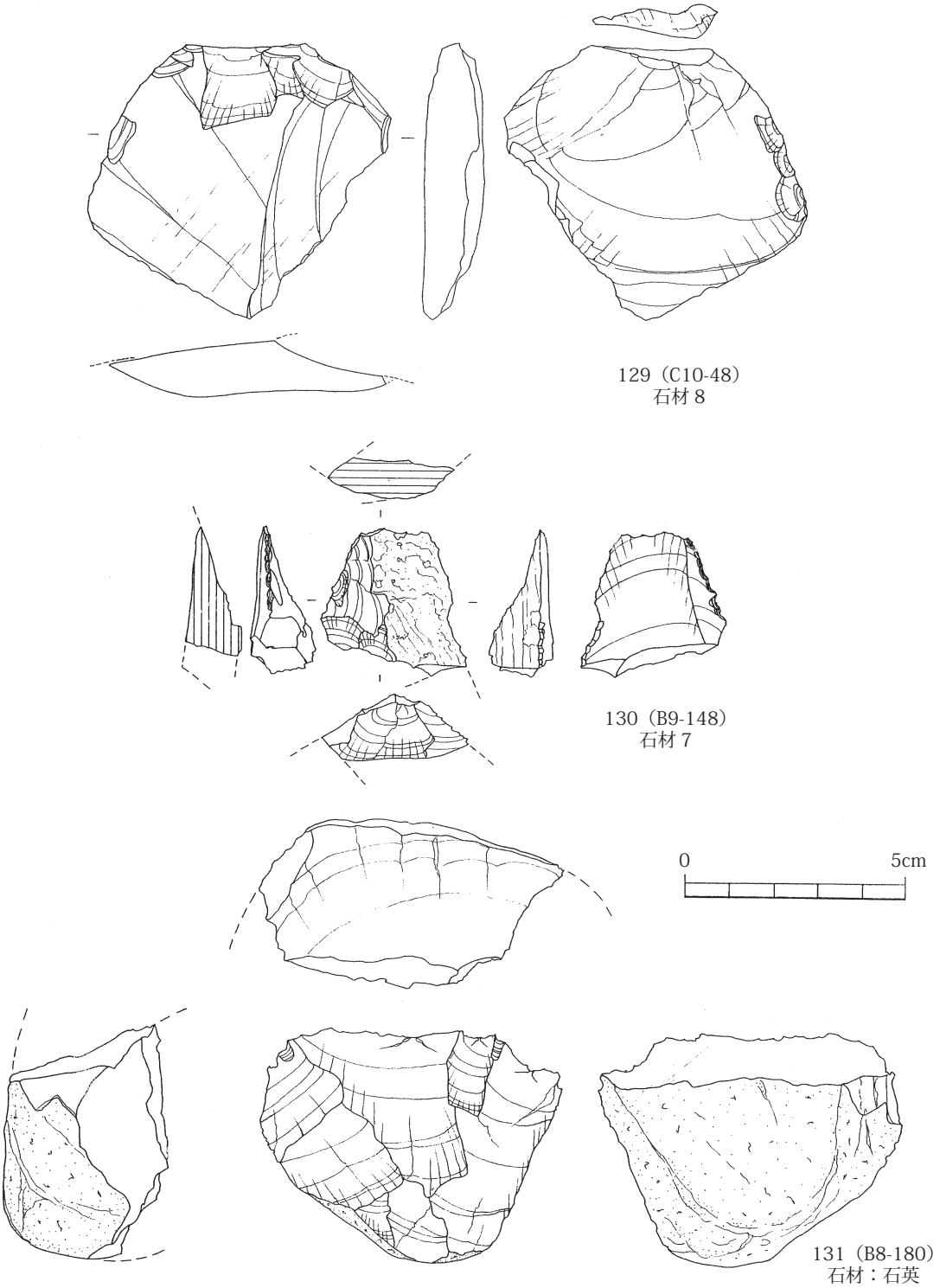
これまで見てきた石器類は、今峠型ナイフ形石器を主体とする石器群の段階に帰属するものが大部分と考えている。ただし冒頭でもふれたように調査区の西半部では細石刃文化の石器群が数量的には少ないもののオーバーラップするように分布している。その為、石材 5 (推定牟田・腰岳系黒曜岩) の一部や削器・掻器の中には細石刃石器群に帰属する可能性はある。また、これまで報告した石器類のうち、本遺跡での剥片剥離が盛んに行われたのは、石材 2・石材 3・石材 6・石材 8 などである。



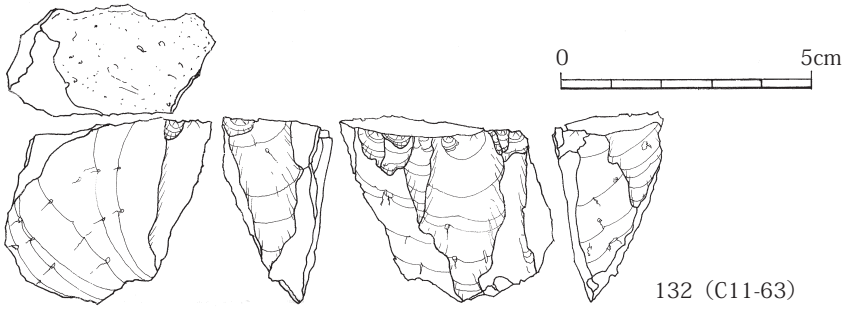
第 27 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 8（玻璃質安山岩）利用の石器実測図（3）



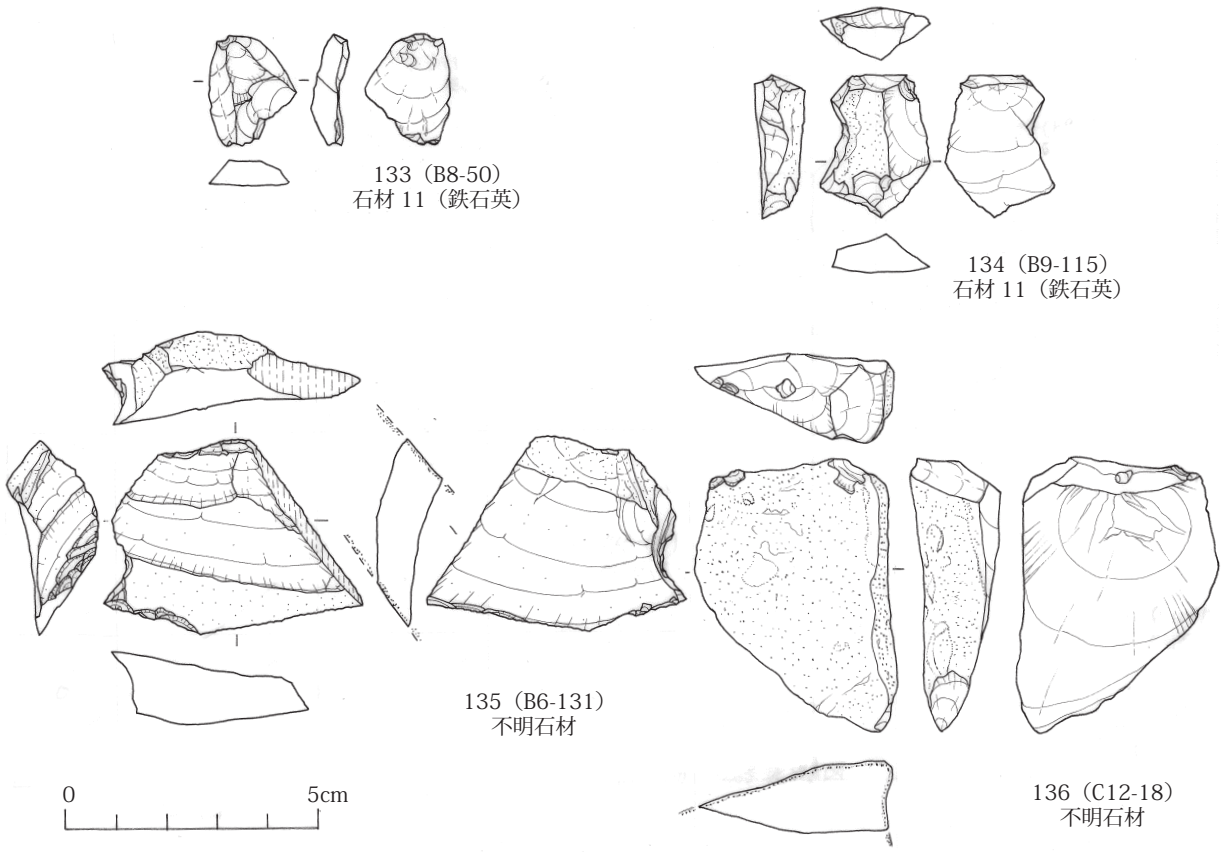
第 28 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材６・７、その他の石材、不明石材利用の石器実測図



第 29 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 7・8、石英利用の石器実測図



第 30 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 7（サヌカイト）利用の石器実測図



第 31 図　五馬大坪遺跡出土石器 石材 11、不明石材利用の石器実測図

5　五馬大坪遺跡の石器類について － 細石刃石器群 －

（1）石器類の分布

五馬大坪遺跡は、冒頭で述べたように馬の背のような尾根状地形の頂部に沿って計画された道路であったため、長さ（東西）280 m、幅 10 ～ 18 mの細長い調査区である。この細長い調査区の西端に近いB・C5 区東端からB・C10 区の間とB・C26 区からB・C27 区の間に細石刃石器群に関する石器類が分布する（第 32 図）。前地区を西地区、後地区を東地区と略称する。

西地区は既に述べてきたように、圧倒的に多いナイフ形石器群の中から抽出した。そのなかでも細石刃石器群の集中する部分を石器ブロックの 1（以下、Ｓ１ブロック）と 2（以下、Ｓ２ブロック）を認定した。その周辺にはまばらに細石刃や細石刃核が散布している。Ｓ１ブロックがB7 区の南西隅部に位置し、Ｓ２ブロックはその南東でB7 区とB8 区の境界をまたぐように分布している。その南西約５ｍで西地区のもう一つのＳ２ブロックが広がる。Ｓ２ブロックは東西５ｍ、南北 3.3 ｍ、面積は 16㎡程度、包含層の厚さは 0.20 ｍの石器ブロックである。

西地区は、帯状にナイフ形石器を主体とする石器群が広がっているが、よくみると細石刃が幾分集まる範囲があり、ここにはナイフ形石器が分布していなかった（第６図）。この部分を細石刃石器群のＳ１ブロックとした（第 33 図）。このＳ１ブロックは伏角５度で傾斜している。分布の面積は 14.44㎡、包含層の厚さは 0.20 ｍである。

東地区も既に述べたように、弥生時代の墳墓遺構の間隙に分布しているような状況ながら、BC26･27 区で帯状に細石刃石器群が分布しており（第 32 図）、これを石器ブロックの

3(以下、S3ブロック)とする。このS3ブロックにはナイフ形石器群が全く含まれておらず、細石刃石器群だけで構成されている。

（2）S1ブロックの石器類について

S1ブロックの石器類の数量とその石材の関係は表のとおりである(表1)。細石刃が17点と最も多く、その石材は石材5(牟田・腰岳系黒曜岩)が7例で、他は表のとおりである。このうち図示したのは石材5の4例である(第36図138･139･141･142)。

表1　S1ブロックの石器数量表

石器類	石材2	石材3	石材4	石材5	石材6	石材7	石材9	石材11
細石刃	4	1		7	1	1	3	
削器	4							
剥片	49	1	2	1			4	1

削器は4点で、石材2(小国系黒曜岩)を用いている。このうち図示したのは1例で、端部が鈍角ながら収束する削器である(第9図21)。

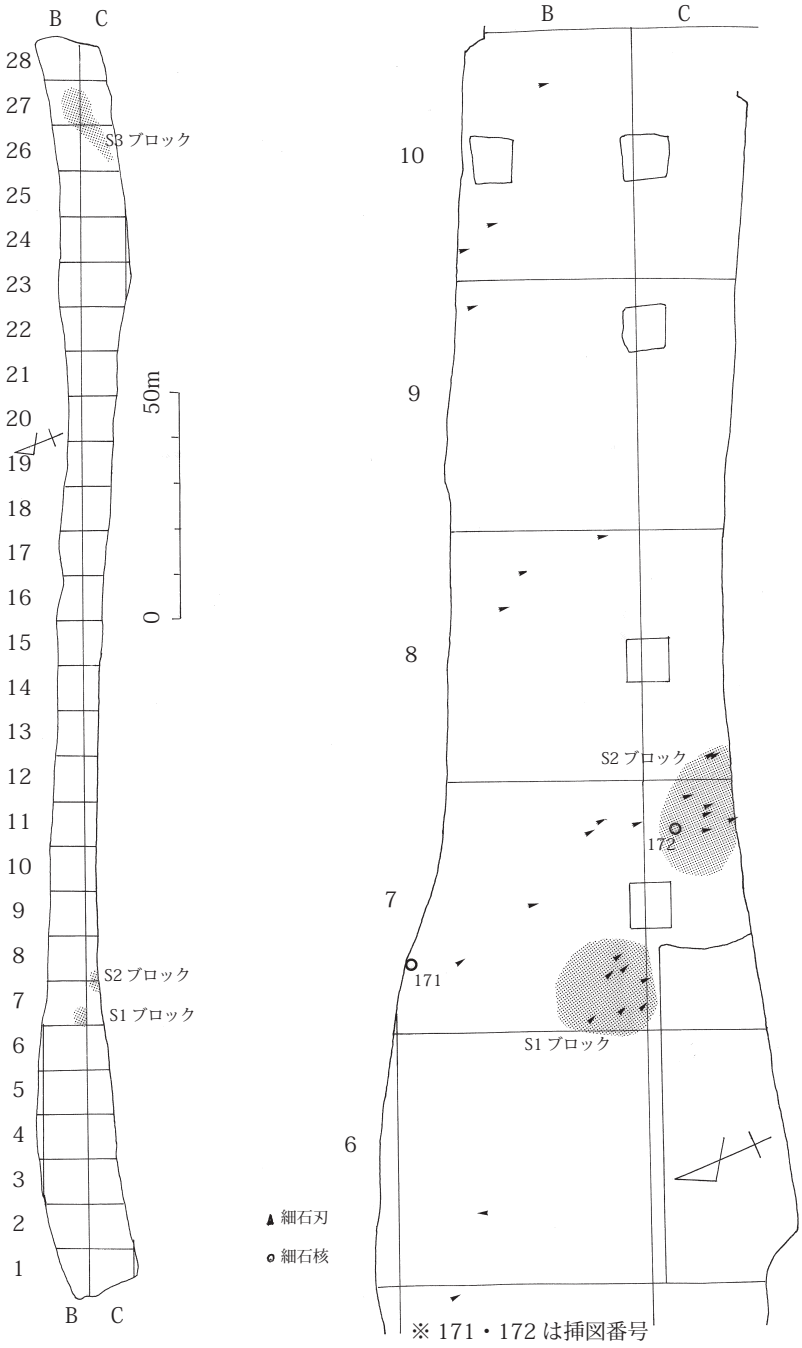
石材2を用いた微小剥離痕のある石刃は、小型の小石刃の片側に微細な微小剥離痕がある(第9図19)。

剥片・チップは58点ある。そのうち石材2(小国系黒曜岩)が49点を占めている。石材2を用いた盛んな剥片剥離作業が窺える。

（3）S2ブロックの石器類について

S2ブロックの石器類の数量とその石材の関係は表のとおりである(表2)。細石刃は7点ですべて石材5(牟田・腰岳系黒曜岩)である。

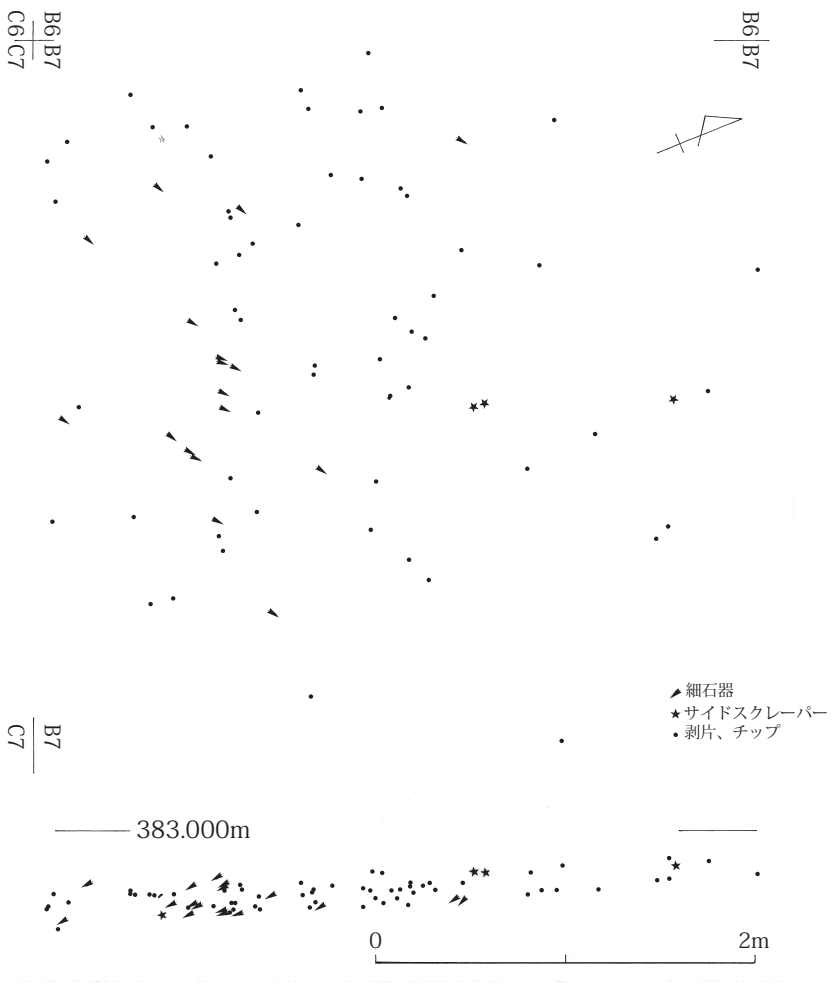
石材1を用いた加工痕のある剥片は、三角形断面を持つ剥片の上部を折断後、斜行する加工を加えつつノッチ状の抉りをいれた例である(第8図9)。石材11を用いた例として、既報告で石材を溶岩とした細石刃核がある(第37図172)。風化はあまりしてい



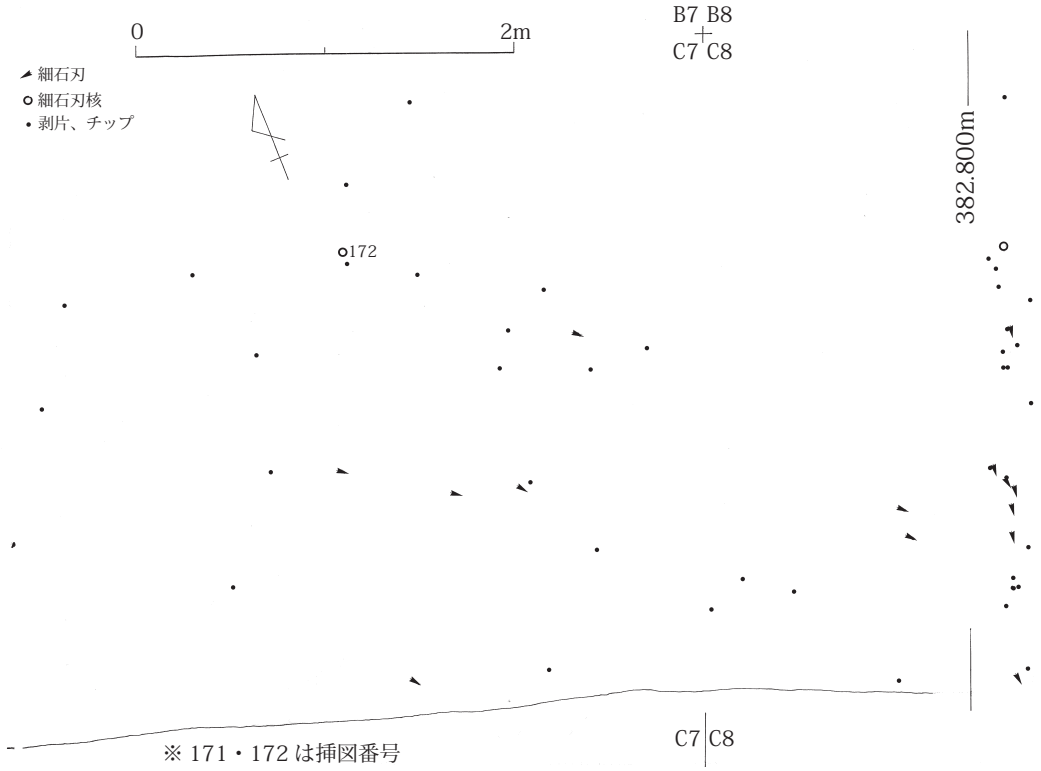
第32図　五馬大坪遺跡細石刃石器群の位置とS1･S2ブロック

表2　S2ブロックの石器数量表

石器類	石材1	石材2	石材3	石材5	石材6	石材8	石材 その他の安山岩
細石刃				7			
細石刃核							1
剥片・チップ	3	6	1		5	2	



第 33 図　大坪遺跡 S1 ブロックの平面・垂直分布



第 34 図　大坪遺跡 S2 ブロックの平面・垂直分布

ないが、黒褐色でザラッとした質感の岩石で、ここでは当面、ガラス質溶結凝灰岩と考えておく。この細石刃核は、打面が平坦で、その短軸部分の両縁部近くに「固定痕」と呼ばれる剥離痕がある。この面を打面として上から下方へ石核整形剥離痕がある。反対の側面は、下方向から上方への石核整形剥離が行われている。この剥離は、上方の打面を切る関係にある。細石刃剥離作業面は、二つの小口で行われている。以上のことから船野型細石刃核での分類で大過ないだろう。

（4）ブロック外の石器

以上、S1･S2 ブロックの内容を紹介した。これらのブロックの周辺には細石刃関係石器類がまばらな散布をしている。おそらくブロック内石器類との関係で把握される石器類である。それらについては表と挿図を参考にされたい。

ブロック外の石器類でふれておきたい細石刃核がある（第 37 図 171)。これはボートのような体形をした例で、石材 1（流紋岩）を

用いている。分厚い剥片のポジ面を打面として両側面で石核整形剥離作業を実施している。細石刃剥離作業面は両小口で行っている。このような特徴から典型的な船野型細石刃核である。石材1は、大野川本流方面で採取され、同地域で盛んに使われている石材である。本遺跡では、細石刃関係資料に石材1を用いた例は、この細石刃核以外にない。したがって細石刃核が大野川流域方面から持ち込まれたが、剥離作業は行われていなかったと推定できる。

表3　S3ブロックの石器数量表

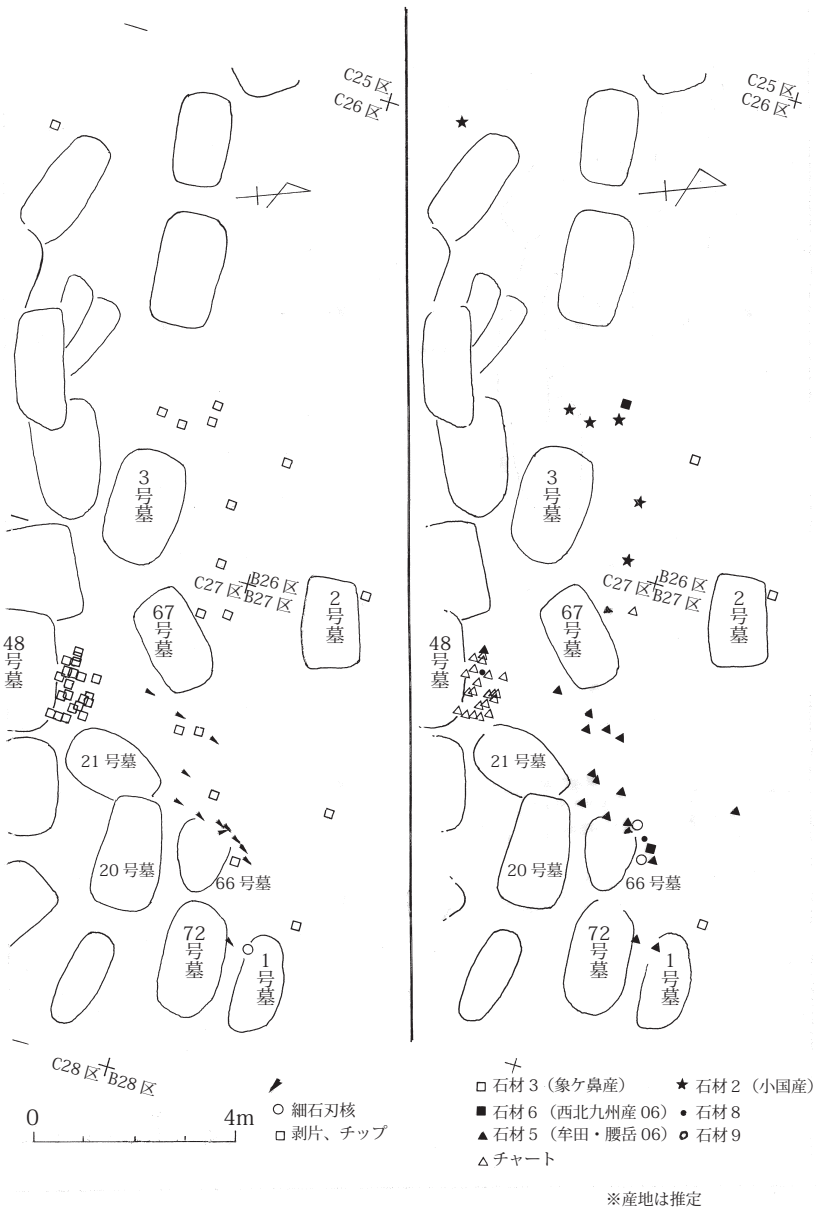
石器類	石材2	石材3	石材5	石材6	石材7	石材8	石材チャート
細石刃			9	1	1	1	
細石刃核			3				
剥片・チップ	5	4	6	1	1	1	21

（5）S3ブロックの石器類について

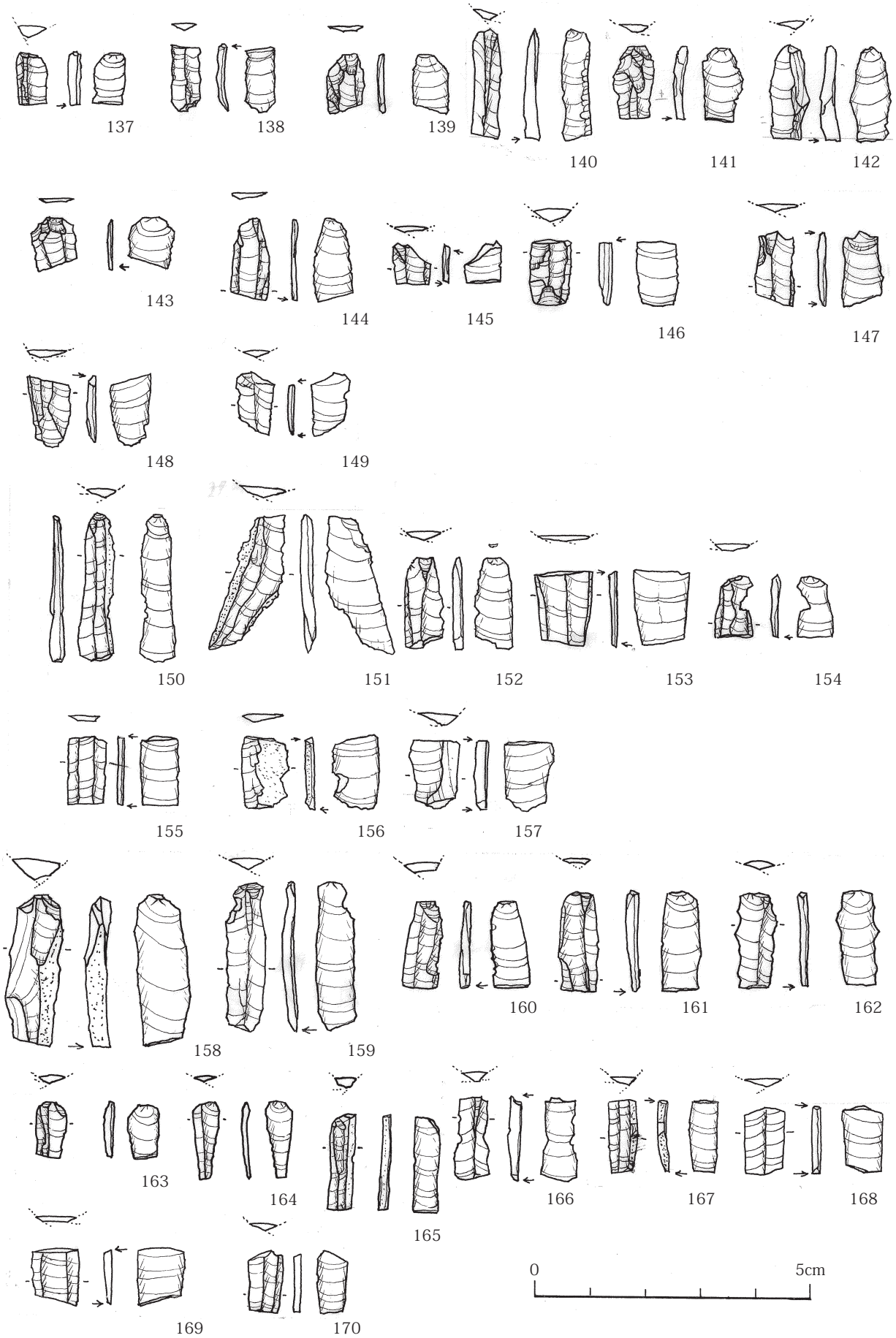
S3ブロックは五馬大坪遺跡の中では東地区にあたる。区画としては、B26・B27・C26・C27がその分布区画に該当する。やや斜行するように東西に長い石器ブロックである(第35図)。

このS3ブロックを微視的に見ると3号墓の西側、3号墓の北側、67号墓の東側、48号墓の北側、21号墓の北側、66号墓の北西などに集中する。なかでも48号墓の北側の集中部は、チャートの小さなチップが密集している。この中にはチャートの細石刃は含まれておらず、細石刃剥離に伴う作業場ではないといえる。66号墓の北西は石材5の細石刃が集中しており、細石刃剥離の場所と思われる。

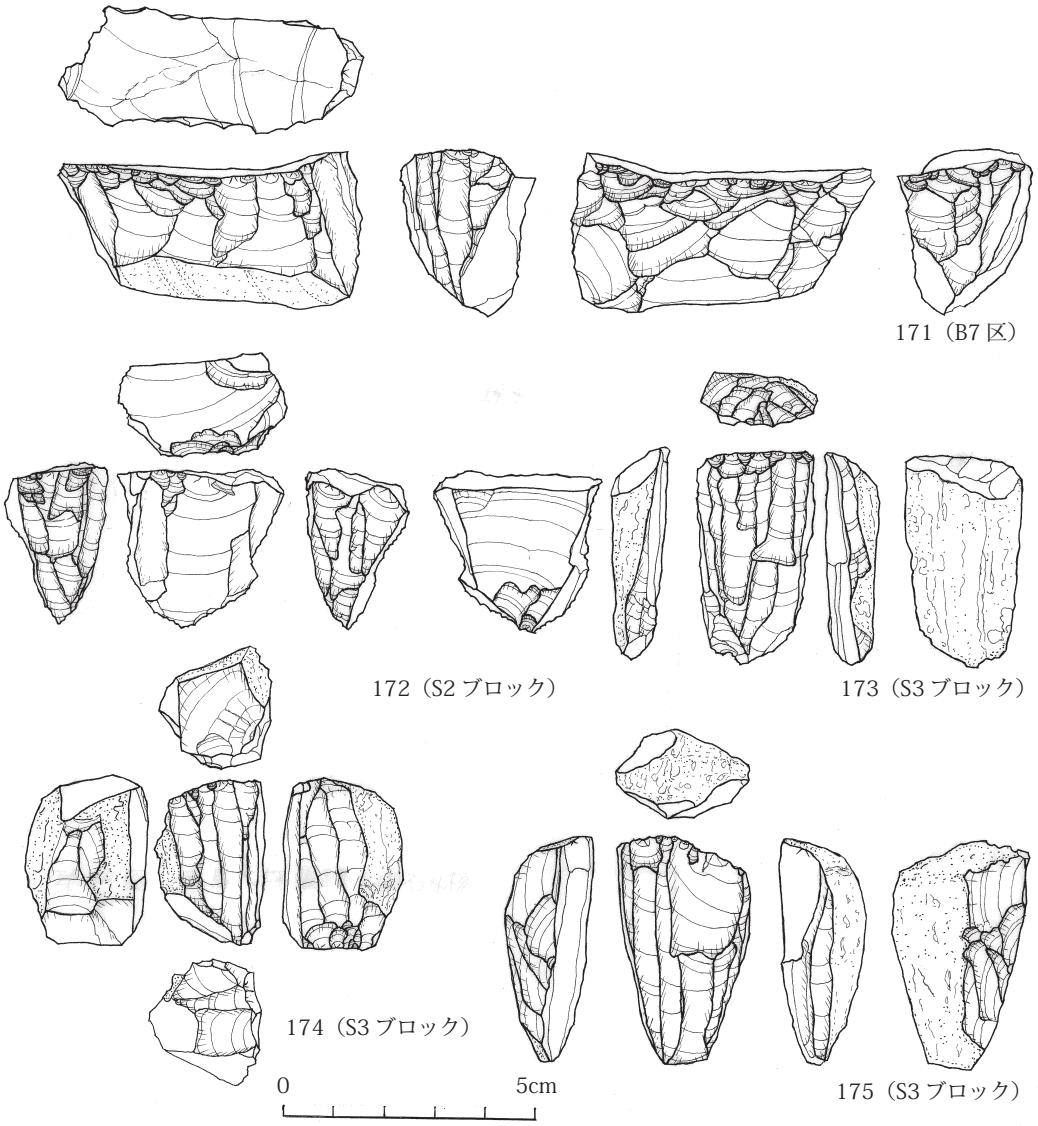
細石刃は石材5から8までの石材を用いる(表3)。このうち石材5が9例であり、8点を図示している(第36図150～157)。S3ブロックでは、石材5を石材とする細石刃核が3点出土している(第37図173～175)。いずれも傾斜打面を有する典型的な野岳型細石刃核である。このうち一例は180度打面を移動させ、対向する方向からも細石刃を剥離している(第37図



第35図　大坪遺跡S3ブロックの平面分布



第 36 図 大坪遺跡の細石刃　137 ～ 142:S1 ブロック出土、143 ～ 149:S2 ブロック出土
150 ～ 157:S3 ブロック出土、158 ～ 170:S2 ブロック出土



第 37 図　大坪遺跡の細石刃核 171:B7 区出土、172:S2 ブロック出土・173 ～ 175:S3 ブロック出土

174)。

以上見てきたＳ３ブロックは、野岳型細石刃核を主体とする石器群である。残核をみると、3 例とも良質な石材 5 (推定牟田･腰岳系黒曜岩) を選択している。石核には礫面が残っており、その起伏形状を観察すると原石はせいぜい拳大程度の大きさに満たない小礫と推定する。一例は作業面方向からの細かい調整剥離により傾斜打面を作出している (173)。この打面から押圧剥離で細石刃を剥離しているが、作業面と背面 (裏面の礫面) との厚さが約 10mm と薄くなっている。もう一例は、調整剥離による傾斜打面ではなく、礫面の屈曲による傾斜礫面を傾斜打面として細石刃剥離を行っている (175)。三例目は、両極方向に傾斜打面が残る (174)。これは傾斜打面作出後、細石刃剥離を行い、次に傾斜打面を 180 度反対面に作出し細石刃剥離を行う。これに伴う上下の細石刃剥離痕が交差することになる。以上見てきた 3 例の細石刃核は、その特徴から野岳型細石刃核の特徴を持っていることがわかる。またＳ３ブロックの細石刃文化の特徴がよく示されているものと思われる。なお、この石器ブロックには、船野型細石刃核や、大野川流域に多い石材 1 (流紋岩) を用いた石器類は一切なかった。石材組成と細石刃関係の石材利用をみると、細石刃関係が石材 5、その他は、チャートなどが削器の石材に使われたことがわかる。

6　宇土遺跡の石器類について

(1) 遺物の分布

宇土遺跡は、東西に長い尾根状丘陵の上に立地しており、各時代の遺構遺物はこの尾根に沿って分布する(第38図)。旧石器時代遺物についても既報告の一覧表、本論末の一覧表をみてもわかるように粗密はありながら調査区の全域に分布している。農道が整備されるということもあり、Ⅰ地区では、B2区からB7区までの1トレンチとB11区からB13区までの2トレンチを設定した。しかし、Ⅱ地区からⅣ地区にかけては弥生時代・古墳時代遺構の覆土、またそれら遺構の検出作業や間隙を縫って調査したにすぎない。それでも挿図にみるようにまとまった特徴ある石器類が出土した。特に、石器類がやや集中する範囲として1から7までのブロックがみられた(既報告では第1集中部から第7集中部)。

なお、具体的な遺物の出土位置、種類、数量などは、既報告の遺物一覧表から読み取っていただきたい(天瀬町教育委員会1986)。

(2) 堆積と石器類の出土層位

基本層序については、「2五馬大坪遺跡・宇土遺跡の基本層序」で簡単に説明したが、ここでは宇土遺跡Ⅰ地区の堆積に即して説明する(第39図)。

Ⅰ層　クロボク土壌で、黒色有機質土である。厚さは30㎝から50㎝の幅がある。1号墳(Ⅲ地区円墳)の盛土下にも観察される。

Ⅱ層　暗黄褐色で、平均して10㎝弱の層厚である。Ⅰ層下部域とⅢ層上部域との漸移層である。

Ⅲ層　明黄褐色で、20㎝から30㎝前後の層厚である。粘質であるが、乾燥すると固くしまる。Ⅳ地区においてはⅠ・Ⅱ層が削平され、耕作土の直下に直接現れる部分もある。

Ⅳ層　暗褐色で、10㎝から30㎝前後の層厚である。乾燥すると垂直方向にひび割れが生じる黒色帯である。亀石山遺跡の調査では黒色帯の上部域にATの降下層準があるとの分析結果がでているので、本層も大野川流域の黒色帯(Black Band)に相当するとみられる。

Ⅴ層　明黄褐色で、20㎝～50㎝前後の層厚を有する。本層は強い粘性を有し、下部になるほど、クサリ礫、砂礫が増える。

Ⅵ層　10㎝前後の層厚を有するが、下部層群との間でレンズ状に堆積する。基盤層ヵ。

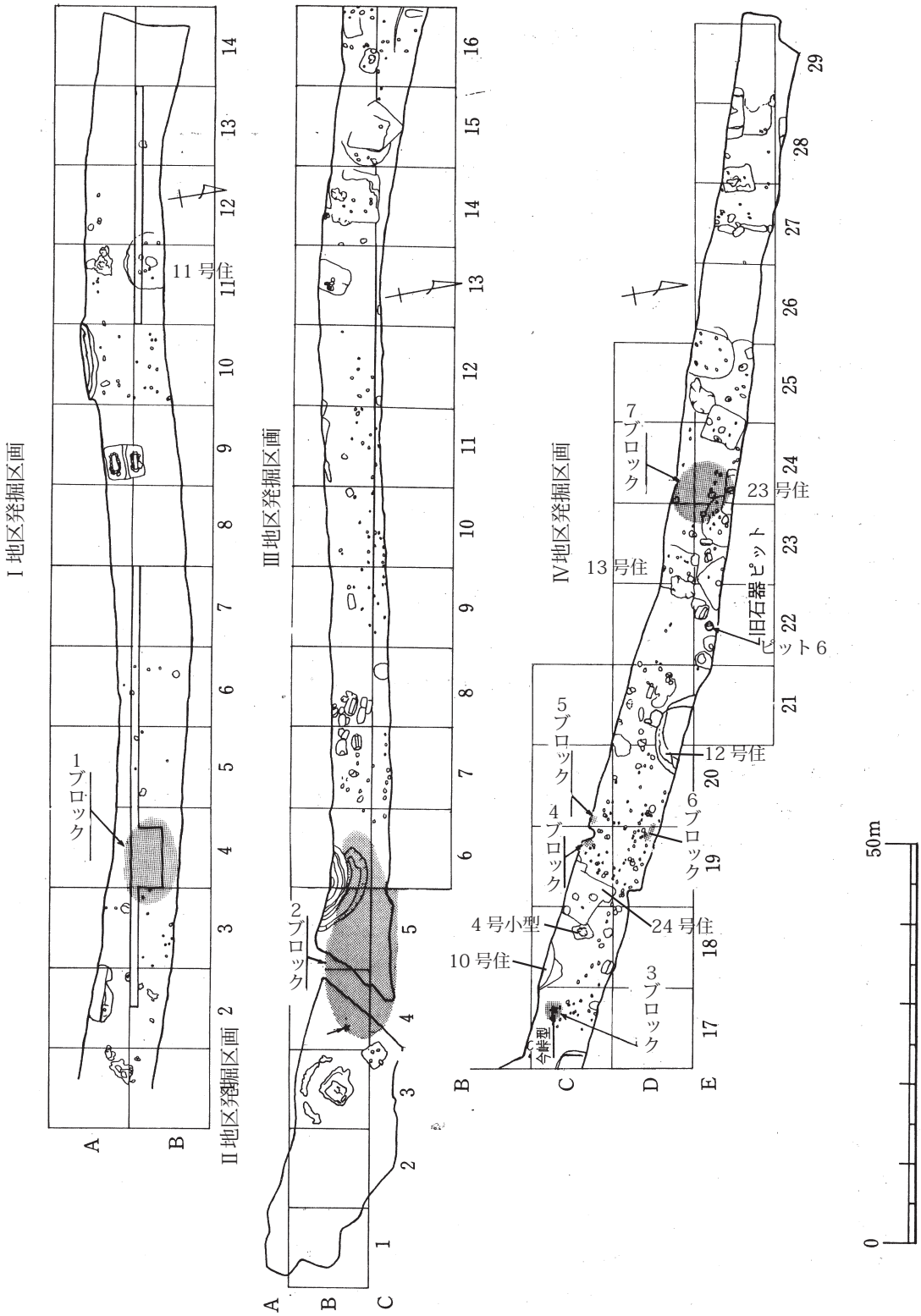
更新世後期相当層はⅡ層以下である。旧石器時代の遺物が出土するのは、Ⅱ層～Ⅴ層上部である。

(3) Ⅰ地区の旧石器時代遺物

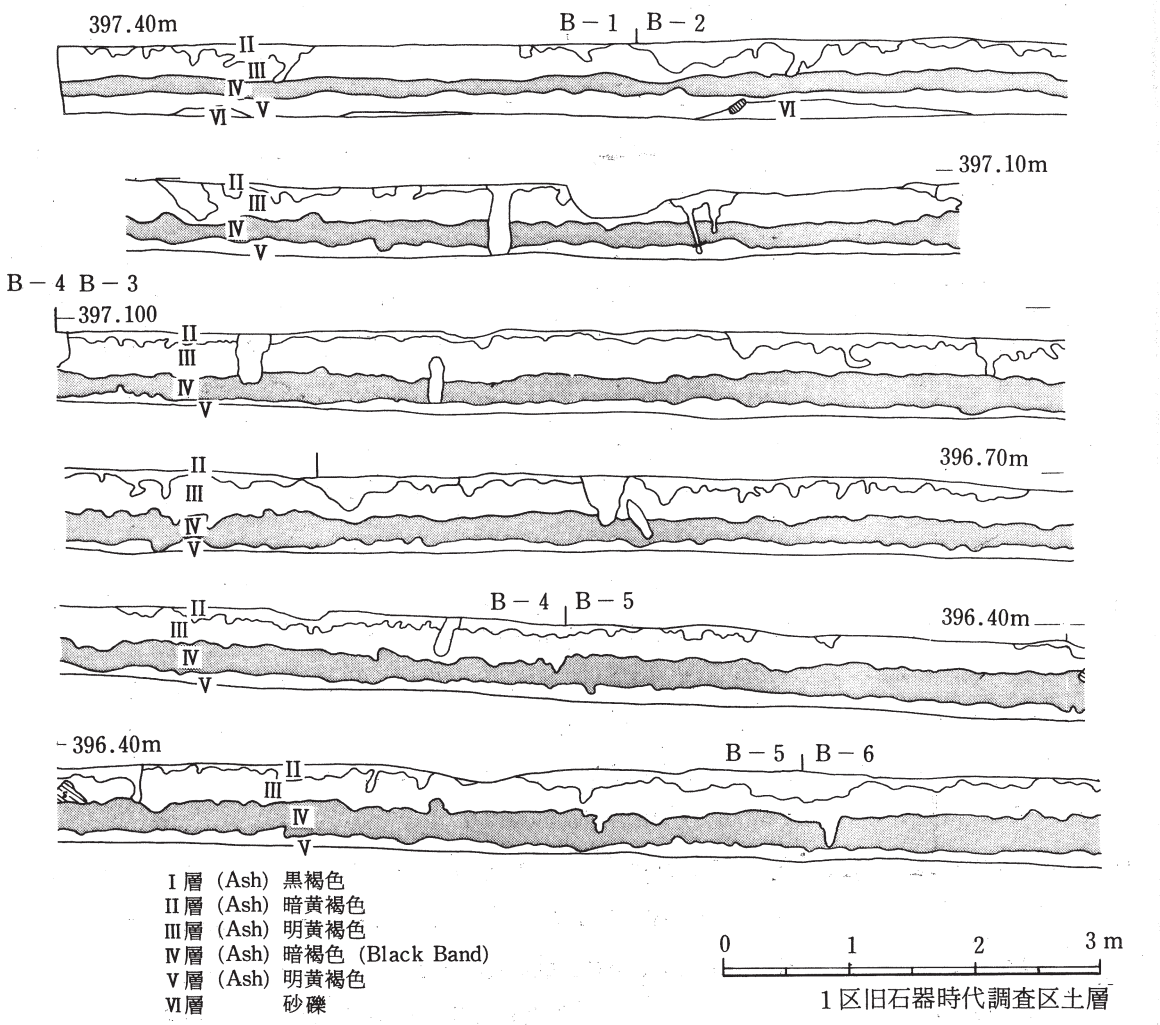
Ⅰ地区は、Ⅰ層を除去し、弥生時代・古墳時代の遺構検出作業を行った際に、旧石器時代遺物と思われるものが散見した。そこでⅠ地区のうち、B2区～B7区・B11区～B13区の南側に幅1mのトレンチを設定して掘り下げた(第38図)。その深度は土層断面図に示しているとおりである(第39図)。その結果、トレンチの各所・各層から遺物が出土していることは、宇土遺跡の既報告の遺物一覧表に示している。トレンチの中でもやや集中する傾向のあったB4区を拡張して掘り下げた結果、石器ブロックであることがわかった。これが1ブロックである(第40図)。ここでは1ブロックを中心にⅠ地区の石器類を報告する。

まず宇土遺跡の報告書に掲載した一覧表を基に、器種名の変更と自然石等の混入石材を

除いて作成した層位別遺物の数量表から石器群の特徴をみる(表4)。



第 38 図　宇土遺跡の旧石器出土地点



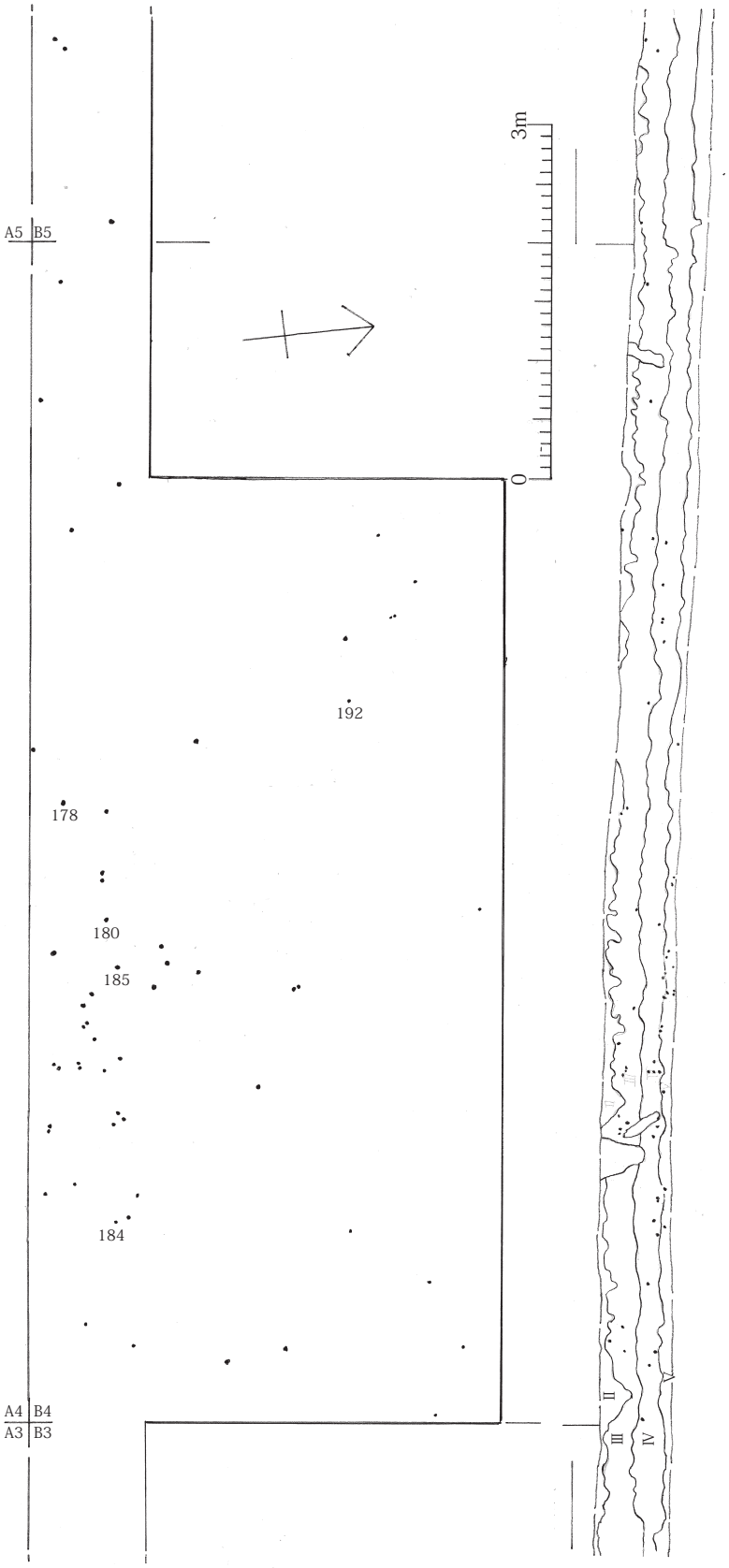
第39図　宇土遺跡Ⅰ区の堆積層序

表4　宇土遺跡　Ⅰ区トレンチの層位別遺物の数量表

区域	A3区		B4								B5			B6							B7					B11						B12		合計	層別合計	層の大別
層位	剥片	石核	ナイフ	台形	UF	RF	剥片	チップ	敲石	石核	RF	剥片	チップ	ナイフ	台形	UF	RF	剥片	チップ	石核	UF	RF	剥片	チップ	石核	ナイフ	台形	削器	剥片	石刃	チップ	RF	剥片			
Ⅰ												1				1	1	1		2					1									7	7	クロ
Ⅱ																1			1			1	1	1	4									9	9	漸移
Ⅲ	2	1		1		1	7	3		1	1	1	1		2			3							1			1				1	2	29		
Ⅲ上																															1			1		ローム
Ⅲ中							1	1															1											3		
Ⅲ下																									1									1	34	
Ⅳ			1	4			7	5		1		2		1		1		2	1								1		5	1	4			36		
Ⅳ上																					1	1	1											3		黒色帯
Ⅳ中					1		5	3																1										10		
Ⅳ下					1		1	6	1														1				1							11	60	
Ⅴ上					1																													1	1	ローム

※Rf:加工痕ある剥片、Uf:使用痕ある剥片

Ⅰ層はクロボク土で、出土遺物は7点出土しているが縄文時代に帰属するものや、旧石器包含層からの浮き上がりの例もあると考えられる。Ⅱ層は漸移層で9点出土し、この層以下が旧石器時代遺物の出土する包含層である。Ⅲ層からは34点出土し、Ⅳ層の黒色帯



第40図　宇土遺跡下層1ブロック平面・垂直分布図

からは60点出土している。明らかにⅠ地区における出土層位の主体はⅣ層：黒色帯にあることがわかる。

まず最も良好に石器類が出土したⅠ区の1ブロックの状況をみてみる。基本的に1ブロックの石器組成は、B4区出土石器類(表4)に、B5区Ⅲ層出土の剥片・チップ・加工痕のある剥片を加えたものである。土層断面図におとし込んだ垂直分布をみると(第40図)、Ⅱ層からⅤ層上部にかけて垂直分布が分かれる状況にはない。1ブロックは拡張部分からトレンチ西側にも若干分布している。平面分布全体から見ると、拡張区の南側方向に広がりそうな状況が窺える。石器類は、7点図示している(第41図178･180、第42図184･185･187･第43図190･194)。

台形様石器：1ブロックの台形様石器は4点ある。形態が扇形の例は両側を折断によって製作された例で、Ⅲ層から出土している(178)。この他、平面形が撥形の台形様石器があり、右縁は素材の打面部、左縁は斜めに折断した例でⅣ層から出土している(180)。次の例も剥片を斜め横にし、片側もしくは両縁を加工して刃部がやや斜めになっている台形様石器である(184･185)。また石材2の小国産黒曜岩を用いたナイフ形石器(第43図188)と剥片(第

43 図 190)、石材 1 を用いた鶏冠状剥片 (187)、石材 7 を用いた多面体の石核 (第 43 図 194) がある。このうちナイフ形石器は、斜軸剥片 (ノの字状剥片) を用いているが、出土層準は 4 層の中でも高い部分にある (188)。今峠型ナイフ形石器とすれば上部層からの混入と考える。側面に先行する剥離痕の残る剥片は、打面再生剥片ヵ (190)。以上が提示した 1 ブロックの遺物である。

1 ブロックから離れたトレンチ内にある石器類の分布であるが、1 ブロックからそれぞれ 10 m以上の距離があるＢ 6・7、60 m以上離れたＢ 11･12 からもⅣ層で 22 点の石器類が出土している (表 4)。この中には台形様石器も出土しており、明らかにⅣ層 (黒色帯) に主体を置く石器群と考えられる。その上層から出土した石器類は、一部を除きⅣ層石器群の関連石器と推定される。

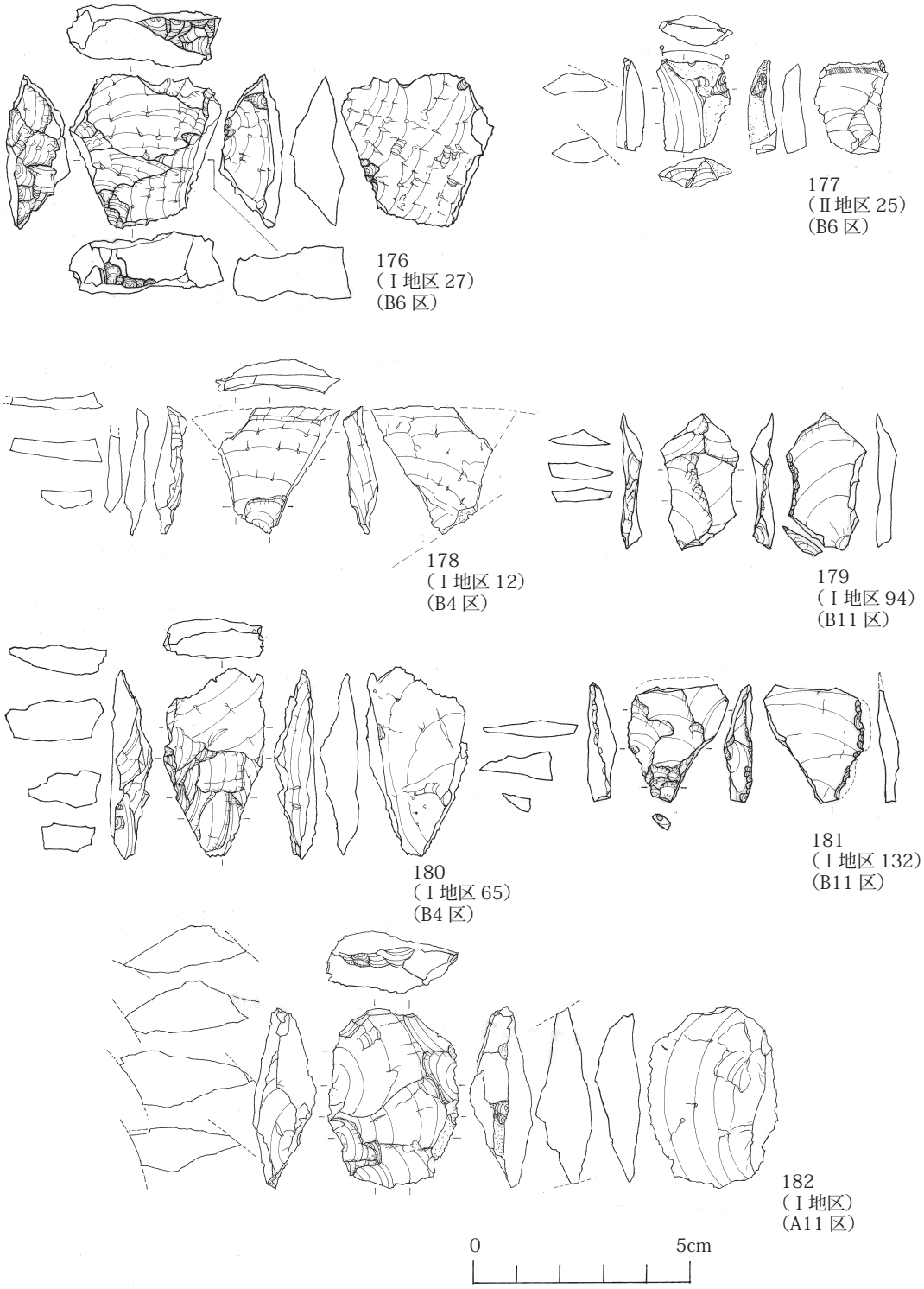
次に 1 ブロックから離れたトレンチ内にある石器類について報告する。

台形様石器は 6 点出土している (第 41 図 176･177･179･181･182、第 42 図 183)。このうち、小国産黒曜岩と推定される石材 2 の不定形剥片を用い、左側縁側を打ち欠きによる加工、右側縁側は折断して原形を形成する。本例は、上端に素材剥片の左側縁を残すが、右側は細かい打ち欠きによる整形を行う (176)。端部が剥離軸に直交する縁部を上端とした例は、上端に剥離を加えた他、右側縁の上部に細かい加工を加える (177)。長軸方向を天地に向けた例は、短く先端がペン先形で、両側縁を細かい剥離で刃潰しをした例である (179)。末広がりの扇形剥片の端部を上端とし、右側縁を大きく打ち欠き、左側縁は使用痕のような細かい剥離で整形している (181)。小型の幅広剥片を用いた例は、素材の右側縁を上端の刃部とした例である。台形様石器としての左側縁は素材の打面部側、右側縁と先端の刃部に若干の加工を加える (182)。また小型の不定形剥片もしくは幅広剥片を用い、右側縁を上部の刃部とし、両縁の表裏に平坦な調整剥離を加えた台形様石器がある (183)。

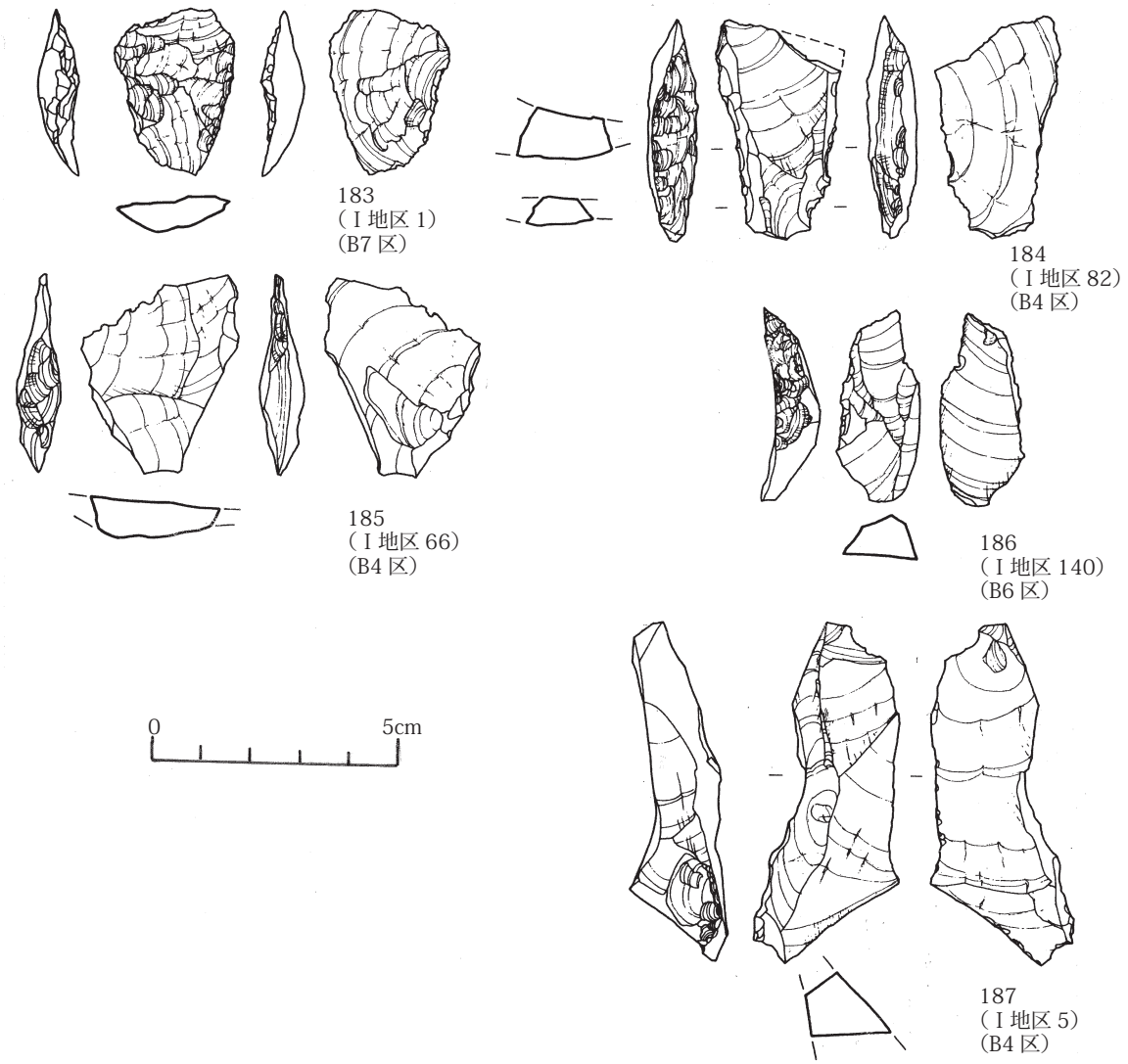
ナイフ形石器は、截頂石刃と呼ばれるもので、1 ブロックの西方でⅠ地区 B6 区トレンチのⅣ層 (黒色帯) から出土したが、標高から考えて同層の上部域からの出土である (186)。このナイフ形石器は、石材 5 (推定牟田・腰岳系黒曜岩) の石刃を素材としているが、通例 AT 前後の二側縁加工ナイフ形石器段階に通有な石器である。このナイフ形石器に関連すると思われるのが、Ⅰ地区 B11 区の弥生時代 1 号住居址内覆土から出土した石刃 (石材 5) である (第 44 図 201)。したがってこのナイフ形石器については台形様石器の段階とは異なる時期と考えておく。

削器は B11 区で出土し (第 43 図 189)、加工は左側縁を加工し、右側縁から左下方向へ破損している。本例は色が薄い青色のサヌカイトであり、台形様石器 4 点 (178･180･182･184) と同じ石材であることから同一時期と考えたいところである。この石材の原産地については佐賀県方面とみられるが、はっきりしない。

石核は 3 点とも A7 区 ･B6 区 ･B7 区という近距離のⅠ層・Ⅱ層から出土しており、いずれも石材 2 (推定小国産黒曜岩) から割り取られている (第 43 図 191 ～ 193)。形態はもともと径が 4、5 ㎝の多面の角礫であったせいか、剥離によっても打点を適宜移動させ剥離を繰り返している。面が二面だけで他は礫面の例を剥離初段階の例 (193)、礫面が一面だけの例 (192)、全ての面が剥離面の例 (191) へと、石核の剥離の進行度合いが違っている。



第 41 図　宇土遺跡下層出土石器類（1）（AT 下位、黒色帯出土石器等）



第 42 図　宇土遺跡下層出土石器類（2）（AT 下位、黒色帯出土石器等）

（4）Ⅱ地区・Ⅲ地区の旧石器時代遺物

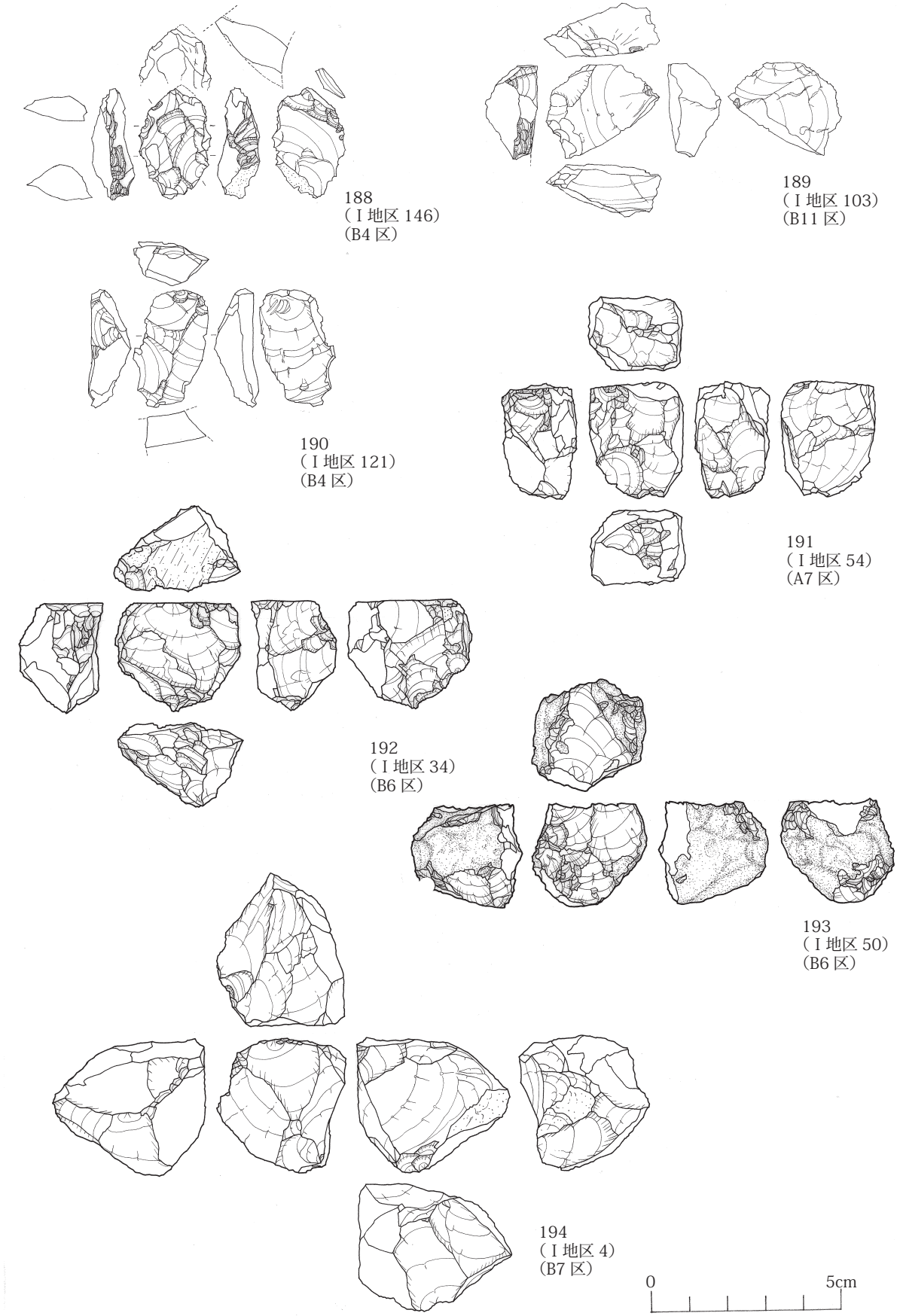
Ⅱ地区・Ⅲ地区は、同一の区画設定をしている。この地域のブロックは、B4･C4･B5･C5･B6･C6 の各区画にまたがっている。これを 2 ブロック（旧称第 2 集中部）とする。発見の経緯は、1 号墳の周溝や B4･C5 における工事用の溝などから石器類の採取があったためである。

石器類は、古墳の遺構内から 1 点、Ⅲ層から 1 点、Ⅳ層から 5 点出土している（表 5）。

ナイフ形石器：このナイフ形石器は二側縁加工の例であり、石材 5 の石核から剝離された石刃を素材とした例である（第 44 図 195）。裏面調整もしており、長崎県地域で柿崎型と呼ばれるものかもしれない。基部が僅かに折れているが、このような特徴から AT パミス降下の直前頃の石器の可能性もある。石核：これは、剝片素材で、打面を作出後に縦長剝片を小口から剝離した例である（第 44 図 198）。この他、ノッチ、台形様石器があるが図化していない。いずれにせよ、台形を含むⅣ層（黒色帯）出土の石器類は、Ⅰ地区と同様な AT 下位の石器類の可能性が高い。またⅢ層のナイフ形石器もその形態から AT 直下の時期のものと推定する。

表 5　宇土 2 ブロックの数量表

区域	B4	C5					C6
層位	ナイフ	台形	RF	剝片	チップ	石核	ノッチ
墳丘							1
Ⅲ	1						
Ⅳ		1	1	1	1	1	



第 43 図　宇土遺跡下層出土石器類（3）（AT 下位、黒色帯出土石器等）

(5)Ⅳ地区の旧石器時代遺物

Ⅳ地区は、調査区の各所で旧石器時代の石器類が集中している。弥生時代等の遺構検出作業を実施した際に出土した石器類である。そこでブロックとしたのは、単品ではなく、3点以上出土した部分を集中部分としてブロック認定した。それらは3ブロックから7ブロックまで確認した。

3ブロックは、C17区の南西付近に位置する(第38図)。Ⅲ層を精査するなかで出土した。出土点数は6点出土した。入念に掘り下げたが、Ⅳ層(黒色帯)には及んでいなかった。内訳は、焼礫1点、今峠型ナイフ形石器1点、剥片2点である。チップや剥片の剥離作業が行われた形跡はなかった。今峠型ナイフ形石器は今峠類型の典型例で、石材は石材1の大野川流域に多い流紋岩を用いており、同流域から持ち込まれたと推定される(第44図196)。

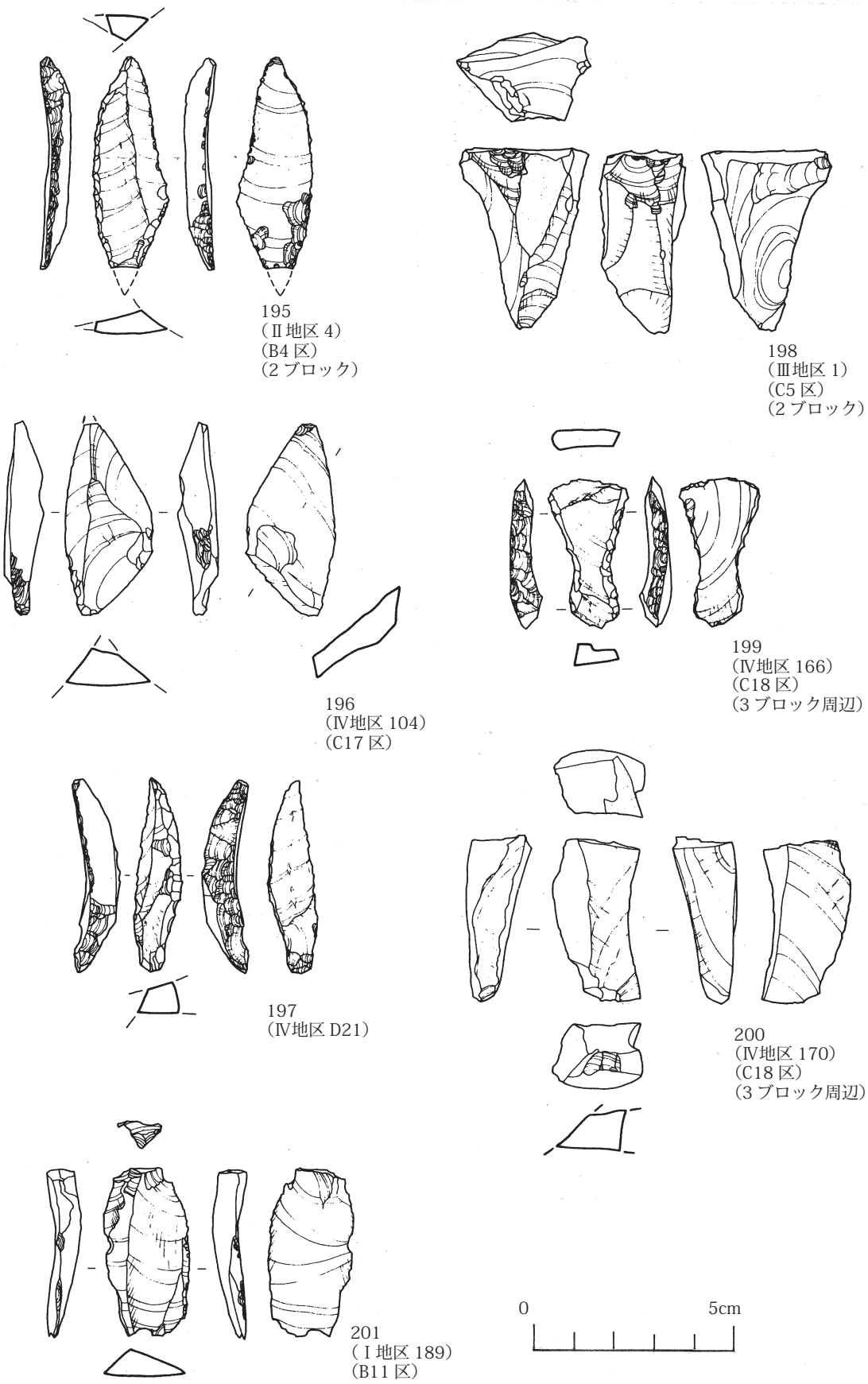
この他、3ブロック周辺の石器類をここで挙げておく。台形様石器は、C18区の4号小型竪穴の覆土から出土した(第44図199)。体部が楽器のギター胴部に似るなど側縁がS字形に湾曲した平面形を有する。刃部は外側にやや張るような平面形をなしている。台形様石器の石材は石材5を用いるが、今日知られている西北九州地域の台形様石器に該当する類例はない。また10号住居の覆土内から、掻器、もしくは加工痕のある剥片に分類される例が出土した(第44図200)。本例は、素材の打面部側に刃部を作出しているが、丁度器体長軸に並行するように半裁されている。

4ブロックは、C19区の西で、調査区の南側限界付近に位置する(第38図)。ここは南側の調査区外から切株が調査区側にはみ出している部分の根元付近にあたり、切株の反対側には5ブロックが位置する。おそらく両ブロックは同一の集中域を形成していたと思われる。4ブロックは当初、3点が出土したが、現在2点が確認でき(既報告一覧表のⅣ地区121と122)、両例ともⅢ層出土である。前者は石材2のチップ、後者は石材5の剥片であり、図示はしていない。

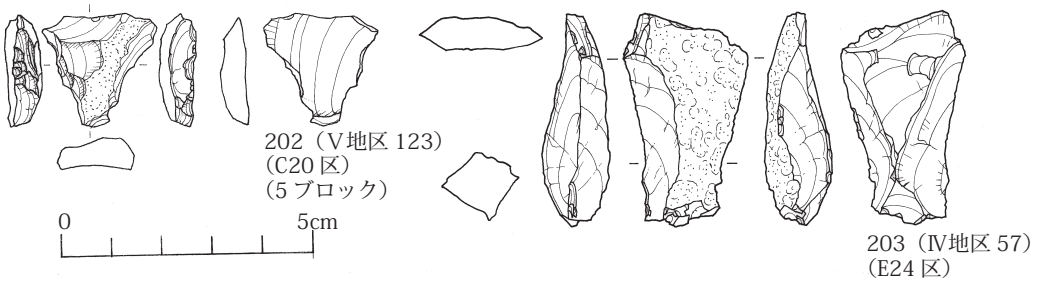
5ブロックは、切株を隔てたC20側に位置する(第38図)。石器類は、台形様石器1点、チップ1点、剥片1点の計3点である(既報告一覧表のⅣ区123～125)。いずれもⅢ層出土である。このうち台形様石器は石材5を用いた剥片を素材とし、その右側縁側を上方に向けた刃部で、剥離軸の両端を細かい剥離で扇形に整形した例である(第45図202)。

6ブロックは、D19区とD20区にまたがりつつ調査区の北側限界に沿って分布する(第38図・第46図)。石器類は、整理段階で確認できた8点が出土している(既報告一覧表:(Ⅳ地区111～116、118、120)。内訳は細石刃核1点(石材11)、剥片2点(サヌカイト・石材3)、チップ4点(サヌカイト3点・石材5が1点)、器種不明1点(石材5が1点)である。これらは、チップ1点がⅢ層から出土したが、他7点はすべてⅡ層から出土しており、重要な層位的事実といえる。

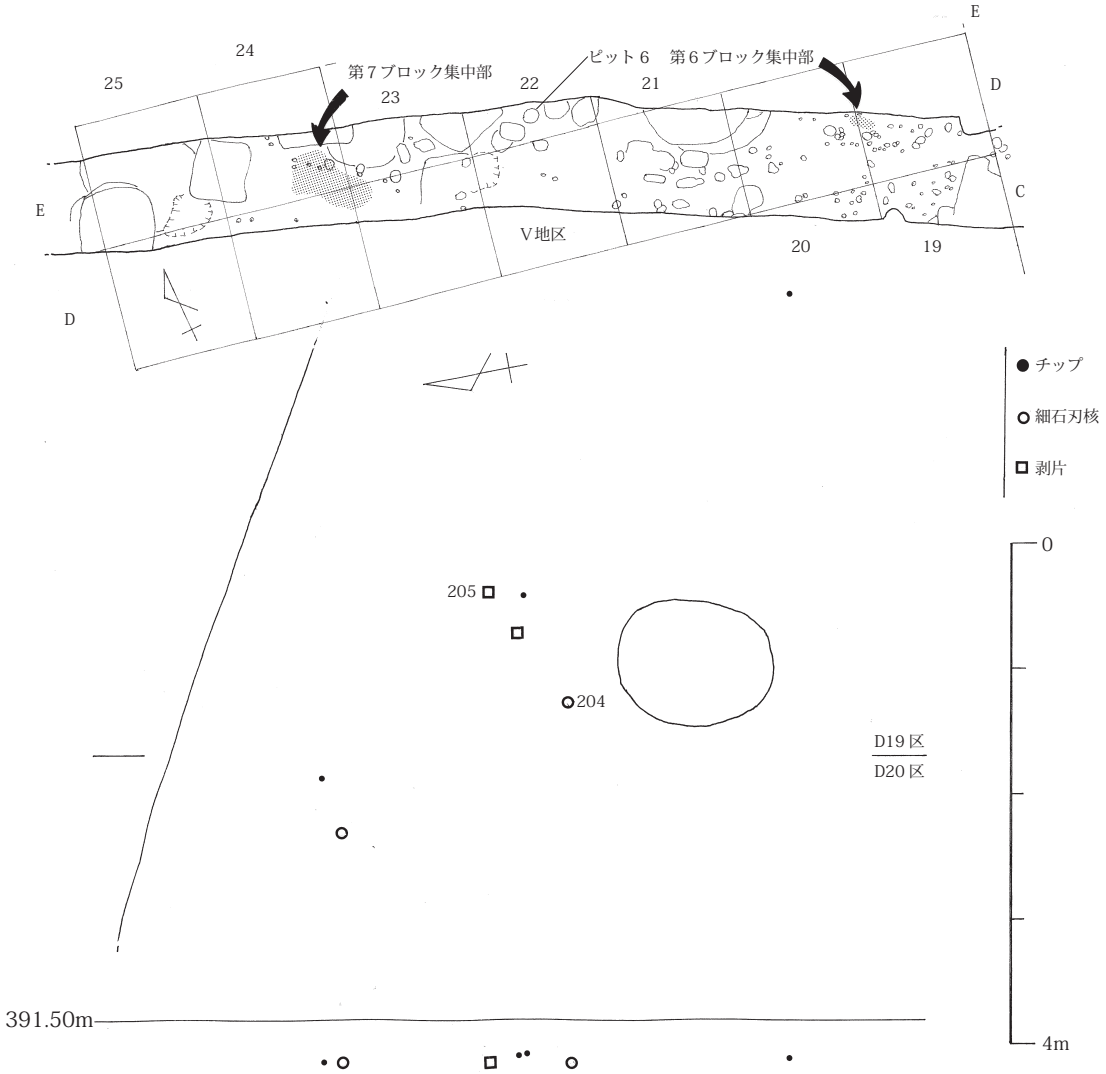
6ブロックの石器類についてコメントしておきたい。細石刃核は小型の剥片を素材として、素材剥離時のポジ面を左側面とし、小口から1本、または2本の細石刃剥離痕がある(第48図204)。これを楔形細石刃核の一種とすれば縄文時代草創期の細石刃核となる。この細石刃核の石材を石材11としたが、調査中にローム層中に小型の自然礫として混入するものに酷似していたことによる。これは石材の質的には良質の黒曜岩である。また剥



第 44 図　宇土遺跡のⅡ・Ⅲ層出土石器類（1）



第 45 図　宇土遺跡のⅡ・Ⅲ層出土石器類（2）



第 46 図　宇土遺跡のブロックの位置と第 6 ブロックの平面・垂直分布

片とした 1 例は、(第 48 図 205)、剥片としているが表面の右側と手前先端部付近に細石刃の作業面 (ネガ面) が切られた状況にある。そのため側面再生であり、打面再生の剥片でもある。石材 3 (熊本県阿蘇市の象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩) と推定される石材である。

7 ブロックは、D19 区と D20 区にまたがりつつ調査区の北側限界に沿って分布する (第 38 図・第 46 図)。石器類は、細石刃を主体とする石器群で、主にⅡ層を中心にⅢ層からも若干出土している。この点は、本稿末の一覧表や 7 ブロック出土石器類の層位ごとの表で確認していただきたい (表 7: 実測図掲載分のみの表)。これらの石器類は、当初の遺構

表６　宇土遺跡７ブロック数量表１

石材	細石刃	細石刃核	原形	剥片	チップ	Rf	Uf	敲石	削器	合計
ob	19	2	1	13	50	2				87
小ob			2	1	7	1				11
Sn				5	3	1			2	11
Sn？					1					1
？								3		3
合計	19	2	3	19	61	4		3	2	113

※Rf:加工痕ある剥片、Uf:使用痕ある剥片
ob:腰岳系黒曜磐、小ob:小国産黒曜岩
sn:サヌカイト

表７　宇土遺跡７ブロック数量表２

区域	D23			D24		E24						合計
層位	細石刃	細石刃核	剥片	細石刃核	剥片	細石刃	Mc原形	Mc再生	削器	敲石	Rf	
Ⅰ			1									1
Ⅱ	2			1	1	4		1	3		1	13
Ⅲ						4	1		1	1		7
混入		1					2					3
合計	2	1	1	1	1	8	3	1	4	1	1	24

※Mc再生:細石刃再生剥片、Mc原形:細石刃核原形

検出時にⅡ層から数点の石器類が出土したことにより、意識的に遺構のない部分を精査し、石器類分布の観察と完掘を行った。そうして７ブロックの石器分布を確定した状況が分布図のとおりである（第 47 図）。これをみると N-120°-S の角度で長軸約８ｍ、短軸約３ｍの規模で広がり、その包含状態の厚さは約 10cm と極めて薄い。また分布域を外れると、その外域に石器類はほぼ分布しない。以上のような特徴から同時期性・一括性の高いブロックであると受け止めることができる。

細石刃：19 点出土し、12 点を図示している（第 48 図 206 ～ 210、第 49 図 223 ～ 228)。いずれも細く、切断された例が多い。

細石刃核：楔形細石刃核が２点出土している（第 48 図 216)。いずれも打面長より作業面高の長さの方が高い特徴がある。また後縁が縦方向であること、下縁調整状の剥離痕などからすると唐津型、もしくは石ケ元型細石刃核に相当する可能性がある。

削片：1 点出土しており（第 48 図 214)、横断面が台形に近く、表面には横方向の調整痕、裏面は縦方向の削片であることを示すポジ面である。

細石刃核原形：４点を図示している（第 48 図 217・218・219、第 49 図 230)。うち３点は楔形細石刃核の原形ヵ (218・219・230) と考えるが、１例は既報告で削器としていた例である。しかしもう一例は、方柱状の体形をしている (217)。

剥片：２点を図示している（第 48 図 213・215)。うち１点は、削片の可能性がある (215)。

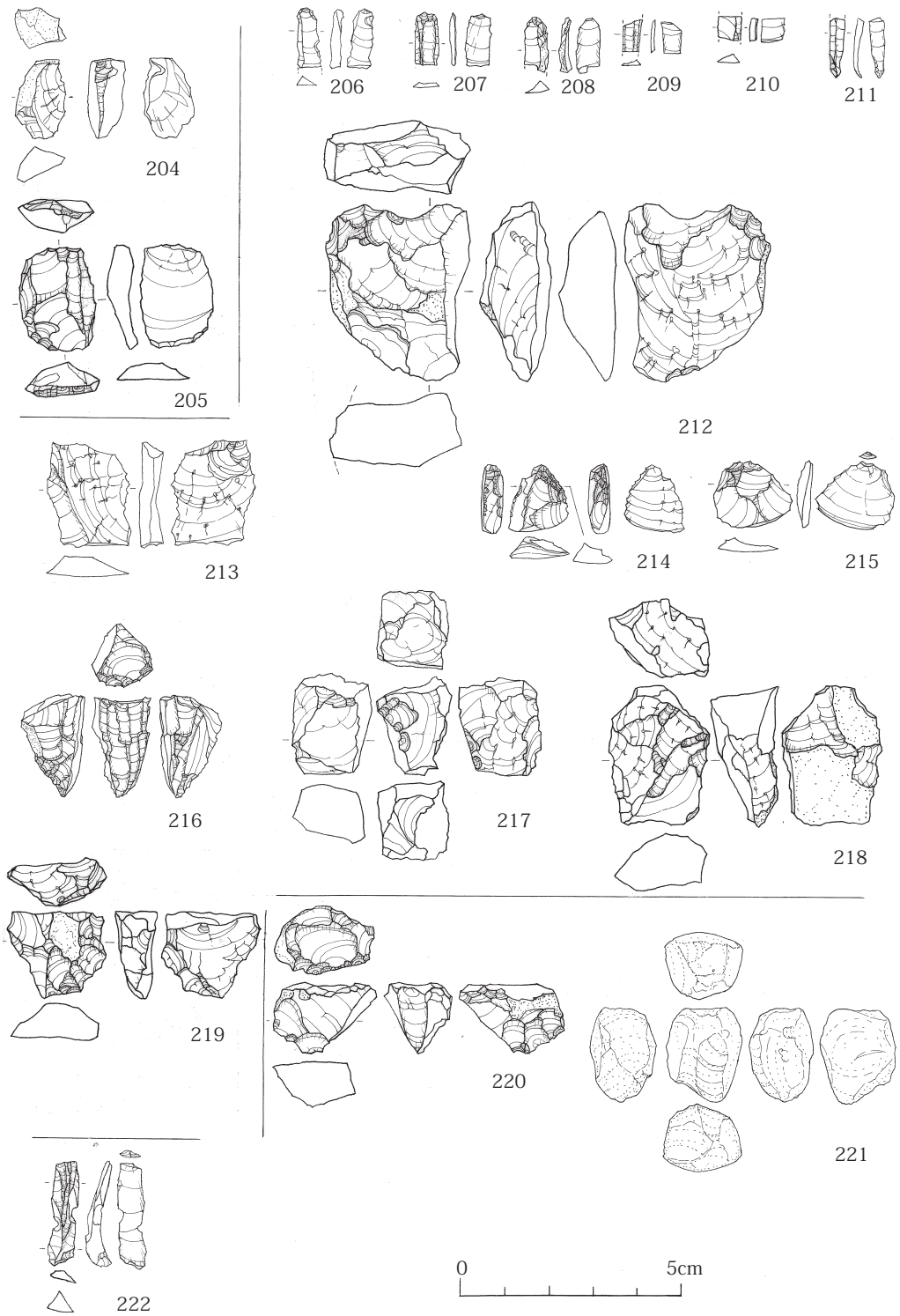
削器：３点を図示している（第 48 図 212、第 49 図 231・232) を図示している。うち一例は削器に分類することが妥当か判断はつかないが、上端方向から裏面（ポジ面）へ剥離加工痕がある。もう一例はゆるくカーブするポジ面側の凹みに刃潰し状の加工がある (231)。三例ともポジ面側に加工している。

敲石：１点を図示している（第 49 図 233)。短い楕円形で、長軸の両端部に打撃ダメージ痕が残る。

以上、７ブロックの石器類について簡単に説明した。次にこのブロックの周辺でも関連の深い石器類が出土している（第 48 図 220 ～ 222)。出土位置については、一覧表で確認されたい。楔形細石刃核は一例を図示した (220)。本例は下縁調整痕を有し、打面は主に側方から調整し、細石刃剥離痕は一条のみである。細石刃は、端部がポジ面側に湾曲する例である (222)。黒曜岩の原石が E22 区のピット６（第 38 図）から出土している（221)。ピットについては旧石器時代の遺構として報告書に報告したところである。詳細は既報告を参

考にされたい。このやや小さめの原石は、この地域のローム層中に介在するもので、本例もその例と考える。地理的に近い小国産の黒曜岩と異なって良質で、黒味がやや薄い特徴がある。上述した細石刃核も同じ石材と推定する (204)。

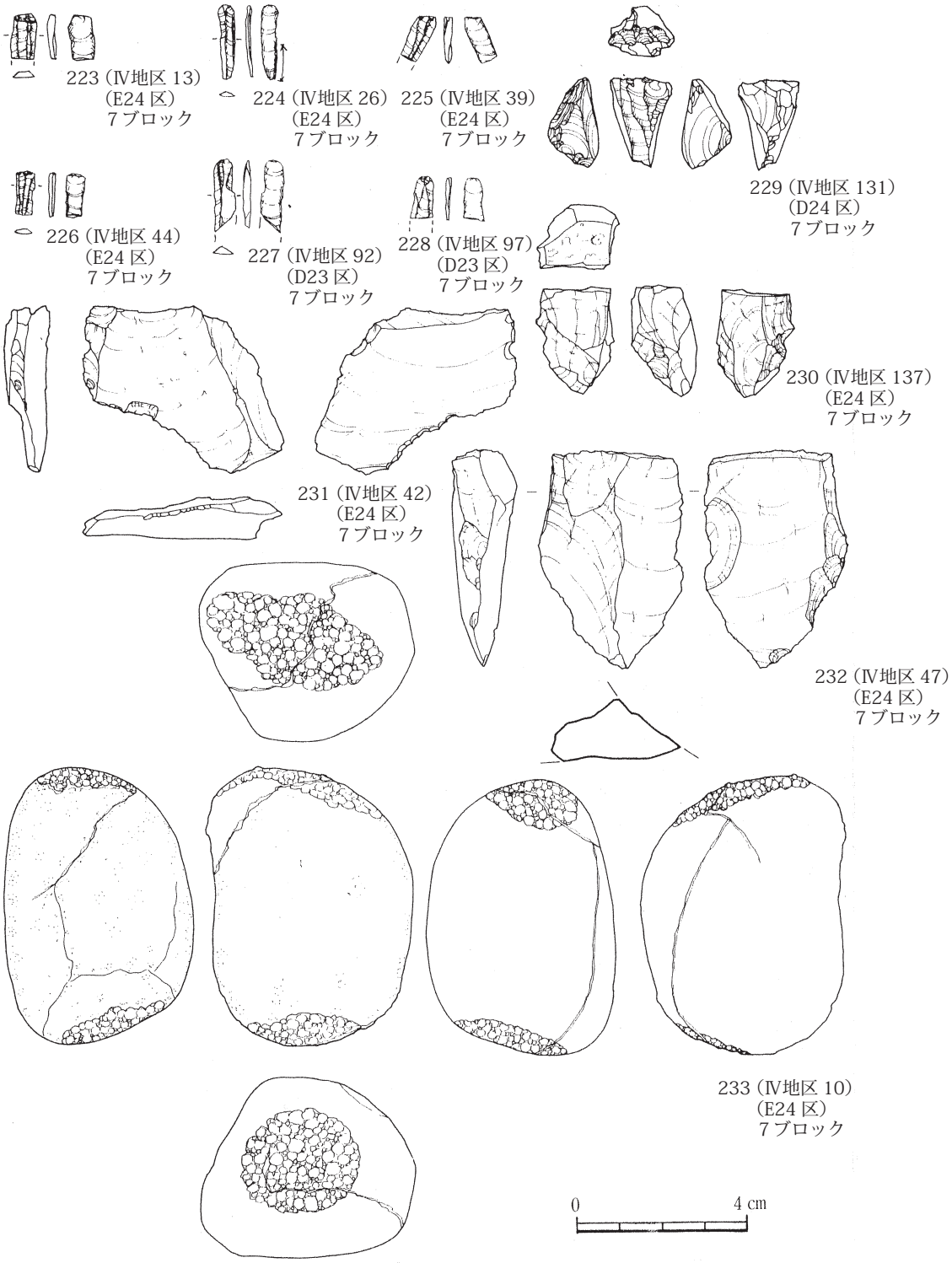
第 47 図　宇土遺跡の 7 ブロックの平面・垂直分布



第 48 図　宇土遺跡の細石刃文化資料

6 ブロック：205・206、7 ブロック：207 ～ 220、その周辺地区：221 ～ 223

204（Ⅳ地区 113）（D19 区）6 ブロック
205（Ⅳ地区 116）（D19 区）6 ブロック
206（Ⅳ地区 163）（E24 区）
207（Ⅳ地区 152）（E24 区）7 ブロック
208（Ⅳ地区）
209（Ⅳ地区 127）（E24 区）7 ブロック
210（Ⅳ地区 143）（E24 区）7 ブロック
211（Ⅳ地区 141）（E24 区）7 ブロック
212（Ⅳ地区 30）（E24 区）7 ブロック
213（Ⅳ地区 89）（D24 区）7 ブロック
214（Ⅳ地区 101）（E24 区）7 ブロック
215（Ⅳ地区 93）（D24 区）7 ブロック
216（Ⅳ地区 126）（D24 区）7 ブロック
217（Ⅳ地区 158）（D24 区）7 ブロック
218（Ⅳ地区 7）（E24 区）7 ブロック
219（Ⅳ地区 157）（E24 区）7 ブロック
220（Ⅳ地区 136）（E24 区）
221（Ⅳ地区）（E22 区）ピット 6
222（Ⅳ地区 168）（C19 区）



第 49 図　宇土遺跡の細石刃文化資料 7 ブロック

7　五馬大坪遺跡と宇土遺跡出土石器に関する総括

(1)　五馬台地における旧石器文化の位置づけ

前章まで、詳しく五馬大坪遺跡と宇土遺跡出土石器に関して観察してきた。こうした石器類(群)がどのような位置づけになるのか筆者の考えを説明する。

まず大分県大野川流域を中心にした編年について簡単に説明する。1期は黒色帯直下の粘土層から出土する石器群で、古相の台形様石器が出土する段階で石斧を伴う。2期は平坦剥離で調整した台形様石器が伴う段階。3期は、二側縁加工のナイフ形石器、戴頂石刃などを中心とする石器群であり、その素材は石刃技法による石刃である。これらは、ATパミス(約30,000年前)の上下から出土しており、3a期（AT下位）と3b期（AT上位）に便宜的に分ける。4期は、狸谷型ナイフ形石器を主体とする段階である。5期は今峠型ナイフ形石器を主体とし、今峠型剥片尖頭器を伴う段階である。6期は、大型の剥片尖頭器が盛行する段階。この段階は、角錐状石器を伴わず、大野川流域では切出し状のナイフ形石器が伴う。7期は角錐状石器が盛行する段階で、7a期と7b期に細分できる。7a期は三面加工など大型の角錐状石器が多く、6期から続く剥片尖頭器も少量残存する。7b期は5cm前後の小型角錐状石器が主体で、二面加工例が多い。また剥片尖頭器はほぼみられないが、あっても矮小化した例が極少量伴う場合もある。8期は、先細りの小型石刃を用いた片島型ナイフ形石器が主体の段階。9期は野岳型細石刃核が主体の段階である。J1期は、船野型細石刃核を主体とする石器群で、神子柴系の石斧や両面調整尖頭器を伴う場合がある。この段階は福井洞穴4層の調査成果で、船野型細石刃核が大量出土したⅣ層の年代として約16,000年前の^{14}C年代測定値がある。こうした年代値と神子柴系の石器が伴うことから長者久保・神子柴期に並行することがわかっている。なおこの長者久保・神子柴期に並行する段階の後半期に、細石刃を伴わない段階のある可能性を示す事例があるが、ここでは省略する。J2期は隆起線文土器、J3期は爪形文土器を特徴とする段階で、いずれも船野型とは全く違った新型式の福井型細石刃核/西海技法の細石刃核を主体とする。大分県内には隆起線文土器、爪形文土器の出土例はないが、同様な技法の細石刃核が日出町エゴノ口遺跡や竹田市政所馬渡遺跡で出土おり、長崎県の泉福寺洞穴・福井洞穴と

表8　東九州における旧石器時代と縄文時代草創期前半編年

時代	編年案	遺跡	主要遺物	素材モード/備考	大坪遺跡・宇土遺跡	周辺地区
縄文時代	J4期	森の木	隆帯文土器	石鏃		
	J3期	?	爪形文土器	楔形細石刃核	宇土Ⅳ:7ブロック	
	J2期	?	隆起線文土器	楔形細石刃核		
	J1期	市ノ久保	船野型Mc		大坪：西	亀石山
旧石器時代	9 期	宮ノ原/大坪	野岳型Mc		大坪S3ブロック	亀石山
	8 期	大迫上層	片島型ｋｎ主体	◎石刃		
	7b期	駒方池迫	角錐状・剥片Pt	◎剥片/△石刃		
	7a期	津留Ⅲ層・百枝C	角錐状・剥片Pt	◎剥片/△石刃		
	6 期	津留Ⅳ/Ⅴ層	切出kn・剥片Pt	◎剥片/◎石刃		高瀬Ⅲ:Ⅳ下
	5 期	今峠・百枝BⅤ層	今峠型kn主体	◎剥片/△石刃	大坪：西	
	4 期	駒方津室迫	狸谷型kn主体	◎剥片		
	3b期	松山Ⅴ層	二側縁加工kn	◎石刃		
	3a期	百枝C3文化	二側縁加工kn	◎石刃	宇土Ⅰ:Ⅳ上	高瀬Ⅲ:Ⅴ層
	2 期	百枝BⅥ層下半	台形様石器	◎剥片	宇土Ⅰ:Ⅳ下	西Ⅴ層
	1 期	牟礼越Ⅵ層	台形様石器	◎剥片		

※凡例:◎多量／△少量／ｋｎナイフ形石器／Pt尖頭器

同様な段階の存在が想定できる。またＪ２期からＪ３期にかけての石器である中・四国系の有茎尖頭器が東九州地方に見られる。Ｊ４期は、石鏃を伴う隆帯文土器の段階である。

以上のような編年の枠組みの中で、五馬大坪遺跡と宇土遺跡を含む五馬台地の周辺の状況について述べてみるが、西遺跡、亀石山遺跡、高瀬Ⅲ遺跡などへの言及は、参考文献に記すように旧天瀬町教育委員会発行の報告書を参考にしている。

今のところ、黒色帯を抜いた下層に石器群の主体が位置する１期の遺跡はみつかっていない。２期の遺跡として挙げられるのは、今回再び検討した宇土遺跡Ｉ地区における１ブロックとその延長上のⅣ層下半を中心に出土した台形様石器の一群である。これと同じ時期に該当するのが、五馬台地に隣接する日田市天瀬町塚田地区の西遺跡Ⅴ層(黒色帯)から出土した石器群で、台形様石器と部分磨製石斧の断片が一つのブロック内から出土している(天瀬町教育委員会 2002.3)。

3a 期については今回検討した五馬大坪遺跡と宇土遺跡のなかに良好な段階はない。ところで大野川流域をはじめとしてこの段階には石刃を素材とする二側縁加工のナイフ形石器と截頂石刃が特徴的に伴っている。宇土遺跡Ｉ地区の B6 区でⅣ層の上半部域から典型的な截頂石刃が単発ながら出土している(第 42 図 186)。近くの遺跡では宇土遺跡の南東 5.65km の地点に位置する高瀬Ⅲ遺跡Ⅴ層から多量の二側縁加工のナイフ形石器が出土しているようであり、この段階の遺物と考えられる。

3b 期、４期については宇土遺跡・五馬大坪遺跡を含め周辺地域に該当する石器はない。

５期の石器群としては、五馬大坪遺跡の西地区で出土する今峠型ナイフ形石器大坪類型を主体とする石器群を充てることができる。ここでは少量の細石刃や細石刃核も分布しており、これに伴う削器や・掻器などの石器の帰属が明確でない憾みがあるが、数量的な規模から考えて大多数は今峠型ナイフ形石器大坪類型に帰属する石器群であろう。また宇土遺跡Ⅳ地区 C17 区Ⅲ層３ブロックで出土した今峠型ナイフ形石器今峠類型も同一時期に並行する。

６期の石器群は、五馬台地とその周辺に単純なブロックからなる遺跡はないが、高瀬Ⅲ遺跡Ⅳ下層から出土した剝片尖頭器を充てることができる。この剝片尖頭器は、組成・一括関係は明確ではないが、この遺跡では角錐状石器が全く出ていないことからほぼ同一層から出ていることと、津留遺跡Ⅳ／Ⅴ層の剝片尖頭器に角錐状石器が共伴していないことと共通する。このことからこの時期に位置付けたい。

7a 期・7b 期・8 期については該当する遺跡はない。

９期は、野岳型細石刃核の段階であり、五馬大坪遺跡東地区の S3 ブロックが典型的な一括資料である。亀石山遺跡の場合は五馬大坪遺跡の事例から船野型細石刃核と野岳型細石刃核は異なる時期に残されたと考える。

J1 期は、船野型細石刃核の段階であり、五馬大坪遺跡西地区の石器群を充てることができる。

J2 期は、石ヶ元型、または唐津型、あるいは福井型などに似た細石刃核の段階であり、宇土遺跡の７ブロックとその周辺で出土した細石刃石器群が近い技術的特徴を有している。

以上のように宇土遺跡・五馬大坪遺跡、または周辺の遺跡を編年的な枠組みのなかで理

解することができる。

次に、五馬大坪遺跡で大量出土した今峠型ナイフ形石器大坪類型の位置づけに関し、これまでの経緯について記憶の底を探しつつ記してみる。

実は筆者が今峠遺跡の土地で多数の石器類を表面採集し始めて数年たった1976､7年頃、今峠型ナイフ形石器のほかに目を引いたのは小型のナイフ形石器や台形石器があり、更に珪化木を石材とする小型石核であった。小型石核は細石核の原形のようにも当時はみえたのである。要するに今峠遺跡の段階は細石刃文化との移行期と考えていたのである。こうした状況を別府大学に通報し、試掘調査を数回行っている。当時の橘昌信の研究テーマは、宮崎県船野遺跡の調査から細石刃石器群とナイフ形石器の共伴にあった（橘 1973.4、橘 1975.7）。今峠遺跡の調査はあまり芳しいものではなかったが、成果は橘昌信によって公表されており（橘 1978.3）、当時大野川流域で唯一知られていた大分県大野郡大野町に所在する宮地前遺跡における細石器文化に先行するものとして位置付けている。この今峠での筆者の経験は、その位置づけとその後の直入郡直入町 (現在の竹田市直入町) に所在する前田Ⅲ遺跡の調査報告に影響をあたえた (直入町教育委員会 1989.3)。この遺跡からはⅪ a 層と、間層をはさんだⅫ層から片島型ナイフ形石器が特徴的に出土している。この二枚の文化層には剝片尖頭器、角錐状石器などの石器が組成されておらず、岩戸遺跡第 2 次調査・第 3 次調査の 6 層下部と 6 層上部の関係から終末期のナイフ形石器段階と考えている。その前田Ⅲ遺跡 : Ⅻ層からノの字状剝片が 1 点出土している。この剝片が今峠型ナイフ形石器今峠型類型の素材に酷似していたことから、同類型が片島型ナイフ形石器を主体とする時期に近い頃であると理解し、片島型ナイフ形石器の直前に位置づけできると理解した。このような経緯で、五馬大坪遺跡における今峠型ナイフ形石器の位置づけに際し、比較的に新しい編年的位置に位置付けた。これが五馬大坪遺跡の報告書作成以降、近年まで筆者が考えてきた今峠型ナイフ形石器の編年観であった。

近年九州全域で旧石器時代遺跡の調査が進行する中で、今峠型ナイフ形石器の出土例も増加しており、かつて今峠遺跡で表面採集し、手探りで五馬大坪遺跡の位置づけをしたことを考えると雲泥の違いである。そうした今峠型ナイフ形石器が出土した遺跡のなかで、層位的に重要な位置を占めているのが熊本県阿蘇市の象ケ鼻 D 遺跡（小畑他 2001）と同県笹倉永迫遺跡 (波野村教育委員会 2002.3) である。両遺跡は、阿蘇山の北側外輪山上に立地する。外輪山の北よりに位置する笹倉永迫遺跡では AT パミスの結晶層である 8 層の上の 7c 層から今峠型ナイフ形石器を含むまとまりのある単一の石器ブロックが出土している。また象ケ鼻 D 遺跡でも 21 層 (AT パミス) の上、20 層から 17 層にかけて今峠型ナイフ形石器を含む石器ブロック (旧石器Ⅱ文化層) が出土しており、そこで出土した木炭の ^{14}C 年代が 23,420 ± 220 年 BP(Beta—135263:AMS 法) と測定されている。これを IntCal20 の較正曲線でざっと換算すると 27,500calBP 頃となる。測定値が一例しかないので正確性にかけるが、かなり古い年代値である。おそらくこの年代前後を含めた年代領域で盛行した石器群と考える。

ところで松本茂が集成した年代値を参考にすると、「②狸谷・枝去木グループ」は「③剝片尖頭器石器群」よりも相対的に新しい年代値が多い (松本 2023.3)。九州では津留遺跡の層位的成果から狸谷型ナイフ形石器段階→剝片尖頭器の盛行期→角錐状石器段階へ変遷す

ると筆者は考えている。角錐状石器の段階の石器は百枝遺跡C地区第2文化層や岩戸遺跡第1文化層・駒方池迫遺跡などで主要な石器として出土し、剝片尖頭器も少量ながら残存している。こうしてみると剝片尖頭器が「③剝片尖頭器石器群」から角錐状石器の段階へ継続していることになる。また駒方津室迫遺跡は狸谷型ナイフ形石器を主体とする単一ブロックで、周辺にほぼ遺物のない一括性の高い石器ブロックであり、ここには剝片尖頭器もしくはその生産にかかわる石刃技法、角錐状石器などの石器類は一切含まれていない。このような状況から、年代値による「③剝片尖頭器石器群」から「②狸谷・枝去木グループ」への変遷は考えにくいだろう。近年、^{14}C年代が高精度となりつつあるものの、測定結果を利用する場合、特徴的な石器類との関係性が明らかな場所から採取されているのかが利用の判断基準とするべきではないだろうか。九州に所在する縄文時代の遺跡を思い浮かべてもわかるように、規模の大きい遺跡の場合、十以上の土器型式が混在している場合も珍しくなく、単純な時期であることは皆無である。おそらくは規模の大きい旧石器時代遺跡においてブロックの区分があいまいな場合はコンタミが多いと考えるべきだと思われる。この場合、石器を時期区分するのはなかなかに困難な場合もあってか引き算足し算をせずに考察を進める場合も多い。したがって旧石器時代遺跡の場合、なるべく周囲に遺物のない単一石器ブロックを、組成的、編年的材料とし、その^{14}C年代測定を利用するべきだと理解している。

以上のような問題点をふまえつつ筆者は、狸谷型ナイフ形石器段階→今峠型ナイフ形石器段階→剝片尖頭器盛行期段階→角錐状石器段階という編年仮説を『旧石器考古学89』にコメントとして投稿した。こうした仮説を考えた遺跡に上記の四日市遺跡、象ケ鼻D遺跡、笹倉永迫遺跡など、その石器群の一括性の高さと、典型的な剝片尖頭器や角錐状石器を持たないという一括性の高い出土状況の遺跡があった。その際、下層に剝片尖頭器のブロックがなく、角錐状石器の層位に剝片尖頭器が少量ながら共伴の百枝遺跡C地区第2文化層があり、その伝統は剝片尖頭器段階からの継続性と捉えられるので、今峠型ナイフ形石器の段階をこの間におくことができなかったことが位置づけの理由である。これが全体として上記の変遷過程を考えた根拠である。

今峠型ナイフ形石器の位置づけを上記のような編年に組み込むことで、次のような立論が可能となる。筆者は以前、今峠型ナイフ形石器の素材を用いた今峠型剝片尖頭器の存在を主張したことがある。実は剝片尖頭器段階との関係性に関し、今峠型ナイフ形石器の素材でもあるノの字状剝片を用い、基部近くの両縁に抉りを入れた剝片尖頭器が重要になる。おそらくこの技術的な起源は先行する狸谷型ナイフ形石器や同期の今峠型ナイフ形石器にみられる基部近くの抉りに求められ、刃部長と基部長の比率が1対1の場合が多い。

ところで剝片尖頭器の起源を大陸に求める意見があるが、先行する今峠型剝片尖頭器である可能性も考えうるということである。例えばAT前後の時期に盛行した石刃を素材とする二側縁加工のナイフ形石器が素材を幅広い剝片モードに変換したことにより、同じ二側縁加工の狸谷型ナイフ石器が成立したと型式論的に説明ができる。こうした変容は剝片モードの狸谷型ナイフ形石器から続く同じ剝片モードの今峠型剝片尖頭器が、石刃モードへの転換によって典型的な剝片尖頭器へと発達したと考える。

ただし巨大な分布域をもつ五馬大坪遺跡や表面採集資料の多い今峠遺跡で僅か1、2点

の角錐状石器が出土、または採集されているものの、一括性の部分で弱く、いまのところ今峠型ナイフ形石器を主体とする段階に含まれるとは考えていない。しかし^{14}C年代値、今峠型ナイフ形石器を主体とする段階に典型的剝片尖頭器、角錐状石器の存在が明らかになるような単独性の強い石器ブロックの一括資料が増加すれば、剝片尖頭器主体の石器群、角錐状石器主体の石器群との連続性がでてくる。その場合、5期の今峠型ナイフ形石器を主体とする石器群と6期の剝片尖頭器石器群の先後が逆になる可能性はある。したがって今峠型ナイフ形石器とその段階に関する上記結論は良好なデータをもって検証される仮説であるとしておきたい。

(2) 五馬台地における旧石器文化の意義

これまで五馬大坪遺跡や宇土遺跡を中心に事実報告と編年的位置関係について述べてきた。これを受けてこの地域の旧石器文化の意義についてふれたい。

宇土遺跡が発掘され、報告が刊行された1986年は、全国的にAT下位の台形様石器についての意義に関し、詳論した佐藤宏之1988.2「台形様石器研究序論」(佐藤1988.2)が発表される以前であった。このような中、宇土遺跡Ⅳ層（黒色帯）の遺物は九州地域においてAT以前であることが確認された初期のであった。筆者としては比較する資料が県内にはない中で試行錯誤を繰り返しながら報告を書いた記憶があるが、その意義については上記した佐藤宏之の論文に間接的ではあるが尽くされているといえるだろう。すなわちAT下位の石器群の中でも古相の石器群である台形様石器の石器文化に連なるのが宇土遺跡Ⅰ区のⅣ層(黒色帯)の台形様石器だったということになる。宇土遺跡の調査の後、五馬台地周辺では西遺跡Ⅴ層(黒色帯)からも台形様石器、部分磨製石斧の断片を含む石器ブロックも出土しているが、両遺跡は北部九州に直結する筑後川水系の遺跡としては数の少ない時期の遺跡であり、重要な位置を占めていると評価できる。

五馬大坪遺跡からは大量の今峠型ナイフ形石器大坪類型が出土したことは既に報告してきたとおりである(天瀬町教育委員会1989.3)。その報告を書く以前、筆者が中学生だった1973年ごろ、実家近くの大分県大野郡大野町田代(現在の豊後大野市大野町)に所在の今峠から打面調整のないノの字状剝片を素材に用い、基部よりの左側縁に加工を加えた特殊なナイフ形石器を大量に採取していた。これらをロームが広く露出している畑での採取だったので、旧石器時代のナイフ形石器であることを確信したが、当時唯一持っていた河出書房の『先土器時代』(杉原荘介編)をみてもどこにも類例らしき例は載っていなかったので、別に載っていた杉久保型ナイフ形石器や国府型ナイフ形石器の名称をまねて今峠型ナイフ形石器と称して自己満足し、その後仲間内で使っていた用語である。それから13年後、五馬大坪遺跡の現場で目にしたナイフ形石器をみたとき今峠型ナイフ形石器だと判断したが、今峠遺跡では素材剝離時の打面は単一剝離面が多いのに対し、五馬大坪遺跡例には細かい打面調整剝離痕や、打面調整状の二次加工痕が認められた。そのため報告書作成時に、大坪型ナイフ形石器とすることも考えた。しかし今峠遺跡と五馬大坪遺跡のナイフ形石器は形態的によく似ており、かつ数量的な担保もあり、両遺跡のもつ内容は後期旧石器文化の一段階を示しており、地域差ではないかと考えた。そこで、九州内での類例を調べて筑後川水系から西北・北部九州へ広がるのが今峠型ナイフ形石器大坪類型で大野川流域方面から宮崎県方面へ広がるのが今峠型ナイフ形石器今峠類型という地域分布を

大まかに設定した。その石器利用は、大坪類型が主要な石材として西北九州産の黒曜岩を用い、今峠類型が祖母・傾山系の本谷山を一次産地とする大野川産流紋岩を主な石材に用い、それぞれが分布する分布域にオーバーラップするというざっくりとした地域差を把握できたのが、報告書作成時までの成果である。

その後、当時の玖珠川上流域の四日市遺跡でも推定腰岳・牟田系の黒曜岩を用いた大坪類型のナイフ形石器がまとまってローム層中から出土しているし(綿貫 2021.3)、由布市湯布院町川西に所在する山下池遺跡でも大量に採取されている(桑村 2024.11)。これは大坪類型の分布が玖珠川中流域から最上流部で大分川水系との分水嶺付近まで広がることが確認されたことになる。一方、大野川流域では一部が報告されている百枝遺跡B地区Ⅴ層から出土した今峠類型の典型例が多量に出土していることが分かってきた。これらのことから今峠型ナイフ形石器大坪類型や今峠類型を主体とする石器群が、一時期を占める石器段階であることが明確になったといえる。このような地域差を抽出する方向性は、九州地域の全域で確認されつつある狸谷型ナイフ形石器についても同様で、単に「狸谷型・・」と一括した位置づけをするのではなしに、細かく微視的な観察から地域差の抽出へとつなげていく必要があると考える。

（３） 五馬大坪遺跡で出土した特徴的な削器・掻器について

五馬大坪遺跡の西地区で出土した特徴的な削器・掻器が出土している。この地区では多量の今峠型ナイフ形石器、２点ほどの角錐状石器、細石刃・細石刃核が含まれている。このうち最も多量の今峠型ナイフ形石器に件の特徴的な削器・掻器を帰属したと考えたい。本文中では使用石材ごとに報告したので、ここでは削器・掻器を集成的に分類しつつ特徴を抽出する。その前に用語について説明しておきたい。1:ネガ面側の加工を表面加工、2:ポジ面側の加工を裏面加工、3:相対する二つの縁部で表裏両縁逆方向加工、4:縁部の加工を途中で、同一縁の反対面に入れ変える加工を表裏入れ変え加工とする。これには実質的に近縁な特徴もあるが、強調する意味でもいれておく。

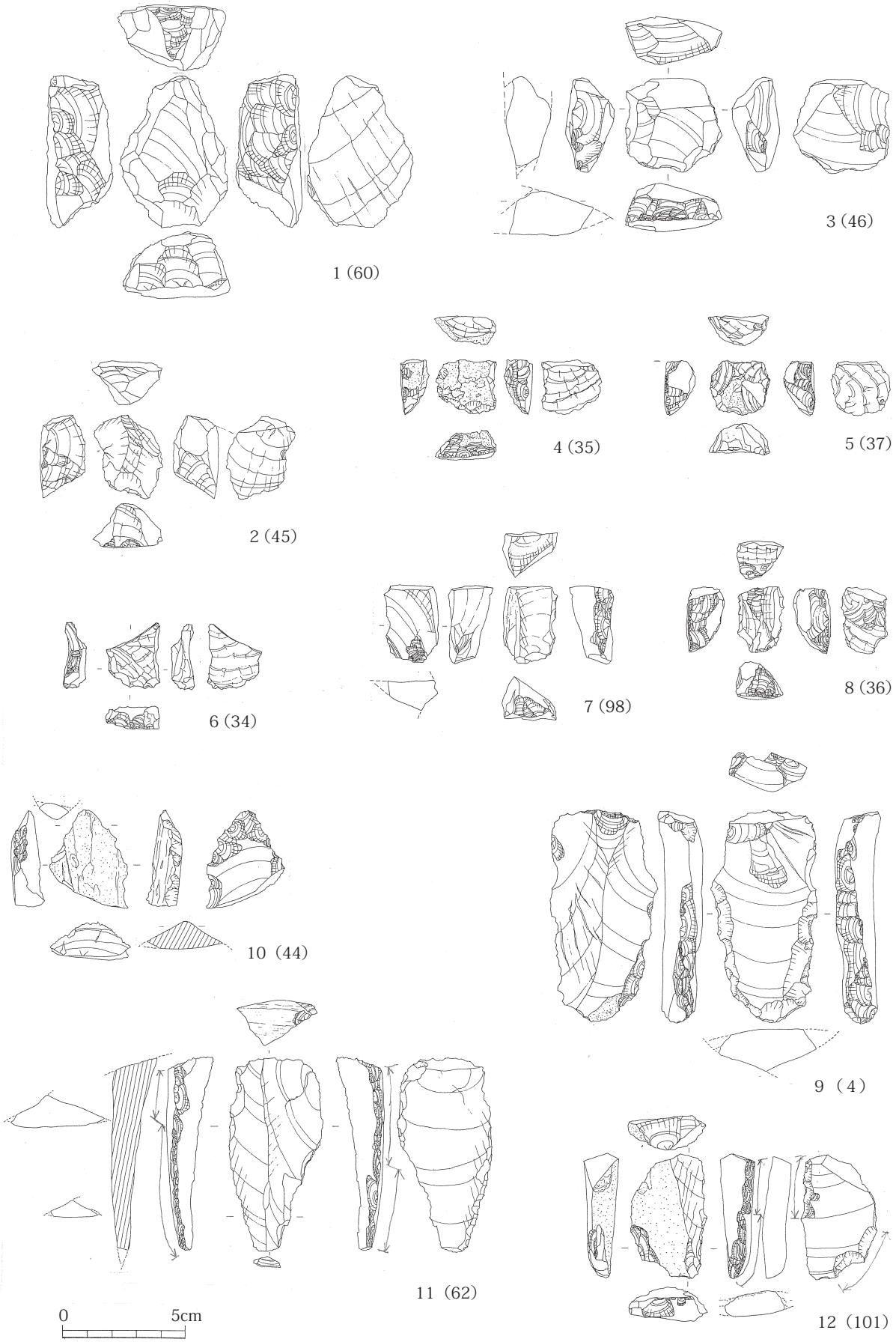
掻器A類：甲高で、剥離が粗い例である(第50図1･2)。甲高で、剥離が粗いため石核とも考えたが、平面形が左右対称的な洋ナシ形に整形した例もあり、掻器としてこのA類に含めた(1)。

掻器B類：平面形が楕円形、もしくは多角形の例で拇指状掻器（サム・スクレイパー）と呼ぶ例で、縁部の四分の三程度を加工している(第12図39、第25図108、第50図3～5)。この中には表裏両縁逆方向加工の加工を加えた小型の掻器である(108)。

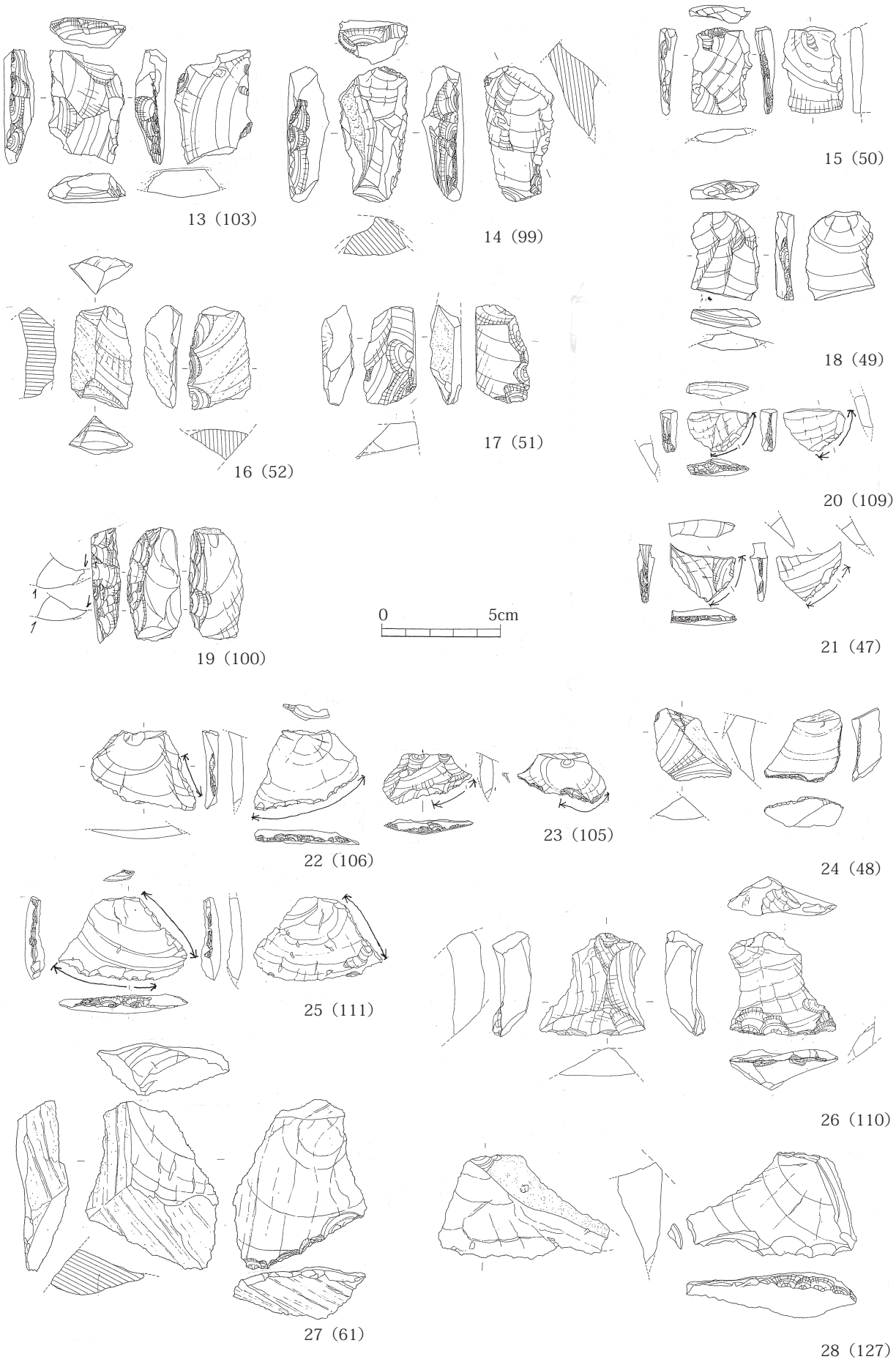
掻器C類：縦長素材の端部、もしくは端部に加え(第50図6･7)、基部近くの両縁部まで整形を行った例である(第50図8･9)。これらは先刃式掻器と呼ぶものである。特に最後の例は長さが8.7cmと大型である上に、加工がほぼ表面側からポジ面側へ加工する裏面加工が行われている。他は小型掻器である。

削器A類：先端に向けて収束する平面形の削器である(第50図10)。これはポジ面側を加工した裏面加工であるが、剥離角度がゆるい平坦な剥離面である。

削器B類：縦長剥片や幅広剥片の形状に合わせて、長い方向の両側に加工を加えた例である(第50図11～第51図15・19)。やや収束気味の例もあるが(11)、他は並行する例である。それらの内容は、左右の縁部をほぼ表面加工だけする例が2例(13･14)、表面加工



第 50 図　五馬大坪遺跡出土の掻器・削器（1）



第 51 図　五馬大坪遺跡出土の掻器・削器（2）

と裏面加工を両縁で違う例 (表裏両縁逆方向加工) が 2 例 (15･19)、表裏入れ変え加工の例が 2 例 (11･12) となっている。同一削器に表裏にある例が計 4 点あることは、使い勝手の点で加工したと考えたい。

削器 C 類：縦長素材の片側縁だけに加工がある例 (第 51 図 16 ～ 18)。このうち裏面調整の例が 2 例 (16･17)、表面調整の例が 1 例である (18)。この削器 C 類は、A 類、B 類に変化していく過程にあるのかもしれない。

削器 D 類：破損もしくは截断した剥片を、緩い三角形に加工した例である (第 51 図 20・21)。これらは三角形の頂部を境に表裏入れ変え加工をした例である。

削器 E 類：剥離軸が斜めの幅広く、先端部が尖り気味で、打面と二つの変化点を境に縁部が三つある剥片を素材とし、そのうち最も幅広い下寄りの縁部に加工を加えた例である (第 51 図 22 ～ 28)。これを基本として隣接する残りの縁部すべてを加工する例 (25)、基本例の他にもう一つの縁だけの例 (22･24･26)、基本例 (一側縁) だけの例 (23･27･28) からなる。また最も広い下寄りの刃部加工部分は 7 例中 6 点がポジ面側に施している (22 ～ 24、26 ～ 28)。これから外れた例も (25)、加工が施された面がポジ面であった可能性が高い。

特徴的な削器・掻器について分類し、その内容について説明した。それらから導き出された特徴を列記すると次のようになる。

1 : 掻器 B 類 ･C 類のうち 1 例を除く全てが小型の掻器である。

2 : 掻器 C 類・削器 A 類・削器 B 類・削器 C 類・削器 D 類・削器 E 類に裏面調整が多い。

3 : 同一縁表裏入れ変え加工

4 : 表裏両縁逆方向加工

5 : 削器 E 類

このうち 1 と 5 は、これまで出土している今峠型ナイフ形石器の石器群で、特徴的な石器として見られていなかった石器である。通例、掻器・削器といえばポジ面側での加工であるが、2 で見る状況は明らかに意識的にポジ面側へ加工していることがわかる。3 の同一縁表裏入れ変え加工は、愛媛県の伯方島金ヶ崎遺跡など、瀬戸内系の旧石器時代石器にみられる技術的な要素である (綿貫 2019.3)。5 も、その数量的な観点からすると明らかに斜軸の剥片を利用して裏面加工などを加えた縄文時代の石匙や横刃形石器のような定型的な石器と考えられる。これについても今峠型ナイフ形石器の石器群で注目されてこなかった石器である。これに似た削器は亀石山遺跡の細石刃石器群の中から大型の例があるが、表面側に加工のある例である (天瀬町教育委員会 2003.3)。

上記してきたような状況は、近隣の時期が異なる旧石器時代遺跡では見つかっていない石器類である。これが五馬大坪遺跡を含む筑後川上中流域における今峠段階の地域的な特徴なのか、あるいは大分川流域、大野川流域、筑後平野、阿蘇山北西外輪山地域まで広がるのかが注意点となるだろう。

(4)　五馬大坪遺跡・宇土遺跡と周辺の細石刃文化について

五馬台地周辺の細石刃文化についての変遷は以前公表したことがある (綿貫 2004.6)。その際に用いた石器類は宇土遺跡、五馬大坪遺跡、平草遺跡からの出土品であった。そして細石刃文化を 4 期に分けた。1 期 (旧石器時代終末) として五馬大坪遺跡東地区・平草遺跡・亀石山遺跡から出土した野岳型細石刃核の段階、2 期 (縄文時代草創期 : 長者久保・

神子柴文化並行段階)は五馬大坪遺跡西地区で出土した船野型細石刃核の段階、4期(縄文時代草創期)は宇土遺跡で出土した楔形細石刃核の段階と編年的な位置を明示した。この編年観は現在も間違っていないが、今回、五馬大坪遺跡・宇土遺跡の再検討を行って気がついたことを付け加えておきたい。とりわけ亀石山、五馬大坪、宇土の三遺跡の順に細石刃と細石刃核の大きさが異なっており、一覧表に記載したデータをもとに具体的な状況を把握することを目的とする。

まず亀石山遺跡では、二万点を超える細石刃石器群があるが、うち細石刃が約12,000点、野岳型細石刃核と船野型細石刃核が出土している。船野型細石刃核は、流紋岩を石材としたもので、接合資料もある。それら船野型細石刃核の一群は、報告にあるグリッド図を参考にすると「Qは区」と「Rは区」に集中しており、やや規模の小さい腰岳系の黒曜岩からなる集中部とかさなるものの、剥片剥離を伴う石材：流紋岩に関する唯一の石器ブロックを形成している(天瀬町教育委員会2005.2)。そのやや北側の低い標高の部分は流出した遺物分布を示し、標高の高い南側803 m付近までは極散漫な分布を示している。要は、流紋岩を石材とする船野型細石刃核に関する石器ブロックの形成は一回だけであり、他の腰岳系黒曜岩に関する多数の石器ブロックに流紋岩、または腰岳系黒曜岩を石材とする船野型細石刃はない。もし野岳型細石刃核から細石刃を剥離した集団が流紋岩で船野型細石刃核からの細石刃生産を行っていたら、なぜ他の場所で剥離作業をしないのか。生産されるのは同じ細石刃なのに・・。腰岳系黒曜岩で船野型細石刃核を作出し、細石刃の生産が可能なことは福井洞穴Ⅳ層の事例をみても明らかである。 細石刃核を野岳型や船野型と呼ぶように、両細石刃核は細石刃剥離に至る工程が全く違っており、亀石山遺跡における「Qは区」と「Rは区」における船野型細石刃核をもった集団は、大野川流域方面から流紋岩を携えてきた集団と考えるのが自然だろう。亀石山遺跡の遺物分布図を見て気づくのは、大小多数の石器ブロックの存在であり、調査区の西側へ広がる兆候が窺えることを考慮すると、調査区面積の倍以上の巨大な遺跡であることは明らかであろう。このような規模の大きい遺跡が野岳型細石刃核の段階に、一度だけの来訪で形成されたとは到底思えない。石器ブロックを単位に、季節ごとにしばしば訪れる中で形成されたと推定する。その来訪の動機は、調査区だけで約12,000点という狩猟具用のパーツである細石刃の存在からすると、山地で谷方向(北方)を望む緩斜面に立地した重要な狩場であった可能性が高い。繰り返すとしばしば野岳型段階に集団が来訪し、更に時期を違えて船野型段階の集団が来訪し、さらにまた時代と時期を超えて縄文土器と狩猟具用のパーツである石鏃を残した集団が来訪したと想定したい。

次に亀石山遺跡における推定牟田・腰岳系黒曜岩(野岳型細石刃核・細石刃)を石材とする、細石刃の幅、細石刃核の高さと幅、についてみる(表9)。亀石山遺跡の細石刃の幅が平均で0.66cm、細石刃核の大小12点の高さと幅の平均値は、2.90cm(高さ)、2.00cm(幅)、また大型で背部に礫面を残す大型の細石刃核7例の高さと幅の平均値は、3.33cm(高さ)、2.42(幅)である。背面に礫面を残す例が、高さも高く、幅広く、小型例は剥離の進んだ例であることが多い。

次に五馬大坪遺跡の件であるが、細石刃文化に含まれる石器類は既に報告してきたように西地区のS1ブロック･S 2ブロックとその周辺、東地区のS3ブロックであり、その間

表９　五馬台地における細石刃・細石刃核の規模の違い

変遷	野岳型段階　→		船野型段階　→	楔形Mc段階
計測部分	亀石山	五馬大坪東地区	五馬大坪西地区	宇土Ⅳ区
細石刃幅	0.66cm	0.80cm	0.69cm	0.48cm
細石刃核体高	2.90cm(3.33)	4.02cm	3.25cm	2.00cm
細石刃核幅	2.0cm(2.42)	2.37cm	2.13cm	1.23cm

※亀石山の細石刃は、深澤幸恵の計測値を引用(深澤2003.3)

は約 170 m近く離れている。五馬大坪遺跡東地区のS3ブロックとその付近の遺構内などから、おそらく牟田・腰岳系の黒曜岩を石材とする細石刃や野岳型細石刃核が３点出土している。ほかにチャート石材とする剥片やチップもある。これらの中に大野川系の流紋岩を石材とするものは１点も出土していない。

五馬大坪遺跡東地区のS3ブロック野岳細石刃核３点の体高と正面幅の平均値は約４.02㎝(体高)と2.37㎝(幅)である。細石刃核３点のうち一例は打面作出を上下両端でおこなっており(第37図174)、これが平均値を下げている部分はある(表９)。この例を除くと体高は4.34㎝である。図化した細石刃８点については、折れた例が多いので幅だけの平均値を見てみると0.80㎝であった。

五馬大坪遺跡西地区のS1ブロック・S２ブロックとその周辺からは、大野川方面と推定される流紋岩を石材とする例と、既報告で溶岩としたガラス質溶結凝灰岩を石材とする船野型細石刃核が２点出土している。後者は象ケ鼻産の場合とは違って焦げ茶色の強い風化がない石材であり、流紋岩ではなくとも他の石材でも船野型細石刃核を作りうるということを示している。船野型細石刃核２点の体高と正面幅の平均値は約3.25㎝(体高)と2.13㎝(幅)である。この地域の細石刃は28例で、その幅の平均値は0.69㎝であった(表９)。

宇土遺跡Ⅳ区の６ブロック・８ブロックとその周辺からは小型の細石刃や細石刃核が出土した。細石刃核は、九州地域に特徴的に出土する楔形細石刃核であり、それは縄文時代草創期の隆起線文土器(豆粒文土器を含める)や爪形文土器段階に多い。このほかこのあたりから出土した旧石器時代の浅い皿状ピット内から剥片と出土した黒曜岩の原石がある(第48図221)。これは五馬台地のローム層中に自然礫として含まれた黒曜岩であり、黒味がやや薄いものの良質である特徴がある。宇土遺跡のⅣ区で出土した小型の細石刃核の大きさと黒味の薄い点は同様であり、石材として用いた可能性がある。

宇土遺跡Ⅳ区の細石刃核４点の体高と正面幅の平均値は約2.13㎝(体高)と1.23㎝(幅)である。細石刃13点の幅について平均値を見ると0.48㎝であった。上記したように細石刃核や細石刃は小型である(表９)。

以上三遺跡のデータをみてきたが、確認して置きたいのは九州において野岳型、船野型、楔形という細石刃核の変遷過程は福井洞穴や泉福寺洞穴などの層位的成果から、一応の共通認識となっていることである。そしてこの変遷は早くに細石刃石器群が衰退、もしくは減少した関東の相模野台地の層位的な変遷過程、研究成果とも異なる変遷である。この点を踏まえて亀石山遺跡、五馬大坪遺跡、宇土遺跡における細石刃核とその周辺に分布する細石刃は多くの場合、関連する石器群に含めるのが通例である。そこでこれまで述べてきた数値を細石刃核の変遷過程ごとに並べてみた(表９：註1)。これをみると亀石山遺跡は野岳型細石刃核の残核まで剥離した例があるので、数値が低く出ているが、同じ段階の五馬大坪遺跡東地区の場合、それ以降の船野型段階、楔形細石刃核段階へと小型化する傾向

にある。亀石山遺跡以外の例数が少ない憾みはあるが、およその傾向を示していると考えたいところである。なお変遷過程で付け加えたいのは、一覧表を見るとわかるが宇土遺跡Ⅳ区の細石刃石器群は漸移層（Ⅱ層）に出土層の主体があり、大坪遺跡東地区ではその下のローム層（８層）上部域に存在することは、年代差を示していると考えられる。

五馬台地における野岳型細石刃核の代表的である亀石山遺跡の器種状況・石材状況を瞥見してもわかるように、野岳型細石刃核から細石刃の生産に際し相当数の推定牟田・腰岳系の石材が安定的に持ち込まれているのは明らかである。こうした五馬台地における野岳型細石刃核の段階における状況は、五馬大坪遺跡東地区、平草遺跡などでも共通しているように思える。ところが野岳型細石刃核段階以降になると五馬大坪遺跡西地区・宇土遺跡Ⅳ区などで、細石刃・細石刃核の小規模傾向も窺える部分もあるほか、細石刃・細石刃核に必要な石材として流紋岩、五馬台地のローム層中に自然状態に含まれる小型で良質な黒曜岩（２、３cm 前後）、ガラス質溶結凝灰岩なども多い。ともあれ、野岳型段階以降、推定牟田・腰岳系黒曜石の利用が低下していることが窺える。この点、五馬大坪遺跡西地区や宇土遺跡Ⅳ区で石材５（推定牟田・腰岳系黒曜岩）とした中に黒味がやや薄い良質な例があり、今後、ローム層中に自然状態に含まれる小型で良質な黒曜岩などとの蛍光Ｘ線分析が必要と考えている。

以上で筆者の永年の懸案であった大坪遺跡と宇土遺跡の補遺を含めた再検討を終了する。なお、本稿の作成に際し、校正を手伝っていただいた桑村壮雄氏に感謝の意を表する。

註１：筆者が計測した細石刃や細石刃核の数値は、深澤幸恵が計測したものと違っている（深澤 2005.2)。それぞれの認識による計測部分、計測器具、計測の傾き等によって違いがでるものと推定する。しかし、両者の計測数値の違いは大勢に影響のない程度と考えている。また亀石山遺跡の数値を筆者は計測しておらず、深澤の計測値を参考とする。

参考文献

天瀬町教育委員会 1986.3『宇土遺跡発掘調査報告』
天瀬町教育委員会 1989.3『五馬大坪遺跡』
天瀬町教育委員会 2002.3『塚田の遺跡』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告 第６集
天瀬町教育委員会 2003.3『高瀬Ⅲ遺跡・亀石山遺跡』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告 第６集
天瀬町教育委員会 2005.2『亀石山遺跡２』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告 第８集
直入町教育委員会 1989.3『横枕Ｂ遺跡・前田遺跡』
波野村教育委員会 2002.3『笹倉永迫遺跡』
小畑弘己・岡本真也・古森政次・渡辺一徳・田口清行 2001「いわゆる「阿蘇産黒曜石」の産地発見とその意義－阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩露頭の発見－『旧石器考古学』62、63-76.
桑村壮雄 2024.11「大分県由布市に所在する山下池遺跡の採集資料について」『九州旧石器』第 28 号　九州旧石器文化研究会　214-220
佐藤宏之 1988.2 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第 73 巻 第３号　日本考古学会　273-309

橘　昌信 1973.4「九州における細石器文化」『考古学論叢』1 別府大学考古学研究会 11-26
橘　昌信 1975.7「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3 別府大学考古学研究会 1-69
橘　昌信 1978.3「大野川中流域における旧石器時代の基礎調査 (1) －今峠遺跡－」『別府大学博物館研究報告』No.2 別府大学博物館学課程　15-21
松本　茂 2023.3「姶良火山噴火後の九州における石器群の再編と展開」『旧石器考古学』87 旧石器文化談話会　1-22
深澤幸恵 2003.2「亀石山・高瀬Ⅲ遺跡における細石刃・細石器の形態学的分析」『高瀬Ⅲ遺跡・亀石山遺跡』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告 第 6 集 , 天瀬町教育委員会　367-390
深澤幸恵 2005.2「五馬台地における細石刃・細石核の形態学的分析」『亀石山遺跡 2』天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告 第 8 集 , 天瀬町教育委員会　47-75
綿貫俊一 2004.6「筑後川上流域の細石刃文化」『山下秀樹氏追悼考古論集』山下秀樹氏追悼論文集刊行会　157-170
綿貫俊一 2019.3「金ヶ崎遺跡の石器類」『高橋幸恵コレクションⅠ - 旧石器・縄文時代縄文時代遺物 (1)-』愛媛県歴史博物館資料目録第 27 集 31-73

綿貫俊一 2021.3「四日市遺跡出土の旧石器時代から縄文時代草創期の石器類」『大分県立埋蔵文化財センター 研究紀要』4 , 大分県立埋蔵文化財センター　69-86

五馬大坪遺跡・宇土遺跡：出土石器類実測図一覧表の凡例

1 以下の表は、本論に掲載した 1 から 233 までの挿図番号どおりの石器類の一覧表である。
2 区画は、本論及び五馬大坪遺跡と宇土遺跡の報告に掲載した平面図など、10 m ごとの区画を意味する。
3 宇土遺跡の場合は、Ⅰ区では AB 列 1 ～ 14 区、Ⅱ区からⅣ区は ABCDEF 列で 1 ～ 29 区までを通しで区画する。
4 五馬大坪遺跡の番号は、区画ごとの遺物の取り上げ番号である。
5 宇土はⅠ区からⅣ区それぞれの区での通しの取り上げ番号で、B4 区、D12 区ごとの番号ではない。
6 位置の N → S、E → W は、B7 区・C18 区など、10 m 区画の北境界線から南方向の遺物までの距離と東境界線から西方向の遺物までの距離を示す。
7 類別は、石器類の種類を示す。天瀬町教育委員会が発行した報告書に筆者 (綿貫) が文章中に記載した分類名や、表に記載した分類名が違っている場合があるが、本論をもって訂正する。
8 石材は、五馬大坪遺跡の報告で用いた 1 から 11 までの石材分類に準拠し、本論中でも解説したとおりであり、アラビア数字で示している。その他は、表中に適宜加えている。

五馬大坪遺跡：出土石器類実測図一覧表

挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
1	B7 128	8	382.928	281	994	角錐状石器	1	3.80	1.55	5.40	5.40	
2	C12 34	8	384.371	422	190	削器	1	5.46	3.51	2.02	33.00	
3	B7 206	7	382.554	38	826	削器	1	5.68	4.11	2.26	43.1	
4	B9 102	8	383.302	560	328	掻器	1	8.70	4.34	2.79	81.0	
5	B9 24	6	383.466	789	203	チップ	1	1.30	2.10	0.50	0.99	
6	B8 188	7	382.861	688	922	剝片	1	2.10	2.50	0.50	2.14	
7	B7 171	7	382.953	441	505	剝片	1	2.80	3.10	0.80	3.26	
8	B9 177	7	383.168	477	813	剝片	1	2.40	2.00	0.40	1.78	
9	C7 26	7	382.458	274	376	RF	1	4.55	2.00	2.00	11.20	S２ブロック
10	B9 79	8	383.315	727	82	剝片	1	4.00	4.10	1.40	16.13	
11	B8 92	7	383.034	799	337	剝片	1	3.10	4.40	1.20	14.73	横長？
12	C11 89	8	384.270	383	37	UF	1	4.50	3.70	1.45	15.71	
13	B8 39	7	382.835	874	736	剝片	1	2.10	3.50	0.80	4.10	横長
14	B9 52	6	382.287	458	666	剝片	1	2.50	3.40	1.00	5.84	横長
15	C13 30	6	384.157	119	23	ナイフ形石器	2	4.30	2.55	1.10		
16	B6 225	8	382.437	759	632	角錐状石器	2	4.36	2.10	1.70	12.20	折れ後再加工
17	C10 83	6	383.790	414	415	削器	2	4.14	4.10	1.320	17.20	
18	C9 20	8	383.221	276	207	削器	2	3.50	3.62	1.24	13.20	両縁加工
19	B7 74	7	382.590	993	935	UF	2	3.66	2.25	0.81		S1ブロック 両縁刃毀れ
20	B6 8	7	382.981	178	376	削器	2	2.70	1.59	0.74	3.30	
21	B7 70	8	382.540	932	947	削器	2	4.88	4.18	2.30	33.80	S1ブロック
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
33	B8 68	8	382.875	889	496	削器フラグ	2	1.21	3.13	0.66	27.00	
34	B6 175	7	382.526	895	293	掻器	2	2.63	2.32	0.86	4.60	
35	B8 71	8	382.879	833	496	掻器	2	2.42	2.52	1.03	6.5	
36	B14 1	7	383.921	963	897	掻器	2	2.69	1.85	1.49	8.20	
37	B6 189	8	382.483	958	373	掻器	2	2.31	2.37	1.21	6.90	
挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
38	TG9 1			107	33	石核	2	1.78	4.65	3.07	21.5	横長剝片剝離
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
39	B6 2	8	382.911	137	107	掻器	2	2.70	2.95	1.30	9.59	
40	B8 112	8	382.980	711	309	剝片	2	3.90	3.10	1.70	18.65	
41	B5 16	8	382.187	772	73	削器	2	3.00	3.50	1.50	11.09	
42	B6 171	7	382.545	867	262	錐	3	3.92	2.26	1.23		
43	C10 87	8	383.661	197	489	錐	3	3.68	2.96	1.63	15.8	
44	B11 1	7	383.801	606	950	削器	3	3.61	3.42	1.31	14.2	
45	B17 7	7	383.242	895	570	掻器ヵ	3	3.78	2.60	1.81	14.2	
46	C11 128	7	384.250	446	181	掻器	3	3.85	3.97	1.98	30.00	
47	B9 107	8	383.231	853	407	削器	6	2.27	2.78	0.72	3.40	
48	C9 23	7	383.105	225	473	削器	3	3.29	2.80	1.38	8.5	
49	C11 102	8	384.018	384	834	削器	3	3.67	2.88	0.89	9.2	
50	B8 43	6	382.855	992	895	削器	3	3.68	2.54	0.61	6.40	
51	B6 90	8	382.621	520	625	削器	3	4.20	2.41	1.24	13.5	
52	B10 49	7	383.685	694	336	削器	3	4.36	2.65	1.55	15.00	
挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
53	C8 22	7	382.876	45	415	石核	3	1.84	6.49	4.07	44.50	
54	B8 59	6	383.047	806	564	石核	3	3.45	3.90	2.05	21.90	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
55	B6 190	7	382.450	941	400	掻器		2.35	2.10	1.20	6.43	

挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 高cm	法量 幅cm	法量 奥行cm	法量 重量g	備考
56	C15 19	8	383.302	493	299	石核	3	3.60	2.80	1.80	17.90	
57	C14 16	6	383.863	280	386	石核	3	4.00	5.25	2.50	57.98	
58	C10 38	7	383.862	180	169	石核	2	3.55	2.80	1.85	22.49	
59	B6 23	8	382.883	198	774	石核	3	2.85	3.00	3.90	26.27	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 長cm	法量 幅cm	法量 厚cm	法量 重量g	備考
60	B8 201	7	382.940	363	758	掻器	4	6.25	4.41	2.63	80.00	
61	C3 62	8	384.300	585	372	削器	2	7.80	5.46	2.17	65.70	
62	C11 77	7	384.229	140	153	削器	4	7.87	3.93	1.82	30.40	
挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 高cm	法量 幅cm	法量 奥行cm	法量 重量g	備考
63	B5 31	7	382.769	82	90	石核	4	3.11	4.50	2.01	31.10	
64	B9 151	8	383.135	749	669	石核	4	10.93	5.64	2.06	173.00	
65	B8 159	8	382.946	688	288	石核	4	4.90	6.49	3.25		
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 長cm	法量 幅cm	法量 厚cm	法量 重量g	備考
66	C15 3	8	383.627	359	993	ナイフ形石器	5	3.25	2.06	1.10	2.70	今峠型大坪類型
67	C15 27	8	383.624	422	845	ナイフ形石器	5	4.20	2.50	1.10	9.60	今峠型大坪類型
68	B10 30	8	383.580	527	114	ナイフ形石器		3.60	2.72	0.82	5.70	今峠型大坪類型
69	B6 184	8	382.461	905	380	ナイフ形石器		4.20	2.71	0.86	8.70	今峠型大坪類型
70	B7 13	7	382.785	774	98	ナイフ形石器	1	2.60	2.00	0.81	2.60	今峠型大坪類型
71	C13 7	7	384.364	381	553	台形様石器	5	2.73	1.92	0.72	2.60	
72	C9 37		382.857	236	845	ナイフ形石器ヵ	5	2.30	2.74	0.98	5.20	
73	B9 61	8	383.287	354	126	UF	5	2.20	3.00	0.75	4.11	
74	B8 89	6	383.100	366	323	UF	5	2.65	2.75	0.85	5.62	
75	C11 99	8	384.025	343	829	UF	5	2.60	2.15	1.11	4.67	
76	B8 149	7		624	180	UF	5	3.9	2.95	1.20	13.94	
挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 高cm	法量 幅cm	法量 奥行cm	法量 重量g	備考
77	C14 23	8	383.691	507	59	石核	5	3.10	2.95	2.00	11.90	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 長cm	法量 幅cm	法量 厚cm	法量 重量g	備考
78	C11 36			115	279	ナイフ形石器	6	4.08	3.32	1.05	11.80	今峠型大坪類型
79	C9 25	8	383.206	72	397	ナイフ形石器	6	3.50	2.58	0.71	5.90	今峠型大坪類型
80	B11 21	7	383.920	575	207	ナイフ形石器	6	3.43	1.99	0.96	4.30	今峠型大坪類型
81	C13 16	7	384.222	97	394	ナイフ形石器	6	3.30	2.20	1.10	6.20	今峠型大坪類型
82	B14 6	8	383.602	742	580	ナイフ形石器	6	3.45	2.92	1.22	10.10	今峠型大坪類型
83	B10 29	8	383.562	537	151	ナイフ形石器	6	2.94	2.41	0.89	5.90	今峠型大坪類型
84	B8 9	8	382.923	913	267	ナイフ形石器	6	2.70	2,00	0.80	3.00	今峠型大坪類型
85	C13 3	7	384.337	311	749	ナイフ形石器	6	1.59	1.30	0.44	1.00	二側縁加工
86	C15 17	8	383.303	160	540	ナイフ形石器	6	4.62	2.00	1.25	10.00	二側縁加工
87	B11 29	8	384.065	935	398	ナイフ形石器	6	2.79	3.23	0.86	6.40	今峠型大坪類型
88	B14 2	7	383.856	897	852	ナイフ形石器	6	3.45	2.92	1.22	10.10	今峠型大坪類型
89	B11 53	8	383.797	712	653	ナイフ形石器	6	2.55	2.06	0.76	3.00	今峠型大坪類型
90	C16 6	7	382.921	162	683	ナイフ形石器	6	2.40	1,60	1.20	3.20	今峠型フラグ
91	B14 6	8	383.602	742	580	剝片	6	2.15	2.45	1.10	4.46	
92	B9 91	8	383.290	697	276	掻器	6	3.04	3.12	1.70	17.8	
挿図	区画ー番号	層	位置 標高	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 高cm	法量 幅cm	法量 奥行cm	法量 重量g	備考
93	C15 12	7	383.535	387	800	石核	6	1.75	3.65	2.76	16.40	横長剝片剝離
94	B11 38	8	384.064	817	105	石核	6	1.31	3.54	2.13	9.70	横長剝片剝離
95	B11 41	8	384.059	831	95	石核	6	3.19	4.50	1.48	16.80	ノ字状剝片剝離
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm N→S	位置cm E→W	類別	石材	法量 長cm	法量 幅cm	法量 厚cm	法量 重量g	備考
96	B9 39	7	382.387	649	298	ナイフ形石器	7	6.15	3.36	1.19	18.29	今峠型大坪類型
97	C10 70	7	383.877	359	98	ナイフ形石器	7	3.69	1.94	1.04	5.10	今峠型大坪類型

98	C8 3	8	382.921	42	119	掻器	7	3.11	2.25	1.70	13.30	
99	B8 63	6	383.076	791	533	削器	7	5.70	2.96	1.81	27.80	
100	C11 95	7	384.004	343	960	削器	7	4.70	2.31	1.10	12.00	
101	C8 19	8	382.894	29	350	削器	7	5.14	3.13	1.57	23.10	
挿図	区画ー番号	層	位置	位置cm		類別	石材	法量				備考
			標高	N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
102	B9 87	7	383.457	857	45	石核	8	3.55	3.60	2.00	21.40	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
103	B9 73	7	383.381	690	57	削器	7	4.56	3.16	1.20	21.10	
104	C12 32	6	384.563	384	22	ナイフ形石器	7	6.40	3.20	1.32	21.90	今峠型大坪類型
105	B6 211	7	382.589	769	513	削器		2.19	3.80	0.60	4.30	
106	B8 138	6	383.147	738	46	削器	7	3.32	4.44	0.50	8.40	
107	C11 93	6	384.085	298	964	削器	7	8.44	4.79	1.76	51.00	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
108	C10 68	8	383.738	241	383	削器	8	3.60	3.17	0.94	9.70	
109	B8 14	8	382.897	952	352	削器	3	1.70	2.63	0.76	3.30	
110	B6 109	8	382.598	634	464	削器	8	4.42	4.43	1.46	20.70	
111	B6 210	8	382.468	783	515	削器	8	3.51	5.39	0.70	11.80	
112	C12 23	7	384.482	361	410	削器	8	5.62	7.07	2.31	83.10	
113	A6 3	7	383.072	920	196	削器	8	3.23	3.72	1.20	16.70	
挿図	区画ー番号	層	位置	位置cm		類別	石材	法量				備考
			標高	N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
114	B6 59	8	382.817	237	649	石核	8	5,25	7.53	1.72	52.70	
115	B4 1	7	381.456	710	680	石核		4.90	5.62	3.98	86.30	
挿図	区画ー番号	層	位置	位置cm		類別	石材	法量				備考
			標高	N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
116	B9 164	7	383.144	333	770	石核	8	2.90	3.50	1.60	18.63	
117	C12 19	7	384.424	346	629	石核	8	3.40	4.20	2.25	26.19	
118	B9 44	6	382.387	569	445	石核	8	3.10	4.30	1.85	20.72	
119	B9 103	8	382.897	560	332	石核	8	2.25	2.50	2.05	11.60	
120	B9 37	6	382.447	645	250	石核	8	3.00	3.60	2.35	28.90	
121	C12 28	7	384.474	353	396	石核	8	3.50	3.30	2.85	23.70	
122	B9 80	8	383.275	660	170	石核	8	.96	2.81	2.41	19.80	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
123	C12 22		384.395	344	578	ナイフ形石器		2.66	1.10	0.54	1.40	
124	B9 54	7		382	110	UF	11	4.40	2.96	1.18	15.50	
125	B6 237	7	382.456	757	853	UF	玉髄	7.29	2.98	1.27	29.00	
126	B9 89	7	383.336	735	288	剝片	7	1.73	4.27	1.37	5.80	横長剝片
127	B8 127	7	383.167	840	147	削器		4.45	7.03	1.86	41.60	
128	C11 63	8	384.235	342	220	削器		8.24	5.09	2.06	94.80	
129	C10 48	7	384.007	241	17	削器	8	6.24	6.92	1.33	46.00	
挿図	区画ー番号	層	位置	位置cm		類別	石材	法量				備考
			標高	N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
130	B9 148	8	383.155	957	503	23 101	7	1.49	3.42	3.47	10.50	
131	B8 180	7	382.922	634	650	石核	石英	5.98	6.80	3.65	143.00	
132	B7 175	7	382.940	416	440	石核	7	3.64	4.08	2.25	29.00	
挿図	区画ー番号	層	標高m	位置cm		類別	石材	法量				備考
				N→S	E→W			長cm	幅cm	厚cm	重量g	
133	B8 50	7	382.876	810	876	チップ	11	2.20	1.70	0.70	1.89	鉄石英
134	B9 115	8	383.284	697	400	剝片	11	2.85	1.95	1.00	5.54	鉄石英
135	B6 131	7	382.789	521	156	剝片	珪質岩	4.75	5.10	1.15	21.23	
136	C12 18	7	384.390	324	658	剝片	珪質岩	5.40	4.00	1.80	32.74	
137	B7 9	7	382.745	816	151	細石刃	5	0.96	0.56	0.24	1.00	
138	B7 112	7	382.586	848	771	細石刃	5	1.19	0.53	0.15	1.00	S1ブロック
139	B7 99	7	382.622	774	946	細石刃	5	0.95	0.64	0.11	1.00	S1ブロック

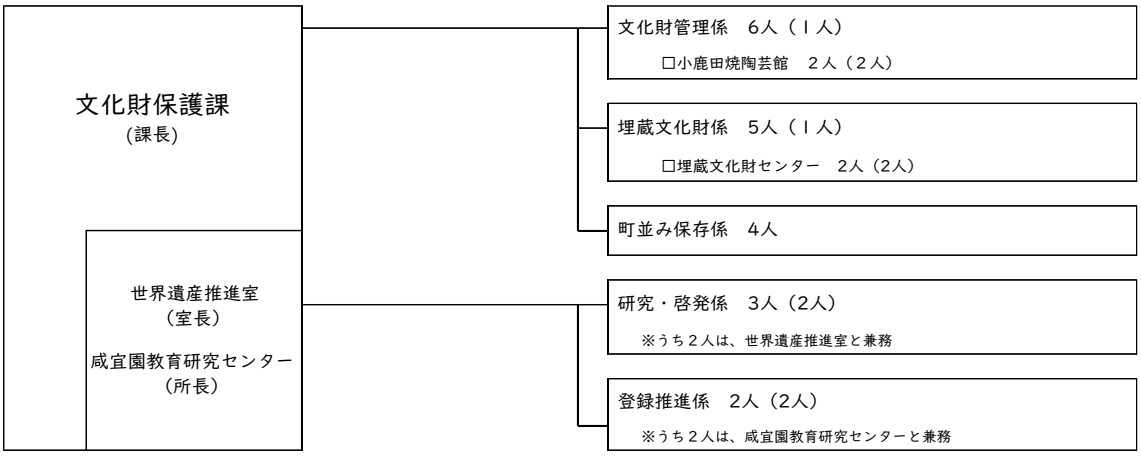
140	B7 5	7	382.736	969	167	細石刃	5	1.94	0.50	0.25	3.00	
141	B7 50	6	382.745	904	745	細石刃	5	1.31	0.74	0.20	2.00	S1ブロック
142	B7 59	8	382.515	985	798	細石刃	5	1.68	0.70	0.27	3.00	S1ブロック
143	C7 9	7	382.600	241	97	細石刃	5	0.87	0.82	0.12	1.00	S２ブロック
144	C7 10	7	382.560	244	132	細石刃	5	1.44	0.71	0.10	2.00	S２ブロック
145	C8 65	8	382.570	253	896	細石刃	5	0.59	0.57	0.14	0.50	S２ブロック
146	C7 3	7	382.583	160	66	細石刃	5	1.16	0.74	0.23	2.00	S２ブロック
147	C8 64	8	382.575	268	891	細石刃	5	1.31	0.73	0.15	1.00	S２ブロック
148	C7 13	6	382.670	232	191	細石刃	5	1.13	0.76	0.14	1.00	S２ブロック
149	C7 12	7	382.546	344	153	細石刃	5	1.13	0.68	0.13	1.00	S２ブロック
150	C27 7	8	379.465	13	605	細石刃	5	2.66	0.66	0.20	3.00	S3ブロック
151	C27 30	7	379.530	12	547	細石刃	5	2.73	0.94	0.22	4.00	S3ブロック
152	C27 8	8	379.495	4	591	細石刃	5	1.63	0.79	0.19	2.00	S3ブロック
153	C27 3	8	379.020	125	740	細石刃	5	1.35	1.00	0.14	2.00	S3ブロック
154	B27 12	7	379.570	957	522	細石刃	5	1.10	0.66	0.14	1.00	S3ブロック
155	B27 5	7	379.590	838	310	細石刃	5	1.23	0.67	0.10	1.00	S3ブロック
156	B27 7	8	379.415	848	472	細石刃	5	1.28	0.84	0.17	2.00	S3ブロック
157	B27 4	8	379.415	976	685	細石刃	5	1.24	0.88	0.16	3.00	S3ブロック
158	B8 133	6	383.127	843	14	細石刃	3	2.74	0.93	0.37	10.00	
159	C15 20	6	383.349	487	198	細石刃	5	2.65	0.70	0.20	2.00	
160	B10 24	8	383.625	647	198	細石刃	5	1.58	0.65	0.15	2.00	
161	B10 126	7	383.399	423	768	細石刃	5	1.81	0.70	0.22	2.00	
162	B9 58	7	383.308	344	92	細石刃	5	1.68	0.77	0.16	2.00	
163	B7 179	7	382.946	538	484	細石刃	5	0.98	0.55	0.15	1.00	
164	B5 26	8	382.731	198	46	細石刃	5	1.38	0.46	0,14	1.00	
165	B7 19	7	382.783	773	204	細石刃	5	1.71	0.44	0.20	2.00	
166	B8 224	7	382.840	441	292	細石刃	5	1.42	0.61	0.21	1.50	
167	B8 246	7	383.113	527	158	細石刃	5	1.30	0.50	0,20	2.00	
168	B7 163	7	382.968	426	456	細石刃	5	1.19	0.71	0.16	1.00	
169	B10 137	7	383.372	312	871	細石刃	5	1.00	0.85	1.10	1.00	
170	C15 2	7	383.631	305	910	細石刃	5	1.09	0.51	0.13	1.50	
挿図	区画ー番号	層	位置	位置cm		類別	石材	法量				備考
			標高	N→S	E→W			高cm	幅cm	奥行cm	重量g	
171	B7 207	8	382.639	65	720	細石刃核	1	3.25	2.25	6.80	51.00	船野型
172	C7 17	7	382.615	115	190	細石刃核	11	3.25	2.00	3.31		船野型,S2ブ
173	B27	7	380.332	(20号墓)		細石刃核	5	4.25	2.31	1.05		野岳型,S3ブ
174	C27			(21号墓)		細石刃核	5	3.40	2.20	2.40		野岳型,S3ブ
175	B27 13	7	380.332	785	305	細石刃核	5	4.42	2.60	1.75		野岳型,S3ブ
176	Ⅰ区B6 27	Ⅲ	396.192	787	511	台形様石器	2	3.61	3.56	1.27	14.70	
177	Ⅰ区B6 25	Ⅲ	396.082	920	288	台形様石器	5	2.13	1.75	0.65	1.95	
178	Ⅰ区B4 12	Ⅲ	396.762	972	522	台形様石器	青:Sn	3.30	2.04	0.66	3.35	1ブロック,切断
179	Ⅰ区B11 94	Ⅳ	394.928	910	652	台形様石器	5	3.12	1.81	0.45	2.10	
180	Ⅰ区B4 65	Ⅳ	396.480	937	423	台形様石器	青:Sn	2.79	4.02	0.89	7.99	1ブロック
181	Ⅰ区B11 132	Ⅳ下	395.611	961	575	台形様石器	5	2.87	2.12	0.64	2.80	
182	Ⅰ区A11		周溝西側風倒木痕			台形様石器	青:Sn	4.14	3.00	1.45	14.00	
183	Ⅰ区B7 1	Ⅳ下	395.432	988	348	台形様石器		3.35	2.42	0.68	4.50	
184	Ⅰ区B4 82	Ⅳ	396.444	927	169	台形様石器	青:Sn	4.57	2.51	0.90	9.90	1ブロック
185	Ⅰ区B4 66	Ⅳ	396.438	925	386	台形様石器		3.72	3.62	0.81	7.85	1ブロック
186	Ⅰ区B6 140	Ⅳ	395.917	994	213	ナイフ形石器	5	3.84	1.63	0.91	4.65	截頂石刃
187	Ⅰ区B4 5	Ⅲ	396.900	913	67	剝片	1	6.00	4.54	2.19	22.00	1ブロック,刃毀れ
188	Ⅰ区B4 146	Ⅳ	—	—	—	ナイフ形石器	5	2.935	2.895	1.00	4.50	1ブロック小国産ヵ
189	Ⅰ区B11 103	Ⅲ	394.803	934	516	削器	青:Sn	2.48	2.98	1.19	7.75	
190	Ⅰ区B4 121	Ⅲ下	396.592	731	612	剝片	2	3.15	1.82	0.94	4.60	1ブロック
191	Ⅰ区A7 54	Ⅰ	395.888	15	833	石核	2	—	—	—	18.35	
192	Ⅰ区B6 34	Ⅰ	396.112	944	978	石核	2	—	—	—	19.30	
193	Ⅰ区B7 50	Ⅱ	395.838	936	781	石核	2	—	—	—	22.70	
194	Ⅰ区A3 4	Ⅲ	396.982	7	600	石核	7	—	—	—	40.50	1ブロック

195	Ⅱ区B4 1	Ⅲ	394.700	300	300	ナイフ形石器	5	5.26	1.94	0.60	5.60	2ブロック 斜め整形
196	Ⅳ区C17 104	Ⅲ	391.814	717	737	ナイフ形石器	1	4.80	2.23	0.91	8.25	3ブロック 今峠型今峠類型
197	Ⅳ区D21 132		12号住覆土内			ナイフ形石器	5	4.70	1.24	0.84	5.60	斜め整形
198	Ⅲ区C5 1	Ⅳ				石核					24.30	2ブロック
199	Ⅳ区C18 166		4号小型竪穴			台形様石器	5	3.77	1.98	0.69	3.70	3ブロック周辺
200	Ⅳ区C18 170		10号住覆土内			掻器	1	4.23	2.33	1.60	12.70	3ブロック周辺
201	Ⅰ区B11 147		1号住覆土内			石刃	5	4.20	2.11	0.67	4.90	
202	Ⅳ区C20 123	Ⅲ	390.254	214	81	台形様石器	6	2.19	2.24	0.15	2.50	5ブロック
203	Ⅳ区E24 57	Ⅱ	390.541	904	208	RF	5ヵ	3.94	2.58	1.26	0.35	7ブロック
204	Ⅳ区D19 113	Ⅱ	391.327	559	979	細石刃核	11:Ob	1.81	1.16	0.65	1.35	6ブロック ローム中の Obヵ
205	Ⅳ区D19 116	Ⅱ	391.336	527	935	MC再生剝片	3	2.36	1.76	0.47	1.06	6ブロック
206	Ⅳ区E24 163		E24区23号住			細石刃	5	1.31	0.60	0.25	0.15	7ブロック
207	Ⅳ区E24 152	Ⅲ	390.660	814	291	細石刃	5	1.20	0.55	0.10	0.10	7ブロック
208	Ⅳ区					細石刃		1.30	0.55	0.30		
209	Ⅳ区E24 127	Ⅲ	390.639	843	111	細石刃	5	0.72	0.42	0.04	0.04	7ブロック
210	Ⅳ区E24 143	Ⅲ	390.641	808	260	細石刃	5	0.51	0.50	0.17	0.05	7ブロック
211	Ⅳ区E24 141	Ⅲ	390.577	821	305	細石刃	5	1.32	0.33	0.12	0.07	7ブロック
212	Ⅳ区E24 30	Ⅱ	390.604	812	278	削器	2	3.22	4.02	1.47	20.20	7ブロック
213	Ⅳ区D24 89	Ⅱ	390.308	151	161	剝片	2	1.38	1.06	0.26	0.30	7ブロック
214	Ⅳ区E24 101	Ⅱ	390.514	970	49	削片	2	1.44	1.35	0.48	0.90	7ブロック
215	Ⅳ区D23 93	Ⅱ	390.480	76	852	剝片	5	1.50	1.73	0.33	0.70	7ブロック
216	Ⅳ区D24 126	Ⅱ	391.300	176	452	楔形細石刃核	5	2.30	1.40	1.50	3.40	7ブロック
217	Ⅳ区E24 158		23号住の覆土内			MC原形	2	—	—	—	6.30	7ブロック
218	Ⅳ区E24 7	Ⅲ	390.709	634	192	MC原形	2	—	—	—	9.05	7ブロック
219	Ⅳ区E24 157	Ⅲ	390.607	875	363	MC原形	2	2.07	2.26	0.86	3.70	7ブロック
220	Ⅳ区E22 136		8号竪穴覆土内			細石刃核	2	1.80	0.80	1.10	4.15	
221	Ⅳ区E22		Pit6覆土内			MC原石	11:Ob					旧石器遺構
222	Ⅳ区C19 168		11号住覆土内			細石刃	5	2.33	0.60	0.37	0.50	
223	Ⅳ区E24 13	Ⅱ	390.662	720	362	細石刃	5	1.05	0.55	0.14	0.10	7ブロック
224	Ⅳ区E24 26	Ⅱ	390.647	794	298	細石刃	5	1.76	0.36	0.09	0.10	7ブロック
225	Ⅳ区E24 39	Ⅱ	390.633	822	222	細石刃	5	1.12	0.49	0.14	0.10	7ブロック
226	Ⅳ区E24 44	Ⅱ	390.567	887	392	細石刃	5	1.04	0.42	0.12	0.05	7ブロック
227	Ⅳ区D23 92	Ⅱ	390.341	164	927	細石刃	5	1.68	0.48	0.14	0.14	7ブロック
228	Ⅳ区D23 97	Ⅱ	390.442	109	882	細石刃	5	1.00	0.48	0.09	0.05	7ブロック
229	Ⅳ区D23 131		13号住覆土内			細石刃核	5	2.10	1.55	1.60		7ブロック
230	Ⅳ区E24 137		23号住覆土内			MC原形	2				7.05	7ブロック
231	Ⅳ区E24 42	Ⅱ	390.627	834	212	削器	7	3.97	5.03	0.99	13.65	7ブロック
232	Ⅳ区E24 47	Ⅱ	390.554	865	351	削器	青:Sn	5.05	3.42	1.52	21.70	7ブロック
233	Ⅳ区E24 10	Ⅲ	390.654	ko	137	敲石	砂岩ヵ	6.54	4.55	4.39	190.50	7ブロック

日田市教育庁文化財保護課年報

Ⅰ.令和５年度組織体制

１．文化財保護部局



※（）内は、うち会計年度任用職員の数

[日田市教育委員会]

教育長	三笘 眞治郎　（4 月～7 月）
	江嶋　久典　（10 月～）

[日田市教育庁]

教育次長	髙倉　保徳
文化財保護課長	吉田　博嗣

[文化財管理係]

主幹（総括）	若杉　竜太
主査	井上　純
主査	加藤　佑子
主任	横尾　和也
主査（再任用）	河野　徹
会計年度任用	小林　まり
会計年度任用	田村　訓稔（小鹿田焼陶芸館勤務）
会計年度任用	川津 ひとみ（小鹿田焼陶芸館勤務）

[埋蔵文化財係]

主幹（総括）	渡邉　隆行
主幹	行時　桂子
主査	上原　翔平
主事補	髙山　大輔
会計年度任用	後藤　綾子
会計年度任用	川津　敏國（埋蔵文化財センター）
会計年度任用	岐部　みか（埋蔵文化財センター）

[町並み保存係]

主幹（総括）	田中　大輔
主査	河津　桂
主査	林　大輔
主任	ワトソン祥太

２．日田市文化財保護審議委員

任期：令和５年８月１日～令和７年７月31日

No.	氏名	担当分野	所属
1	渡辺　文雄	有形文化財［絵画・彫刻他］	元 別府大学教授
2	大津　裕司	有形文化財［古文書・古記録］	大分県立歴史博物館
3	下村　　智	有形文化財［考古資料］	別府大学名誉教授
4	伊東　龍一	有形文化財［建造物］	熊本大学名誉教授
5	段上　達雄	無形文化財	別府大学特任教授
6	後藤　宗俊	史　跡	別府大学名誉教授
7	神川　建彦	天然記念物	特定非営利活動法人 初島森林植物園ネットワーク 理事長
8	渡辺　智恵美	保存技術	別府大学教授
9	江面　嗣人	伝統的建造物	岡山理科大学教授
10	大森　洋子	文化的景観	久留米工業大学教授
11	大神　信證	文化財の活用	日田市文化財保護員協議会
12	佐藤　隆博	文化財の活用	日田市小学校社会科部会

※令和５年８月時点

３．日田市文化財保護員

任期：令和４年４月１日～令和７年３月31日

No.	地区	氏　名	専門分野	No.	地区	氏　名	専門分野
1	旧市内	大神　信證	歴　史	12	天瀬町	織田荘太郎	郷土史
2		園田　　大	中世史	13		河津　正明	郷土史
3		髙瀬　泰孝	建　築	14		髙倉　重昭	郷土史
4		野田　髙巳	郷土史	15	大山町	江田　通徳	郷土史
5		原　　正幸	民　俗	16	前津江町	佐藤　光信	郷土史
6		原田　勝宏	考　古	17		長谷部良之	郷土史
7		原田　　進	建　築	18		松木　紘輝	郷土史
8		藤野　美音	考　古	19		後藤　則男	郷土史
9		三松　健次	建　築	20	中津江村	長谷部　徹	郷土史
10		室　　哲	建　築				
11		森山　雅弘	郷土史				

※令和５年４月時点

Ⅱ．文化財の指定

１．指定文化財等の状況

現在、日田市内の指定等の文化財は 185 件ある。その内訳は、国指定文化財 21 件、県指定文化財 39 件、市指定文化財 89 件、国選定文化財 2 件、国選択文化財 3 件、県選択文化財 2 件、そして国の登録有形文化財が 29 件である。

国指定・国選定・国登録・国選択

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【重要文化財】			
木造十一面観音立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	鎌倉時代
木造兜跋毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	平安時代後期
木造毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	文治３(1187)年の銘
木造四天王立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	元亨元年(1321)年の銘
木造毘沙門天立像	城町２（慈眼山仏像収蔵庫）	昭25.8.29	平安時代後期
行徳家住宅	夜明関町	昭50.6.23	天保13(1842)年
大野老松天満社旧本殿	前津江町大野	昭53.5.31	室町時代、三間社流れ造り栩板葺
旧矢羽田家住宅	大山町西大山	昭57.6.11	江戸後期、別棟形式の民家
長福寺本堂	豆田町	平18.7.5	寛文9（1669）年の建造
草野家住宅	豆田町	平21.12.8	享保～明治初期の建造
吹上遺跡出土品	宇佐市（大分県立歴史博物館）	平22.6.29	弥生時代中期の武器、貝輪などの副葬品
【史跡】			
咸宜園跡	淡窓2	昭7.7.23	江戸後期～明治期にかけての私塾跡
穴観音古墳	内河町	昭8.2.28	古墳時代後期
廣瀬淡窓旧宅及び墓	中城町・豆田町	昭23.1.14	私塾・咸宜園を主宰 平成25(2013)年3月27日 追加指定・名称変更
法恩寺山古墳群	刃連町	昭34.5.13	古墳時代
ガランドヤ古墳	石井町3	平5.10.13	古墳時代後期、 平成4(1992)年9月9日追加指定
小迫辻原遺跡	大字小迫	平8.10.31	弥生～古墳時代
【天然記念物】			
小野川の阿蘇４火砕流堆積物及び埋没樹木群	鈴連町	平23.9.21	約9万年前の阿蘇４火砕流により埋没
【名勝】			
耶馬渓(一部)	東羽田町	大12.3.7	昭和11(1936)年7月14日 追加指定

【重要無形民俗文化財】			
日田祇園の曳山行事	隈地区・竹田地区・豆田地区	平8.12.20	7月20日以降の土・日曜日 平成28(2016)年 ユネスコ無形文化遺産登録
【重要無形文化財】			
小鹿田焼	源栄町皿山	平7.5.31	9軒の窯元
【国選定重要文化的景観】			
小鹿田焼の里	源栄町皿山・池ノ鶴地区	平20.3.28	平成22(2010)年2月22日 追加選定
【国選定重要伝統的建造物群保存地区】			
日田市豆田町 伝統的建造物群保存地区	豆田町他	平16.12.10	歴史的町並みと伝統的建造物群
【国登録有形文化財】			
井上家住宅　　8件	鶴河内町	平15.1.31	江戸時代後期～大正年間
岩尾家住宅（旧日本丸製薬所）3件	豆田町	平15.1.31	明治初期～昭和初期
隈まちづくりセンター黎明館 1件	隈2	平15.1.31	大正5(1916)年建築
後藤家住宅　　4件	隈2	平20.10.23	主屋は明治20(1887)年建築
山田家住宅　　4件	隈1	平20.10.23	主屋は文化13(1816)年建築
宇野家住宅　　1件	高瀬本町	平20.10.23	昭和2(1927)年建築
長善寺鐘楼門　1件	吹上町	平22.4.28	正徳3(1713)年建築
老松天満社　　4件	天瀬町	平22.9.10	本殿は明治31(1898)年建築
井上酒造店舗兼主屋　3件	大字大肥	平28.8.1	大正3(1914)年建築上棟
【国選択無形民俗文化財】			
豊後の水車習俗	鈴連町ほか	昭58.12.27	小野谷の水車習俗
大原八幡宮の米占い行事	田島町	平11.12.3	粥のカビの状態でその年の豊作等を占う
大分の鏝絵習俗	県内	平8.11.28	漆喰壁に鏝で白土や色土を浮彫りにして絵画的に表現したもの。

県指定・県選択

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【有形文化財】			
太刀　銘安綱	豆田町（廣瀬本家）	昭33.3.25	安綱の銘
石人（2体）	銭渕町	昭39.2.21	八女市岩戸山古墳出土
中村文書	豆田町（廣瀬本家）	昭41.3.22	筑前国怡土庄史料
蔵骨器	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭46.3.23	宇佐虚空蔵寺跡出土
軒先丸瓦	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭46.3.23	宇佐虚空蔵寺跡出土

木造阿弥陀如来坐像	大日町	昭47.3.21	応永10(1403)年の銘
老松天満社懸仏	前津江町大野	昭49.3.19	平安後期から鎌倉時代
金凝神社木造仮面	天瀬町本城	昭50.3.28	天狗、翁、鬼、河童の木製面四躯
烏宿神社鰐口	大山町西大山	昭51.3.30	「応年16（1409）年奉納・永正2（1505）年寄進」銘
老松神社銅鉾	日田市埋蔵文化財センター	昭51.3.30	長さ70ｃｍで弥生時代の銅鉾
山中薬師堂鰐口	天瀬町出口	昭51.3.30	「享徳2年霜月15日」陰刻銘
草三郎大神宮五輪塔婆附角塔婆	天瀬町馬原	昭51.3.30	「貞和3年3月」銘
玉来神社神像	天瀬町五馬市	昭54.5.15	鎌倉時代から室町時代に製作
森家五部大乗経	宇佐市（大分県立歴史博物館）	昭55.4.8	櫃に「応永23(1416）年」書体・室町時代の写本
岳林寺木造明極楚俊坐像	北友田1（市立郷土史料館）	昭56.3.31	南北朝時代
岳林寺絹本著色仏涅槃図	北友田1（市立郷土史料館）	昭56.3.31	室町時代
草野文書	豆田町	昭57.3.30	大友田原氏関係史料
日隈神社平縁細線式獣帯鏡	隈２（日田祇園山鉾会館）	昭58.4.12	中国漢代
大原八幡宮銅鉾	田島町	昭60.3.29	弥生時代後期
西雑谷笠塔婆附 石造塔婆(１基)	上津江町上野田	昭60.3.29	「元亀元(1570）年庚牛10月吉日」銘
石井神社銅鉾	隈２（日田祇園山鉾会館）	平1.3.30	弥生時代後期
朝日宮ノ原遺跡4号中世墓出土品	日田市埋蔵文化財センター	平7.3.10	青磁碗、湖州鏡など81点
ガランドヤ古墳出土品	日田市埋蔵文化財センター	平7.3.10	古墳時代後期
【史跡】			
川原隧道と石畳	天瀬町女子畑川原区	昭51.3.30	江戸末期、新たに築成・隧道長さ52ｍ
石坂石畳道	市ノ瀬町・伏木町	昭62.3.27	嘉永3(1850)年の築造
城山古墳	諸留町	平1.3.30	全長29.9ｍの前方後円墳
薬師堂山古墳	田島町	平2.3.29	古墳時代中期
吹上遺跡	大字小迫	平8.3.29	弥生時代中期
朝日天神山古墳	大字小迫	平16.3.30	古墳時代後期の前方後円墳2基
永山城跡	丸山２丁目	平28.2.23	江戸時代初期
【名勝】			
伝来寺庭園	中津江村栃野	昭45.3.31	伝来寺建立以前に築造

【天然記念物】			
津江神社のスギと自然林	中津江村合瀬	昭50.3.28	日田杉の元祖
高塚愛宕地蔵のイチョウ	天瀬町馬原	昭51.3.30	雄株で大小20数本の集合株
鞍形尾神社の自然林	天瀬町馬原	昭56.3.31	神社の北西背後地約1ヘクタール
【無形民俗文化財】			
磐戸楽	三ノ宮1	昭41.3.22	大行事八幡宮の秋祭り 通称「かっぱおどり」
鵜飼	竹田地区	昭41.3.22	5月中頃から10月中頃
大野楽	前津江町大野	昭41.3.22	河童の動作を演技化した雅楽の一種
本城くにち楽	天瀬町本城	昭42.3.31	10月中旬の土日
大原八幡宮御田植祭	田島町	昭59.3.30	4月15日実施
【県選択無形民俗文化財】			
老松様の餅搗祭	中津江村合瀬	昭50.3.28	戦いの様子を模した祭り(7月15日)
老松様の的ほがし祭	中津江村合瀬	昭50.3.28	五穀豊穣と家内安全を祈願(4月15日)

市指定

区分、名称又は物件	所在地	指定年月日	摘要（年代ほか）
【有形文化財】			
開山頂相 （普門寺木造笑巌和尚坐像）	北友田1（市立郷土史料館）	昭47.6.12	応永16(1409)年の銘
龍林寺木造薬師如来坐像付・ 龍林寺薬師如来縁起版木	財津町	昭50.3.28	平安時代後期
石憧	上野町	昭50.3.28	長禄4(1460)年の銘
永平寺跡板碑	高瀬本町	昭50.3.28	応長元(1311)年等の銘
絹本着色明極楚俊坐像	北友田1（市立郷土史料館）	昭55.2.13	室町時代
宝篋印塔	神来町	昭57.5.11	貞和3(1347)年の銘
大原八幡宮	田島町	平1.11.22	楼門、拝殿、幣殿、本殿
大般若波羅密多経	田島町	昭47.6.12	神宮寺、写経600巻
吹上観音坐像	吹上町（吹上神社）	昭50.6.10	平安時代後期
玉来神社拝殿と棟札	天瀬町五馬市	昭51.11.20	神殿を含め80アール・棟札に「応仁2（1468）年」銘
宝筐印塔	中津江村合瀬	昭51.11.1	鎌倉時代作・高さ約1.37m、笠は上部5段、下部2段
間地橋	中津江村栃野・合瀬	昭51.11.1	中津江村内で唯一の石造アーチ橋

先祖元、五輪塔（３基）	上津江町上野田	昭54.7.26	風化作用等により形や文字等全く判明せず
十一面観世音菩薩座像（１体）	上津江町上野田	昭54.7.26	「天文17(1548)年創立」墨書銘
木造釈迦三尊像(附) 釈迦如来像奉篭物	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	康永2(1343)年
木造大日如来坐像	山田町	昭55.9.3	天文10(1541)年の銘
木造毘沙門天立像	山田町	昭55.9.3	天文16(1547)年の銘
紙本墨書明極墨蹟	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	南北朝時代
岳林寺文書	北友田１（市立郷土史料館）	昭55.2.13	慶長～明治
紙本西国筋郡代陣屋絵図	隈1	昭57.5.11	文化14年～天保4年頃
大野老松天満社逆修塔	前津江町大野	昭57.9.21	地輪、水輪、火輪にはそれぞれ四方に梵字
懸仏（御前嶽神社）	前津江町柚木	昭57.9.21	平安後期から鎌倉時代、13面
木造薬師三尊像	南友田町	昭58.7.13	平安時代
金銅筒臑当	宇佐市(大分県立歴史博物館)	昭58.7.13	鎌倉時代
方格規矩鏡片	田島町	昭58.7.13	草場遺跡出土
須恵器子持高坏	吹上町	昭58.7.13	(伝)北友田横穴墓出土
浦宮神社「拝殿・神殿」	上津江町川原	昭58.6.28	拝殿は入母屋造り・神殿は流造り
浦宮神社「せり持ち式石橋」	上津江町川原	昭58.6.28	旧参道北側の谷川
宝筐印塔	前津江町柚木	昭61.3.17	総高55cm余り・南北朝ないし室町時代造立
大友書状	日田市埋蔵文化財センター	昭61.3.17	前津江町柚木に残る天正12年以降に贈ったもの
百姓日記	日田市埋蔵文化財センター	昭61.3.17	前津江町柚木に残る元禄より宝暦まで60年間の記録
穴井家古文書一巻	北友田1（市立郷土史料館）	昭62.4.20	延享3（1746）年の直訴状、会合証文の写し
有田古墳出土一括遺物	本町	平1.11.22	古墳時代
大乗妙典経	前津江町柚木	平2.3.8	妙法蓮華経八巻・正徳5（1714）年奉納
岳林寺木造弥勒菩薩坐像	北友田１（市立郷土史料館）	平3.3.30	応永30(1423)年作
世尊寺木造薬師如来坐像他２体	諸留町	平4.3.10	天文16(1547)年、弘治3(1557)年
内河野村古絵図	日田市埋蔵文化財センター	平4.3.10	江戸時代
四季農耕図絵馬	前津江町柚木	平11.10.25	横長の画面に稲作の行程等を描写
中西村・梅野村の絵地図	中津江村合瀬	平11.4.7	延宝5年（1677）梅野村庄屋七郎兵衛外3人により作成
天井絵馬	前津江町柚木	平12.12.8	享保時代
像代	前津江町大野	平12.12.8	神や人の代わりに祭るもので人形に作られた木像
どうぼう様（藤房様４体）	前津江町柚木	平13.11.14	南北朝時代

元大原神社	神来町	平14.3.7	神殿、幣殿、拝殿、水盤舎、神輿蔵　宝暦10（1760）年再興
求来里笠塔婆	神来町	平14.3.7	観應元（1350）年墨書銘
木造釈迦如来立像	北友田１（市立郷土史料館）	平23.3.31	鎌倉時代
伝姫塚古墳出土鉄剣（蛇行剣）	日田市埋蔵文化財センター	平23.5.31	古墳時代
木造阿弥陀如来坐像	高瀬本町	平28.3.25	鎌倉時代後期
【有形民俗文化財】			
おきあげ人形製作資料	有田町	令1.7.25	明治後期から昭和中期頃までに作られたおきあげ人形と下絵及びその製作用具
【無形民俗文化財】			
有田町若八幡社やっこ振り行列	有田町	平3.3.30	若八幡社秋祭り(10月下旬)
出口本村楽	天瀬町出口	平6.4.29	隔年10月24，25日
出口袋七夕楽	天瀬町出口	平6.4.29	隔年10月24，25日
五馬楽	天瀬町五馬市	平6.4.29	10月26、27日
烏宿神社はだか参り	大山町西大山	平25.3.28	12月14日夜に締め込み姿の男衆が参道を駆ける
【史跡】			
丸山古墳	城町2	昭47.6.12	古墳時代中期
片山磨崖種子	北友田2	昭50.3.28	康永3(1344)年の銘
惣田塚古墳	琴平町	平1.11.22	古墳時代後期
三郎丸古墳	北友田2	平1.11.22	古墳時代後期
菊池七人塚	中津江村合瀬	昭51.11.1	塚は2m四方程で自然石を7個環状に立てている
御所跡と御所の谷	中津江村合瀬	昭51.11.1	御所跡は200㎡程の平坦地
年の神境内地伝、相垣越前守の墓（１基）	上津江町上野田	昭54.7.26	「間部越前守義直」の供養塔
台の殿様屋敷跡	前津江町大野	昭57.9.21	津江殿の館跡
平島古墳	諸留町	平1.11.22	古墳時代後期
木地師半兵衛・徳兵衛の墓（２基）	上津江町川原	平1.7.5	表面上部に菊の御紋とみられる印
宇土遺跡３号墳	天瀬町五馬市	平3.10.29	古墳時代（5世紀中頃～後半）
筑前台岩木塁遺跡	天瀬町馬原	平3.10.29	山頂2000㎡
牧原千人塚	桃山町	平7.3.31	室町時代
小竹供養塔（１基）	上津江町川原	平11.8.9	土台5cm～30cm大の高まりの上に正面西向き

姫塚古墳	高瀬本町	平19.3.29	古墳時代中期の円墳
台神社前旧往還石畳道	天瀬町女子畑台	平28.3.25	旧往還石畳道　約41m
【天然記念物】			
むらくもの松	隈2（八坂神社）	昭47.6.12	樹齢300年以上
台神社の森	天瀬町女子畑台	平28.3.25	旧日田往還添い・熊野神社の境内林
見竹天満宮の天満かつら	天瀬町出口	昭54.3.20	胸高樹周4.5m、樹高推定20m余、樹齢不詳
年の神境内地樹林（26本）	上津江町上野田	昭54.7.26	カヤの推定樹齢は500年以上
浦宮神社境内地 「樹林・下草シダ類」	上津江町川原	昭58.6.28	県の特別保護樹林「津江大杉の森」と指定
ユズリハ自然林	前津江町大野	昭61.3.17	ユズリハを優占種とする自然林
桂の木	前津江町柚木	平2.3.8	幹周り10m、樹高20mの雌の桂
烏宿自然林	大山町西大山	平4.9.18	森林構成樹種約158種
銀杏の木	中津江村栃野	平9.1.27	樹齢600年（推定）
杉	前津江町柚木	平12.12.8	樹齢600年（推定）
ズミの群生地	伏木町	平15.3.26	自生の南限地
エドヒガンザクラの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢300年（推定）
ムクの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
手水野のカツラ林	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
小平のカツラ林	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
モミの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
スギの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢120年（推定）
イチョウの木	上津江町川原	平16.10.8	樹齢不明
モミジの木	上津江町上野田	平16.10.8	樹齢不明
アカマツの木	上津江町上野田	平16.10.8	樹齢約90年(推定)

※表は令和６年３月末日時点。

２．文化財の指定解除

市指定天然記念物「クスの木」

①文化財の概要

・指定年月日：平成 16 年 10 月８日

・形　状　等：樹齢：不明　幹周：2.79m　樹高 25m(推定)

枝張：北 12m、南 10m、西 10m、東 15m

・所　在　地：日田市上津江町川原 82 番地１

②解除理由

平成 16 年に天然記念物の指定を受けて管理してきたクスノ木について、令和５年３月 18 日に根元部分にある八重桜を根元から伐採する予定であったが、誤ってクスノ木を根元から伐採したもの。延命は困難であるため、所有者から滅失届が提出され、令和５年３月 18 日に指定解除となった。

[伐採前]

[伐採後]

市指定有形民俗文化財「精米用箱水車」

①文化財の概要

・指定年月日：平成元年 11 月 22 日

・形　状　等：竿の両端に水受けの木箱が付き、桶から流れる水を木箱で受け、溜まった水の重さで片方の木箱が下がり、惰性で半回転して、片方の木箱が水を受ける仕組み。竿の長さ 2.0m、木箱の容量 16.16、芯棒の長さ 2.4m

・所　在　地：日田市大字小野字鳥越 2174 番地

②解除理由

平成 29 年九州北部豪雨による被災後、市文化財保護課職員による現地確認を行い、木箱など水車部分が損壊していたものの、水車小屋外観等が残っていたため、指定解除に係る手続きは行われなかった。しかしながら、令和５年の大雨により、損壊部分が拡大し、今後文化財としての復旧が困難となることや、また所有者としても復旧する意思がないことから、滅失届が提出され、令和６年３月 29 日に指定解除となった。

[被災前]

[被災後]

Ⅲ．普及・啓発

Ⅰ．文化財講演会

市内に遺されている様々な文化財を、調査・把握し、総合的、一体的に捉え、観光などの他の分野とも連携し、地域総がかりで将来への保存・活用につなげていくため「文化財保存活用地域計画」の作成を進めており、これにあわせて「文化財講演会」を開催した。

講演会では、別府大学特任教授で日田市文化財保存活用地域計画協議会長の飯沼 賢治先生に「地域の文化財（たから）を活かした新しいまちづくりの展望」と題し、日田の歴史文化の特徴を示すとともに、文化財の保存・活用に向けた取組については、地域住民が主体になることの必要性について、講演していただいた。

文化財講演会

演題

地域の文化財(たから)を活かした新しいまちづくりの展望

講師

別府大学特任教授
日田市文化財保存活用地域計画協議会長

飯沼 賢司 氏

日時　令和６年３月 24 日（日曜日）
午後１時 30 分～午後３時

場所　市役所７階大会議室

募集定員　70 名（先着順）

【受講申込先】

日田市教育庁 文化財保護課 文化財管理係へ
電話　24-7171（直通）　FAX　24-7024
E-mail　bunko@city.hita.lg.jp
＊お申込みの際は、氏名・住所・電話番号をお伝えください。

【申込期限】

令和６年３月 22 日（金曜日）午後５時まで

講演会チラシ

文化財講演会風景

２．古文書入門講座

市民に向けて、古文書を通じて日田市や大分県の歴史と文化に触れる機会を作ることを目的に、古文書の読み解きについて未経験者の方にも、初歩から分かりやすく解説する初心者向けの入門講座を開催した。

開催場所 ： 日田市役所本庁７階大会議室ほか
開 催 日 ： 令和５年 10 月 18 日（水）～令和５年 11 月 22 日（水）
（6 回開催）
受講者数 ： 43 名　※申込者数

[講義内容]

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	10月18日（水） 14：30～16：00	「古文書に親しむ」	大分県立先哲史料館職員 久保 修平 氏	36
第2講	10月30日（月） 14：30～16：00	「戦国期日田の古文書をよむ」	大分県立先哲史料館職員 松尾 大輝 氏	39
第3講	11月4日（土） 10：00～17：00	【バス研修】 秋季企画展「大友文書の世界」見学 記念講演会　参加	大分県立先哲史料館	19
第4講	11月6日（月） 14：30～16：00	「耶馬渓・山国地方の天領の村々」	中津市歴史博物館職員 三谷 紘平 氏	31
第5講	11月16日（木） 14：30～16：00	「近世日田の古文書をよむ」	大分県立先哲史料館職員 佐藤 香代 氏	38
第6講	11月22日（水） 14：30～16：00	「近代の書簡をよむ」	大分県立先哲史料館職員 松原 勝也 氏	36

講師：松原 勝也 氏

講師：三谷 紘平 氏

バス研修（大分県立先哲史料館見学）

バス研修（記念講演会参加）

３．考古学講座「タイムトリップひた vol.21」

「考古学」や「郷土の歴史」に対する関心を深め、身近な遺跡や埋蔵文化財への興味とその保護の必要性への理解を高めることを目的として実施。

令和５年度講座は、令和４年度に実施した発掘調査で縄文時代の遺跡が確認されたことから、縄文時代とはどういった時代であったのか、４回の講座とバスツアー１回の計５回の講座を開催した。

開催場所 ： 日田市役所本庁７階中会議室ほか

開 催 日 ： 令和５年 10 月 11 日（水）～令和５年 11 月 22 日（水）
（５回開催）

受講者数 ： 40 名　※申込者数

[講義内容]

	日　時	内　容	講　師	受講人数
第1講	10月11日（水） 18：00～19：30	「九州、おおいた縄文文化について」	九州大学総合博物館 助教 福永 将大氏	36
第2講	10月25日（水） 18：00～19：30	「おおいた北部（中津平野)の縄文遺跡 法垣遺跡を中心に」	中津市教育委員会 浦井 直幸 氏	36
第3講	11月8日（水） 17：30～19：00	「おおいた西部(日田盆地)の縄文遺跡」	日田市教育庁文化財保護課 上原 翔平	30
第4講	11月15日（水） 12：00～17：00	【バス研修】 おおいた南部(佐伯・豊後大野) の縄文遺跡	大分県立埋蔵文化財センター 横澤 慈 氏	24
第5講	11月22日（木） 18：00～19：30	「おおいた中部(大分平野)の縄文遺跡 横尾貝塚を中心に」	大分市教育委員会 小野 綾夏 氏	27

講師：福永 将大 氏

講師：小野 綾夏 氏

講師：日田市職員

バス研修（大分県立埋蔵文化財センター）

４．日田市埋蔵文化財センター企画展

「じょうもん（JOMON）-大山川の縄文遺跡-」

令和 3･4 年度に発掘調査を行った鎌手遺跡では、土偶などの縄文時代の遺物が多数出土した。また、近年、大山川周辺の縄文遺跡調査事例が増えていることから大山川流域の縄文遺跡、特に後期（約 4,000～3,000 年前）に絞って出土遺物やパネルなどの展示を行った。

開催場所 ： 日田市埋蔵文化財センター企画展示室

開催期間 ： 令和 5 年 10 月 10 日（火）～令和 6 年 3 月 29 日(金)

展示遺跡 ： 出口遺跡、鎌手遺跡、中川原遺跡、手崎遺跡、上井手遺跡

５．講師派遣、視察・見学対応

月日	派遣・依頼先	内容	対応者
4月28日	韓国康津郡（カンジングン）守視察	豆田町伝統的建造物群建造物保存地区事業の説明、保存地区の視察	田中
5月29日	ゆめさが大学OB歴史探訪クラブ	日田市立郷土史料館の見学・説明	若杉
5月25日	個人	小鹿田焼陶芸館の見学・説明	田村
6月15日	日田市三花公民館	三花を知る講義：第1講（三花地区の遺跡、出土品について解説）	上原
9月7日	日田市三芳公民館	「法恩寺山古墳群見学」対応 （三芳公民館6年生） 「地元文化財の学習」として	行時 上原 髙山
9月29日	大分県立日田支援学校	自然体験学習（火おこし体験）	上原
10月3日	高瀬公民館	高瀬史編修委員会 講師、展示見学	行時
10月27日	天瀬公民館	天瀬歴史探訪現地見学 (宇土古墳3号墳、玉来神社) 説明	上原
11月22日	沖縄県景観行政視察	豆田町伝統的建造物群建造物保存地区事業の説明、保存地区の視察	田中
12月6日	大分県立埋蔵文化財センター	考古学講座第5講「日田・玖珠の装飾古墳」講師	渡邉
12月7日	高瀬公民館	高瀬ふるさと探訪 講師、現地見学 (姫塚古墳、惣田塚古墳ほか)	行時
12月8日	三隈中学校総合学習	豆田町伝統建造物保存地区フィールドワーク	林・ワトソン
12月12日	日隈小学校	小鹿田焼陶芸館の見学・説明	加藤
12月16日	日田考古学同好会	日田考古学同好会学習会 講師	上原
12月18日	韓国横城郡（フェンソングン）教育庁視察	豆田町伝統的建造物群建造物保存地区事業の説明、保存地区の視察	田中
12月20日	玖珠町歴史学級	玖珠町歴史学級の学習会 講師	上原
1月22日	韓国潭陽郡（タミャングン）視察	豆田町伝統的建造物群建造物保存地区事業の説明、保存地区の視察	田中
2月16日	前津江小学校4年生・一般社団法人NINAU	小鹿田焼陶芸館の見学・説明	加藤
2月26日	三芳小学校4年生	小鹿田焼陶芸館の見学・説明	横尾
2月29日	東渓小学校4年生	小鹿田焼陶芸館の見学・説明	加藤

高瀬公民館（高瀬ふるさと探訪）

玖珠町歴史学級（おおいた西部の縄文遺跡）

韓国康津郡（カンジングン）視察
（豆田町伝統的建造物群建造物保存地区事業の説明、
豆田地区の視察）

6．施設・文化財等見学者

文化財名・施設名ほか		年間見学者数
旧矢羽田家住宅		5
慈眼山永興寺仏像収蔵庫		525
日田市立郷土資料館		254
天瀬ふるさと資料館		131
前津江郷土文化保存伝習施設		135
小鹿田焼陶芸館		12,821
行徳家住宅		280
豆田まちづくり歴史交流館		15,203
埋蔵文化財センター		541
ガランドヤ古墳公園	ガイダンス棟	1,141
	1号墳	541
咸宜園跡		7,601
鵜飼（鵜小屋）		2

※ガランドヤ古墳公園はセンサーによるカウントの為実際とは誤差あり。

旧矢羽田家住宅

ガランドヤ古墳石室見学風景

７．文化財防火デー

令和６年１月 26 日は「第 70 回文化財防火デー」である。

文化庁と消防庁は、文化財を火災、震災その他の災害から守るとともに、全国的に文化財防火運動を展開し、国民一般の文化財愛護に関する意識の高揚を図ることを目的に、法隆寺金堂の焼損した日であること、１月と２月が１年のうちで最も火災が発生しやすい時期であることから、１月 26 日を「文化財防火デー」と定めている。

日田市においても、文化財を守るため、所有者や地域住民、関係機関、団体の協力によって、非常災害時の迅速な防火・防災体制を確立するため、毎年１月に文化財防火訓練を実施しており、令和５年度は、国指定重要文化財「行徳家住宅」と、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「豆田町」にて以下のとおり行った。

① 国指定重要文化財「行徳家住宅」防火訓練

［日　時］　令和６年１月 26 日（金）10 時 30 分～11 時 45 分

［主催者］　日田市教育委員会

［内　容］　第一発見者による消防署への通報、見学者の避難誘導及び近隣住民による初期消火活動を想定した訓練を実施。住民による消火器の操作訓練も実施。

［場　所］　行徳家住宅

［参加者］　夜明関町自治会及び地域住民、日田玖珠広域消防組合日田消防署
有限会社 加藤電工、市文化財保護課職員

訓練風景（行徳家）

放水訓練風景

消火器操作訓練風景

②「日田市豆田町伝統的建造物群保存地区」防火訓練

［日　時］　令和６年１月 26 日（金）10 時 00 分～11 時 30 分

［主催者］　豆田町伝建保存会

［内　容］　豆田町伝建保存会の自主防災組織による非常災害時の連絡網を利用した伝達訓練を実施。また、既存施設の防火水槽や屋外消火栓の設備点検、AED の操作方法の講習を行った。

［場　所］　豆田まちづくり歴史交流館・豆田町伝統的建造物群保存地区内

［参加者］　豆田町伝建保存会及び地区住民（22 人）・市文化財保護課職員

訓練風景（豆田町）

放水訓練風景

屋外消火栓点検風景

AED 操作講習風景

Ⅳ．資料収集・保存

図書

・令和５年度に各団体から寄贈を受けた図書

総数 534 冊

（内訳：文化財機関 24 冊、大学 39 冊、博物館 41 冊、都道府県教育委員会 126 冊、市町村教育委員会 282 冊、

その他 22 冊）

・令和５年度購入図書

下記の月刊誌を定期購読

・月刊文化財　　・月刊考古学ジャーナル　　・文化財発掘出土情報

下記の月刊誌の１月号のみを購入。

・積算資料　　・建設物価　　・建築施工単価　　・建築コスト情報

Ⅴ．その他

① 資料閲覧

受付月日	閲覧日	資料名	内容	申請者	目的
5月16日	5月31日	朝日天神山古墳1号墳 水晶製三和玉 朝日天神山古墳1号墳 石枕 朝日天神山古墳2号墳 大型平底壷 朝日天神山古墳2号墳 石製表装品 伝 姫塚古墳　蛇行剣 尾漕2号墳 素環頭太刀 ガランドヤ古墳1号墳 轡 ガランドヤ古墳1号墳 鞍、鈸具、飾金具 法恩寺4号墳 鈴雲珠	塾覧、写真撮影	大分県立埋蔵文化財センター	企画展の事前調査
11月20日	11月24日	朝日天神山古墳2号墳 大型平底壷	塾覧、写真撮影	大分県立埋蔵文化財センター	須恵器大型平底壷の調査研究のため
2月5日	2月11日	朝日天神山古墳2号墳 大型平底壷	資料の実見・調書の作成、及び必要に応じて計測・写真撮影	東京国立博物館	令和5年度 科学研究費補助金による調査のため

② 掲載申請

受付月日	資料名	借用･貸出先	目的
4月1日	廣瀬家空撮、森家絵図、永山城と布政所、 紙本西国郡代陣屋絵図、廣瀬家住宅の土地建物変遷図、 史跡咸宜園跡、長福寺本堂、	個人	ガイダンス映像に使用するため
4月14日	令和3年度 日田市埋蔵文化財年報	日田市考古学同好会	会報『比多考古』作成のため
4月17日	筑後軌道豆田駅転車台跡 犬釘 報告書画像データ 平成23年度日田市埋蔵文化財年報	大分県立埋蔵文化財センター	令和5年度特集展「鉄道の考古学」の展示及び写真に利用するため
5月24日	令和3年度日田市埋蔵文化財年報 史跡咸宜園跡	日田インターネット協議会	ホームページ掲載のため
7月10日	平成6年度日田市埋蔵文化財年報 掲載写真	日田市三花公民館	三花公民館報「広報みはなNo.155」に掲載するため
8月9日	朝日天神山古墳1号墳 水晶製三和玉 朝日天神山古墳1号墳 石枕 朝日天神山古墳2号墳 大型平底壷 伝 姫塚古墳 蛇行剣 尾漕2号墳 素環頭太刀 ガランドヤ古墳1号墳 轡	大分県立埋蔵文化財センター	令和5年度企画展「九州･おおいたの古墳文化」の展示のため
10月13日	史跡永山城跡 -史跡永山城跡災害復旧事業報告書- 掲載写真	日田市商工観光部観光課	日田天領祭りのパンフレット掲載のため
11月16日	史跡小迫辻原遺跡 保存活用計画 掲載写真	KCVコミュニケーションズ株式会社	ニュース番組「ニュースウィークリー」で利用するため
2月19日	『吹上Ⅵ -6次調査の記録-』掲載写真	株式会社KADOKAWA	松木武彦『古墳』に掲載するため
3月21日	ガランドヤ古墳1号墳保存施設外観写真	個人	進撃の巨人コラボグッズに掲載するため
3月26日	令和4年度 日田市埋蔵文化財年報	日田市考古学同好会	会報『比多考古』作成のため

③ 資料貸出

受付月日	貸出期間	資料名	借用・貸出先	目的
8月17日	8月29日～9月4日	火おこし道具一式（2セット）	大分県立日田支援学校	事前学習として
8月17日	10月13日～12月27日	朝日天神山古墳1号墳 水晶製三和玉 朝日天神山古墳1号墳 石枕 朝日天神山古墳2号墳 大型平底壷 伝 姫塚古墳　蛇行剣 尾漕2号墳 素環頭太刀 ガランドヤ古墳1号墳 轡	大分県立埋蔵文化財センター	令和5年度企画展「九州・おおいたの古墳文化」の展示のため

Ⅵ．文化財保護課事業の概要

１．【文化財管理係】

①　文化財保存活用地域計画作成事業

市民共有の財産である文化財の総合的な保存･活用を図るため「日田市文化財保存活用地域計画」の作成を行い、令和5年は計画書の素案が完成した、

②　指定文化財等保存補助事業

国指定重要文化財、国指定史跡の管理費と無形文化財、無形民俗文化財の保存・継承に対する補助を行った。

③　鵜飼保存対策事業

県の無形民俗文化財に指定されている「日田の鵜飼」の保存・伝承・活用に必要な経費の一部補助を行った。

④　文化財公開施設害虫防除対策事業

文化財の公開施設において、文化財に対する有害生物の侵入・生息状況や動向を把握するモニタリング調査と、その調査結果により燻蒸（殺虫、防虫等）等業務を計画的に実施することにより、貴重な文化財の被害の防止を行うもの。令和５年度は日田市立郷土史料館と天瀬ふるさと資料館の燻蒸作業を行った。

[刊行物の刊行]

日田文化 66 号（A4 版全 77 頁）

［内容］日田市の歴史や文化について調査･研究した成果と令和 4 年度の文化財保護課の業務内容を収録。

２．【埋蔵文化財係】

①　ガランドヤ古墳群保存整備事業

国の史跡に指定されているガランドヤ古墳群の適切な保存及び活用を図るため、史跡公園として整備を行うもので、令和5年度は2号墳の環境調査の委託業務を実施した。

②　ガランドヤ古墳群公園維持管理事業

国の史跡に指定されているガランドヤ古墳群の保存整備を進め、市民等の歴史学習の場として活用を行った。（施設見学者の詳細は 85 ページ下段の表参照）

③　史跡咸宜園跡保存整備事業

国の史跡に指定されている咸宜園跡としての活用を図るため、これまで未整備であった西家側の各種調査成果をもとに、咸宜園跡の各種計画を定め、西家側の整備を進めるもので、『史跡咸宜園跡保存活用計画』を策定した。

計画書では、史跡咸宜園跡の現状と課題を把握し、本質的価値とその構成要素を明らかにし、その適切な保存と活用方法、さらには将来的な整備の方向性を取りまとめた。また、史跡咸宜園跡の望ましい将来像として大綱とそれらを達成するための4つの基本方針［保存（管理）･活用･整備･管理運営］を定め、それぞれの項目で方向性と課題解決に向けた方法について検討している。

④　史跡小迫辻原遺跡整備事業

国の史跡に指定されている小迫辻原遺跡としての活用を図るため、昭和 62 年から平成 28 年までに行った発掘調査成果をまとめた報告書を作成するための整理作業を実施するもので、令和5年度は史跡の東側で出土した遺物の整理作業や出土遺物の実測等の委託業務を行った。

⑤　史跡小迫辻原遺跡保存管理事業

国の史跡に指定されている小迫辻原遺跡の維持管理のため、大分県酪農組合日田支所と覚書を締結し、除草などを行った。また、地元のボランティアや小学生と「花畑プロジェクト」として、菜の花の種まきイベントを実施した。

⑥　日田市歴史読本発行事業

日田市の歴史や文化財について、子どもたちに興味と感心を持ってもらうために、子ども向けの歴史読本を作成、配布した。

[発掘調査関係]

▼各種開発（確認・試掘）

1）埋蔵文化財の所在の有無に関する文書及び文化財保護法の規定による届出・通知

民間開発・・・170 件

公共事業・・・44 件（うち市公共 29 件、県公共 15 件）

2）開発に伴い市教委が実施した予備調査（確認調査・試掘調査・立会調査）

民間開発・・・22 件

公共事業・・・1 件（うち市公共 1 件、県公共 0 件）

▼本発掘調査（公共事業）

1）奥谷遺跡（新清掃センター・進入路建設に伴う発掘調査）

日田盆地の北を区切る山田原台地の北側、奥谷川沿いに広がる狭い谷で、古墳時代～古代末に営まれた竪穴住居や掘立柱建物からなる小集落（A～D 区）と、中世の墓と考えられる土坑（E 区）が確認された。着目すべき点として、竪穴住居のカマドから瓦が 2 点出土しており、谷あいの小集落では初例である。

[報告書の刊行]

1）令和４年度（2022 年度）日田市埋蔵文化財年報（A4 版全 24 頁）

［内容］令和4年度の埋蔵文化財関係の業務内容を所収。

2）鎌手遺跡（日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 144 集）（A4 版全 24 頁）

［内容］店舗建設工事に伴い実施した鎌手遺跡の発掘調査成果を所収。

3）史跡咸宜園跡保存活用計画遺跡

(A4 版全 115 頁)

［内容］国の史跡に指定されている「咸宜園跡」の将来的な整備の方向性について所収。

３．【町並み保存係】

①　伝統的建造物群保存事業

歴史的な町並みを維持するために、経年劣化した建造物等の修理事業や防災事業として、初期消火に有効な屋外消火栓の設置に取組もので、令和5年度は修理事業に対する補助と、屋外消火栓の設置箇所の見直しに係る計画の見直しを行った。

［修理］　修理補助2件　草野家長屋（A 棟）、末武家主屋

［防災］　伝建地区防災まちづくり計画の一部見直し

※ 屋外消火栓の設置箇所の見直し（増設）

②　史跡廣瀬淡窓旧宅及び墓保存整備事業

国の史跡に指定されている廣瀬淡窓旧宅及び墓のうち、旧宅エリアの経年劣化の著しい建築物の保存整備に平成 27 年度から所有者が取り組んでおり、市が補助金を交付するとともに、業務支援を行っているもので、令和５年度は南家主屋保存修理工事の実施設計を行った。

日田文化　第六十七号

令和七年六月掲載

編集・発行　日田市教育委員会　文化財保護課

〒八七七－八六〇一

大分県日田市田島二丁目六－一